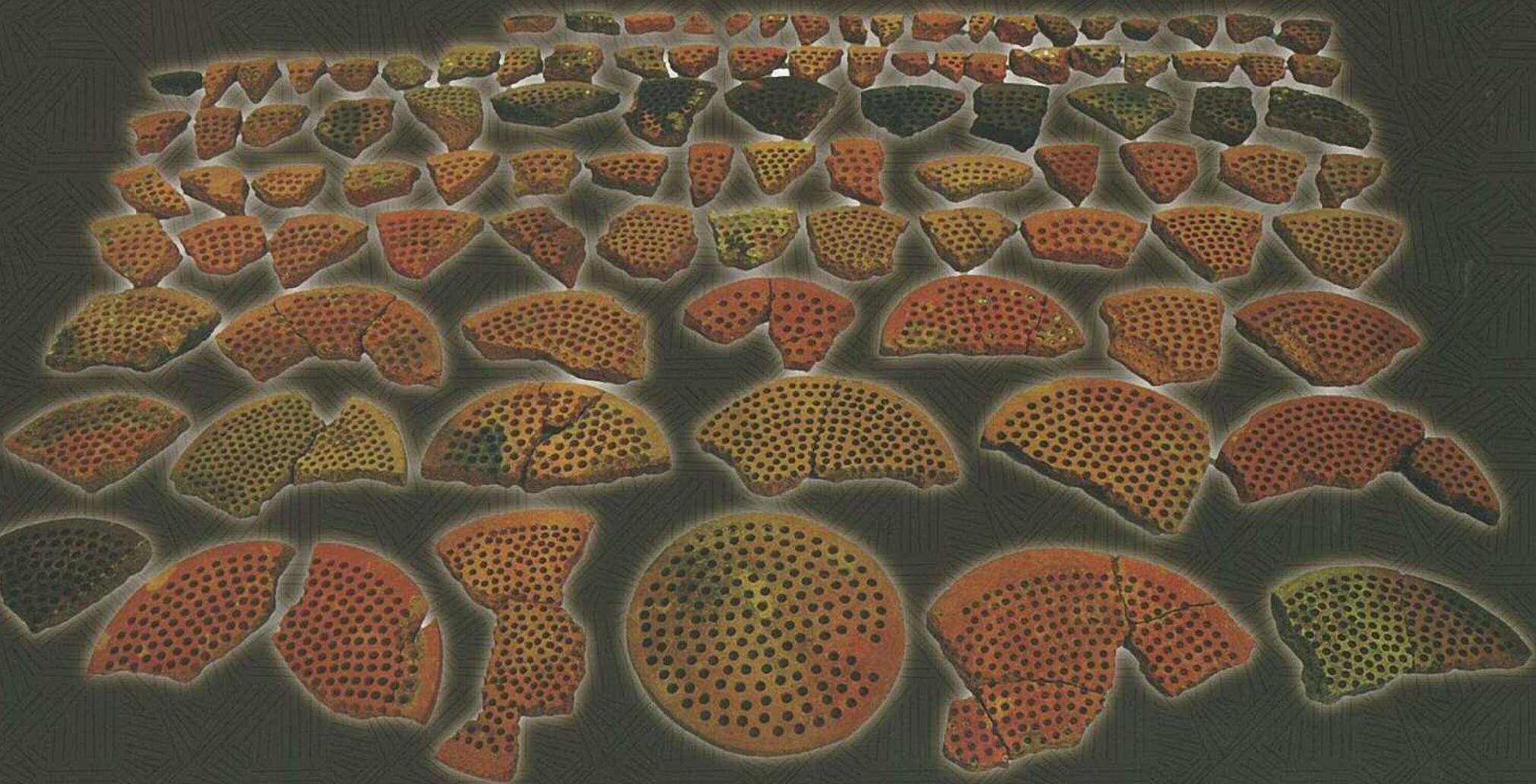


# 本庄市の遺跡と出土文化財



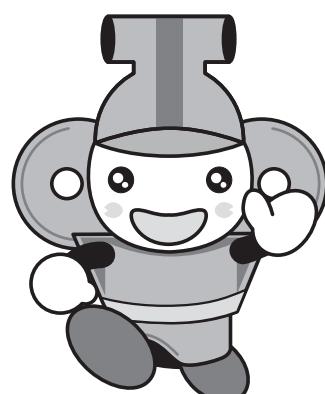
小島前の山古墳出土の笑う盾持人物埴輪



薬師堂東遺跡出土のガラス小玉鋳型

本庄市教育委員会

# 本庄市の遺跡と出土文化財



本庄市マスコット  
**はにぽん**

2 0 1 6

本庄市教育委員会

# 序

郷土本庄の恵まれた風土を舞台として繰り広げられた先人たちの歩みは、いま遺跡となって、私たちの足もとに眠っています。

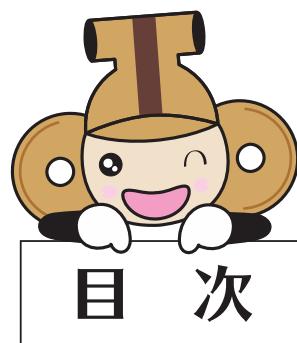
市内には、500か所を超える遺跡があり、本庄市教育委員会では、様々な開発に伴って消滅の危機にある遺跡を記録にとどめ、後世に伝えるべく、長年発掘調査に取り組んでまいりました。その結果、多くの遺跡が「調査報告書」という記録となって保存されています。それらの内容をわかりやすく紹介するために企画したのが、本書「本庄市の遺跡と出土文化財」です。本書には、今日までの膨大な調査成果の中から、郷土史を語る上においても、また日本史、アジア史を研究する上においても、特に重要な遺跡と出土遺物を選択し、年代順に収録しています。

普段は意識をしないことですが、私たちが送る日々の生活も、太古から郷土に暮らした先人たちの長い歴史の積み重ねの上に成り立っています。本書をご一読いただければ、石器のひとつひとつ、土器の一片一片が、今を生きる私たちの存在に、さらには私たちの子孫へつながっているということをあらためて実感いただけるのではないかでしょうか。そしてまた、ここに紹介した調査成果の多くが、開発によって消え去った幾多の遺跡と表裏の関係にあるということも、忘れないように心がけたいものです。

本書は市民の皆さまの郷土学習資料として企画された「本庄市郷土叢書」の一冊として刊行いたしました。多くの方々に本書を手に取っていただき、教育の現場や郷土の学習、地域の研究に携わる皆さんに広くご活用いただければ幸いに存じます。

平成28年3月

本庄市教育委員会  
教育長 勝山 勉



序

目次・例言

## I 本庄市の遺跡とその概要 ..... 1

## II 旧石器・縄文・弥生時代

- |                                    |   |
|------------------------------------|---|
| 1. 児玉郡市ではじめての旧石器時代石器群 - 浅見山Ⅰ遺跡 -   | 2 |
| 2. 縄文時代早期の丘陵上の遺跡 - 浅見山Ⅰ遺跡 -        | 4 |
| 3. 縄文時代の並ぶ大規模環状集落 - 将監塚・古井戸・新宮遺跡 - | 6 |
| 4. 弥生時代中期後半の土坑群 - 浅見山Ⅰ遺跡 -         | 8 |

## III 古墳時代

- |  |    |
|--|----|
| 1. 本庄市最古の前方後方墳 - 北堀新田前遺跡 -               | 10 |
| 2. 大型古墳の出現 - 鷺山古墳 -                      | 12 |
| 3. 多彩な石製模造品を出土した古墳 - 万年寺つつじ山古墳 -         | 14 |
| 4. 古墳時代中期の大型円墳 - 金鑽神社古墳・生野山將軍塚古墳・公卿塚古墳 - | 16 |
| 5. 笑う埴輪たち - 小島前の山古墳 -                    | 18 |
| 6. 古代ペルシアのガラス玉 - 長沖203号墳 -               | 20 |
| 7. 横穴式石室と二重堀が残る円墳 - 秋山庚申塚古墳 -            | 22 |
| 8. 古墳時代後期の埴輪製作遺跡 - 寝勝寺裏埴輪窯跡 -            | 24 |

## IV 古代

- |                                       |    |
|---------------------------------------|----|
| 1. 日本最多のガラス小玉鋳型が出土 - 薬師堂東遺跡 -         | 26 |
| 2. 律令時代の帶金具を出土した古墳 - 下野堂開拓1号墳 -       | 30 |
| 3. 奈良時代の人名が記された木簡が出土 - 山崎上ノ南遺跡 -      | 32 |
| 4. 古代の国家的大土木工事 - 児玉条里遺跡 -             | 34 |
| 5. 地方豪族の古代寺院跡 - 東小平中山廃寺 -             | 36 |
| 6. 地名・人名を記す紡錘車 - 薬師元屋舗遺跡・東五十子田端屋敷遺跡 - | 38 |

## V 中世

- |                                   |    |
|-----------------------------------|----|
| 1. 「児玉党の聖地」浅見山丘陵 - 浅見山丘陵中世遺跡群 -   | 40 |
| 2. 中世在地領主の館跡 - 真鏡寺館跡 -            | 42 |
| 3. 賴朝が作った鎌倉永福寺の屋根を飾った瓦 - 永福寺式軒瓦 - | 44 |
| 4. 大量の板碑が出土した中世墓地 - 田端中原遺跡 -      | 46 |
| 5. 戦国時代始まりの地 - 五十子陣 -             | 48 |

遺跡所在地一覧

参考文献一覧

### 例　言

- 本書は、これまでに発掘調査が行われた本庄市内の遺跡のうち、旧石器時代から中世までの、とくに重要な遺跡や出土資料を選んで解説したものです。
- 各節の主要な参考文献は、文末に記載したとおりです。文中で取り上げられなかった文献については、各節記載の文献も含め、巻末に一括して掲載しました。
- 本書中に使用した写真・図について、早稲田大学考古学資料館、湘南工科大学、鎌倉市教育委員会よりご提供いただいた。記して感謝いたします。
- 本書の執筆、編集は、本庄市教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係が担当しました。

# I 本庄市の遺跡とその概要

本庄市には500か所あまりの遺跡が所在しています。発掘調査も昭和30年代から行われ、多くの遺跡や出土品の発見が報告されています。本書では、そのなかからとくに重要な遺跡と出土資料を選んで紹介していますが、そのまえに本庄市の遺跡の全体像を見ておきましょう。

**旧石器・縄文・弥生時代** 本庄市にはじめて人類が住み始めたのは、いまから2万年ほど前の旧石器時代のことです。大久保山丘陵にある浅見山Ⅰ遺跡で発見された石器群は、本庄市で最初に活動した人類が残した遺物と考えられています。

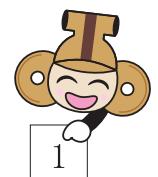
縄文時代の開始は、1万年以上前に遡ります。本庄市でも、浅見山Ⅰ遺跡や宥勝寺北裏遺跡など丘陵上の遺跡を中心に、縄文時代草創期や早期といわれる最も古い段階の土器が発見されています。人々の定住を示す竪穴住居の検出は縄文前期からですが、縄文時代中期には共和地区の将監塚、古いど戸、新宮遺跡のように、多くの人が持続的に居住する集落が形成されるようになります。

弥生時代になると、大陸から稻作や金属器の文化が伝わり、北海道を除く日本列島の各地に広がって行きます。本庄市に弥生文化が波及するのは、紀元前3世紀で、弥生時代の中頃になってからのことです。浅見山Ⅰ遺跡で発見された弥生土器はちょうどその頃の資料です。弥生時代の遺跡の多くは丘陵上に立地する特徴が見られ、弥生時代後期になっても集落の規模は小さく、人口も多くはなかったようです。

**古墳時代** 3世紀中頃、近畿地方を中心につくられ始めた古墳は、やがて北は岩手県から南は鹿児島県まで分布を拡大していきます。本庄市では、竪穴住居の検出数も格段に増え、台地上の開発が進み、人口が大きく増加している様子が窺え、古墳も600基以上を確認することができます。3世紀後半には、早くも北堀新田前遺跡に前方後方墳が出現し、ついで県内最大の前方後方墳、鷺山古墳が築造されます。5世紀には金鑽神社古墳などの大型円墳が相次いで現れ、5世紀後半以降は多数の円墳がつくられるようになり、各所で古墳群が形成されます。高度な石工技術が見られる横穴式石室に豪華な金銅装馬具が副葬された秋山庚申塚古墳、ペルシア産の重層ガラス玉が出土した長沖203号墳など、古墳群を構成する中小の円墳でも貴重な発見があります。また、小島前の山古墳から出土した、笑う盾持人物埴輪をはじめ、多彩な埴輪が出土するのも本庄市の古墳の特徴で、大久保山丘陵に残る宥勝寺裏埴輪窯跡のような埴輪製作遺跡も何か所か発見されています。

**古代** 7世紀になると大和の飛鳥に政治の中心が置かれ、地方も法制的な秩序の中に組み込まれていきます。飛鳥藤原京と同型のガラス小玉鋳型が大量に出土した薬師堂東遺跡には、中央と直結して技術集約的な手工業を営む集団が存在したのでしょうか。8世紀に律令制が完成し、地方の行政や税の仕組みが整うと、古墳に葬られる人物も下野堂開拓1号墳のように官僚の身分標識をもつようになります。女堀川周辺の沖積地には児玉条里遺跡に見るような広大な条里水田が整備され、文字を記した資料も徐々に増えていきます。山崎上ノ南遺跡の木簡や薬師元屋舗遺跡の刻線文字紡錘車は、実在の個人名までを特定できる第一級の資料です。経済力をもった領主層も成長し、東小平中山廃寺のような寺院を建立する富者も現れます。

**中世** 中世には、一般の人々も竪穴住居に住まなくなるため、集落遺跡はほとんど検出できなくなり、領主層の造営した館跡、寺院、墓地などの遺跡が主体を占めるようになります。15世紀後半の五十子陣は、「享徳の乱」に際して構築された上杉方の軍事拠点ですが、中国製の磁器や北宋錢や永楽錢などの貨幣も出土し、都市的な機能を備えていたことが判明しています。



## 五

## Ⅱ 旧石器・縄文・弥生時代

### 1. 埼玉郡市ではじめての旧石器時代石器群－浅見山I遺跡－

この島国に住む人々が土器作りを始めた時代を「縄文時代」と言い、今から1万6,000年前頃から始まったとされています。それ以前の時代を「旧石器時代」と言います。旧石器時代は、基本的に打ち割って作った石器を道具として用いた時代であり、人々は、野山の木の実、果実、草木の葉・芽、根菜などを採集し、野生動物を捕え、日々の糧とする移動性の高い生活を営んだと考えられています。日本列島のほぼ全域に旧石器時代の確かな遺跡が安定して見られるようになるのは、今からおよそ4万年前くらいからであるとされています。

埼玉郡市では、表面採集やローム層から単独で出土した資料として、これまで20数箇所の遺跡、地点から旧石器時代の石器が発見されています。それらの資料が出土した遺跡、地点は、多種多様な立地、地形環境にあり、石器の時期にも幅があるとされており、今後埼玉郡市の広範囲にわたって、旧

石器時代の遺跡が発見される可能性があることを示しています。

浅見山I遺跡は、本庄市の北半にある浅見山丘陵の、新幹線本庄早稲田駅の南西脇にかつてあったやせ尾根の上に立地します。平成20年初め冬季に行われた発掘調査により、埼玉郡市では、はじめての発見となる黒曜石製の石器群が出土しました。

石器群は、丘陵斜面の中ほどに設定した「トレント6」と呼んだ深掘区の、主に黄褐色の硬いローム層の中ほどから下層にかけての層から出土しています。石器群は、狭い範囲にまとまりをなして出土しましたが、それぞれの石器には多少の高低が見られました。傾斜の急な丘陵斜面のため、ローム層を細かく区分することはできませんでした。

石器群を構成する石器は、ナイフ形石器、石刃、剥片で、総



写真1 旧石器時代を思わせる風景の中で行われた厳冬期の調査



写真2 旧石器時代調査トレント6

数55点です。2点のナイフ形石器は、武蔵野台地のIV層上部の段階に相当する資料と思われ、今から2万年前前後の石器であると推定されています。他に表土や他時期の遺構覆土などから、黒曜石製の有撃尖頭器、搔器や貞岩製の荒屋型彫刻刀形石器などが出土しています。

なお、自然科学的な方法による分析では、出土した黒曜石の産出地は、長野県の和田峠付近、蓼科であるとの結果を得ています。

これら旧石器時代の石器は、石器群を構成するナイフ形石器などの黒曜石製の石器、黒曜石製の有撃尖頭器、貞岩製の荒屋型彫刻刀形石器の3つに分けられ、時期を決めることがむずかしい有撃尖頭器はひとまず置き、石器群を構成する石器と彫刻刀形石器では時期が大きく異なります。石器を手掛りに考えてみると、旧石器時代に関しては、この丘陵の細く伸びた文字通りのやせ尾根に、少なく見ても2時期にわたって、人々が痕跡を残したことになります。

調査時には本庄の町並みを一望に見渡せた、平らな部分がほんのわずかしかないやせ尾根に、太古の人々が繰り返し足跡を残した、その理由は何なのでしょう。この謎に直ちに答えることはできませんが、ここが南側に広がる浅見山丘陵の森林のへりにあたるとともに、眼下に男堀川の河川や低地をひかえた、森林と河川、低地、低平な段丘の接点に当たること、そこに謎を解く鍵があるのかもしれません。

#### 〈参考文献〉

- 増田一裕 1984 「埼玉県北西部の旧石器」『旧石器考古学』28 旧石器文化談話会  
松本 完・大熊季広・藤波啓容・亀田直美他 2008 『浅見山I遺跡(Ⅲ次)・久下東遺跡(Ⅲ次)A1・B1地点・北堀久下塚北遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第13集 本庄市教育委員会



写真3 斜面下方から見る石器の出土状態



写真4 ローム層の中から出土したナイフ形石器



写真5 出土した旧石器時代の石器

## 2. 縄文時代早期の丘陵上の遺跡－浅見山I遺跡－

浅見山I遺跡は、前項で記した旧石器時代の遺跡であるとともに、縄文時代以降、中世にわたる複合遺跡ですが、かつて「大久保山A遺跡」と呼ばれ、本庄市では数少ない縄文時代草創期・早期の遺物が出土することで著名な縄文時代の遺跡でもあります。

本庄市の縄文時代草創期の遺跡は、ゆうしょじきたうら 浅見山I遺跡、ながおきうめはら 有勝寺北裏遺跡、しゅくたほ 長沖梅原遺跡、そうそうき 宿田保遺跡の4遺跡で、それぞれ爪形文土器や押圧縄文土器、無文土器などの破片が少数出土しています。ここでは、浅見山I遺跡から出土した縄文早期の遺構や遺物について、簡単に記してみたいと思います。

平成19年度の調査において、遺構は土坑などわずかでしたが、縄文時代早期を中心に、多量の縄文土器・石器が出土しています。なかでも縄文時代早期前葉、井草Ⅱ式、夏島式土器を主とする撫糸文土器（約8,000～9,000年前ごろ）は、これまで児玉郡市ではまとまって出土した例に乏しく、大変貴重な資料です。

撫糸文土器とは、主に竹などの棒状のものに撫った糸を巻きつけた工具を、土器の器面に回転して施した文様を特徴とする深鉢形の尖底、丸底の土器で、主に東日本の縄文時代早期の古い段階に盛んに作られた土器です。この撫糸文土器の時代は、縄文時代の中でもひとつの大きな画期をなす段階で、関東地方では、この段階から貝塚が見られるようになり、竪穴住居が定着・普及し、比較的規模の大きな集落が出現するとともに、遺跡の数が急激に増えます。また、磨石や石皿、凹み石などの植物の加工・調理用の石器が安定して見られるようになります。



写真1 南東上空から見る浅見山I遺跡（Ⅲ次調査）

そうしたある種の画期をなす段階ですが、本庄市を含む児玉郡市では、関東地方の多くの地域で見られるその種の趨勢がはっきりした形では見られないようです。児玉郡市で、竪穴住居跡が見られるようになるのは、縄文時代前期以降ですし、遺跡の数が増えるのもそれ以降になります。大規模で長期に継続する集落が営まれるのは、縄文時代中期を待たなければなりません。山地とそこから連なる丘陵、低い段丘と細い河川、低地の織りなす地形や環境が、縄文時代の古い段階での「飛躍」とは相容れなかつたのでしょうか。

なお、浅見山Ⅰ遺跡では、他に縄文時代早期前葉～中葉の押型文土器や沈線文土器、縄文時代早期後葉～前期初頭の土器や特徴的な石器が多数出土しています。

石器に関しては、大半が包含層から出土したものです。石鏃、打製石斧、スクレイパー、スタンプ形石器、磨石、凹み石など様々な石器が見られます。出土土器から見て、大半が縄文時代早期～前期初頭の石器と思われますが、中でも川原石の自然面を片面にそのまま大きく残した特徴的な打製石斧は、興味深い資料です。

#### 〈参考文献〉

- 松本 完・大熊季広・藤波 啓容・亀田直美他 2008  
『浅見山Ⅰ遺跡(Ⅲ次)・久下東遺跡(Ⅲ次)A1・B1地点・北堀久下塚北遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第13集 本庄市教育委員会



写真2 縄文時代早期前葉の土坑

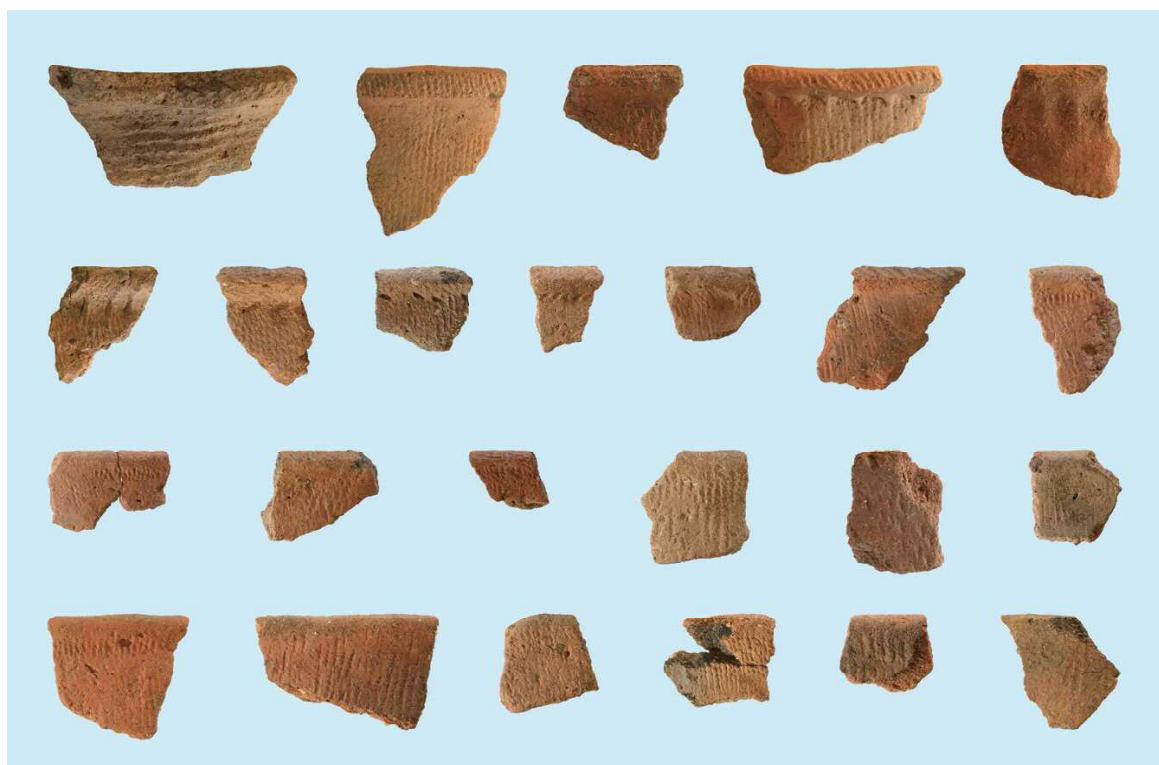


写真3 出土した縄文時代早期前葉の撲系文土器

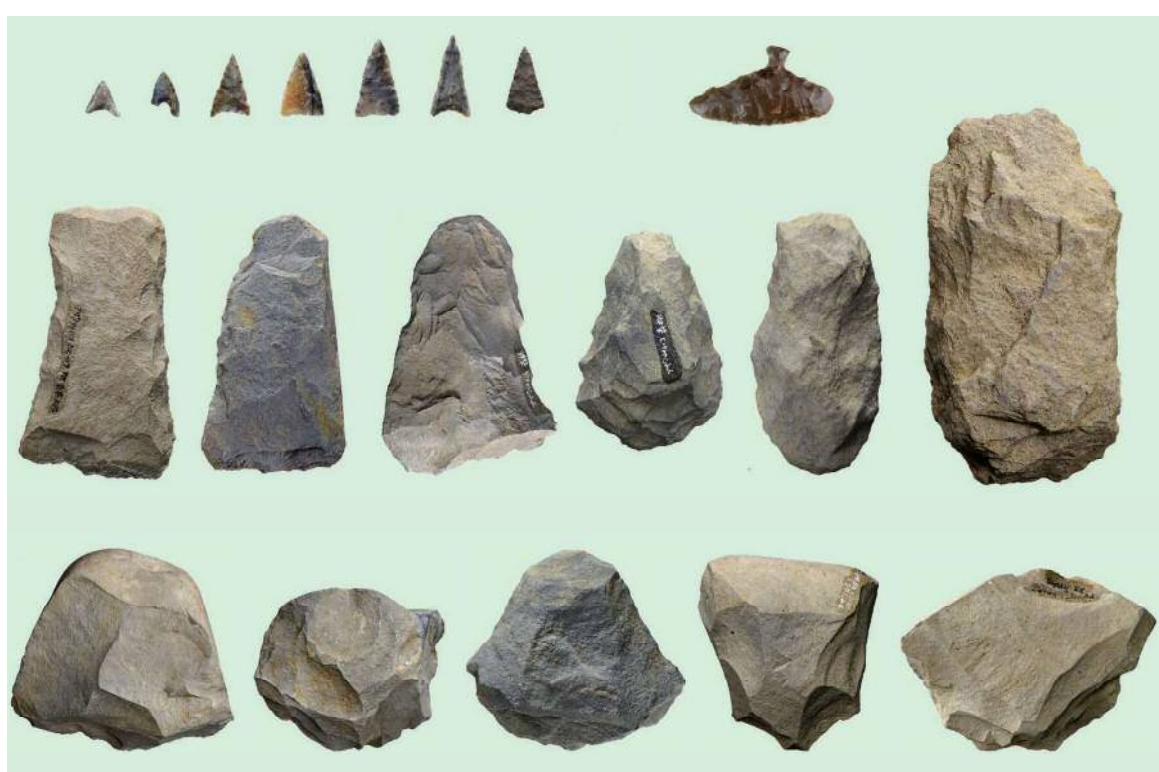


写真4 出土した縄文時代の石器

### 3. 縄文時代の並ぶ大規模環状集落 ー将監塚・古井戸・新宮遺跡ー

女堀川中流域左岸の低地に面する本庄台地の東側縁辺部には、縄文時代中期後半の将監塚遺跡・古井戸遺跡・新宮遺跡の3つの大規模な環状集落が、近距離に並んで存在しています。このような大規模環状集落が同時に3つ近接して並ぶような集落形態は、全国的にあまり例がなく、当地域の縄文時代中期の社会を考えるうえで、大変注目される重要な遺跡群と言えます。

集落は、いずれも中央に直径100m程度の広い広場をもち、その周りに多数の住居や土坑がドーナツ状(環状)に配置され



図1 遺跡の位置

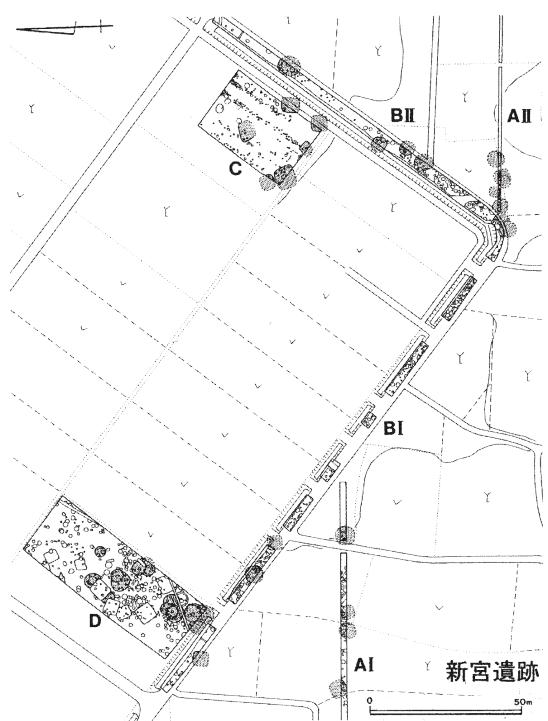


図2 新宮遺跡全体図

る構造で、その外径の規模は直径200m程度あります。これらの集落は、中期中頃の勝坂III式期に北側の将監塚B遺跡を含めた数軒の住居からなるかつさか4つの小規模な集落が台地上に出現します。そして、中期後半のかそりの加曾利E I式からE II式期にかけて、将監塚B遺跡以外の3集落は、いずれも規模を拡大させながら環状集落として盛行します。その後、加曾利E III式期以降になると、吉井戸遺跡の集落に大木9式系の深鉢土器を埋設した複式炉をもつ住居跡(49住)や、柄鏡形敷石住居跡(73住)など、注目すべき住居跡も見られるようになりますが、いずれの環状集落も規模を縮小しながら解体し、それと歩調を合わせるように、中下田遺跡・平塚遺跡・将監塚東遺跡などの小規模な集落が、周辺の低地内に多く出現するようになります。

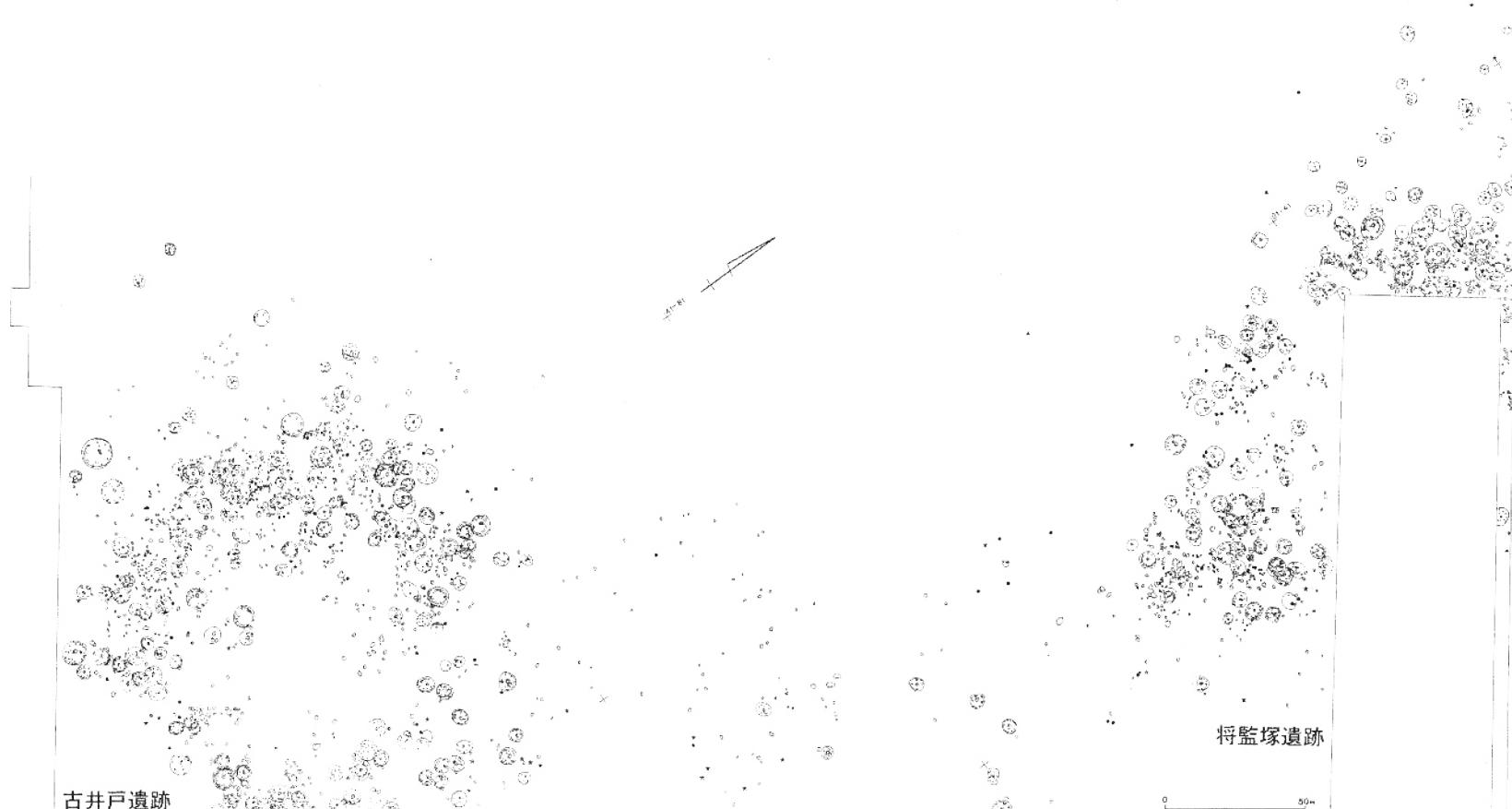


図3 将監塚遺跡・古井戸遺跡全体図



図4 将監塚・古井戸・新宮遺跡の住居跡と出土資料

## 〈参考文献〉

- 石塚 和則 1986 『将監塚－縄文時代－』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
 恋河内昭彦 1995 『南共和・新宮遺跡』 児玉町遺跡調査会報告書第6・7集 児玉町遺跡調査会  
 宮井 英一 1989 『古井戸－縄文時代－』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
 宮田 忠洋 2011 『新宮遺跡Ⅱ』 本庄市遺跡調査会報告書第42集 本庄市遺跡調査会



## 4. 弥生時代中期前半の土坑群－浅見山I遺跡－

弥生時代とは、この列島に灌漑水田農耕を中心とする食糧生産が本格的に開始された時代とされますが、ひとつの時代であるからといって、気候や地形、地勢、動植物相において多様な列島全域で、すべての時期、同じような生活が営まれたわけではないことは言うまでもありません。

児玉郡市の弥生時代の遺跡については、資料が比較的充実する弥生時代後期以降を別にして、わずかな資料を通して見通しを述べる段階が長らく続いたと言ってよいと思います。弥生時代前期～中期前半代に関しては、神泉村（現神川町）<sup>たいら</sup>平遺跡、神川町前組羽根倉遺跡など遺構を伴うわずかな遺跡はあるものの、大半の遺跡は、少数の土器片などが出土するだけの遺跡にとどまること、南関東地方など多くの地方、地域で、弥生時代遺跡の盛期のひとつである中期後半の遺跡が際立って少ないことなど、資料が少ないだけでなく、著しく偏った傾向が見られることが判っています。

弥生時代中期前半については、関東地方全域で生活の痕跡が乏しく、主に壺を用いた再葬墓と呼ばれる特殊な葬法の墓が、中期前半のある段階から遺構の大半を占めるようになります。また、土器に関しては、「条痕文土器」と呼ばれる貝殻や植物質のものを束ねた工具で器面に筋を付けた土器の段階から、太い棒状の工具で輪郭を描いた縄文で飾られた土器の段階へという変化が見られます。この変化の実態は不明のままでしたが、近年群馬県吉井町神保富士塚遺跡から出土した土器を標式とする「神保富士塚式土器」をもって、この変わり目の段階に充てることで、ようやく群馬県域とその周辺地域での変化の一端が捉えられるようになりました。

浅見山I遺跡では、この「神保富士塚式」の段階の土坑が、丘陵斜面でまとまりをなし検出されています。浅見山I遺跡の土坑とその出土土器は、これまで不明であった児玉郡市の弥生時代中期前半の大きな空白を埋める大変貴重な資料です。土坑は、直径が1～1.5mほどの円形のものを主とし、狭い範囲内にまとまって造られています。また、一部の土坑は、土坑群をなす一角からやや離れた斜面の下方に分布しています。土坑から出土した土器は、大半が「神保富士塚式」に含まれる土器で、特異な図形的文様で飾られた特殊な器種である筒形土器や鉢が、日常容器の中心をなす甕や壺に量的



写真1 南東側から見る浅見山I遺跡（I次調査）

に拮抗しており、群馬県南西部とよく似た土器を用いた土坑に関わる同じような習俗が、この段階の児玉郡市に広まっていたことを如実に物語っています。

この種の土坑が再葬墓のような墓の一種であるかどうかについては意見の分かれるところですが、土坑に関わる生活の確かな痕跡が今のところ見られませんし、土坑から出土した土器が日常的な土器の組み合わせからはかけ離れた内容をもち、全体としての土坑群が時間幅を相当含む可能性があると推定されていることなど、生活の場で用いられ、生活の用を終えるとともに直ちに埋もれた土坑とは考えにくい特徴を具えているかに見えます。骨壺の大型壺がひしめく再葬墓とは全く異なりますが、浅見山I遺跡で見られた土坑群が墓である可能性はやはり否定できないように思われます。

浅見山I遺跡のような中期前半段階の資料が増えることで、山間部や山沿いの一帯、丘陵部、中小河川沿いの低位段丘を主要な舞台として展開した、「典型的」な弥生文化とはいささか異なるとは言え、まぎれもない弥生文化の一侧面が明らかになろうかと思います。

#### 〈参考文献〉

- 石川日出志 2003 「神保富士塚式土器の提唱と弥生中期土器研究上の意義」『土曜考古』第26号 土曜考古学研究会  
 本庄市史編集室編 1989 『本庄市史 通史編Ⅱ』本庄市  
 松本 完・大熊季広・藤波啓容・亀田直美他 2008 『浅見山I遺跡(Ⅲ次)・久下東遺跡(Ⅲ次) A1・B1地点・北堀久下塚北遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第13集 本庄市教育委員会

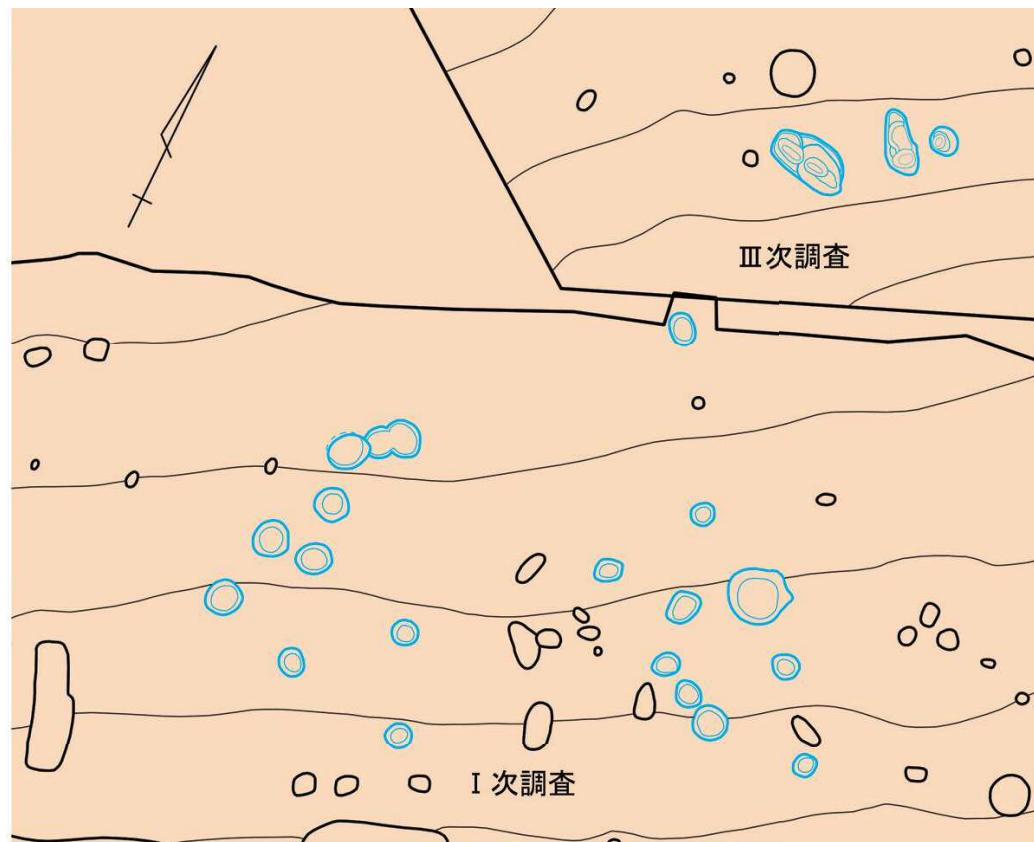


図1 弥生時代の土坑群 (1:400、水色の遺構が、弥生時代の土坑)



写真2 弥生土器がまとめて出土した土坑 (I 次調査)



写真3 土坑群から出土した弥生土器 (I 次調査)

### III 古墳時代

#### 1. 本庄市最古の前方後方墳－北堀新田前遺跡－

弥生時代には、近畿地方以東の多くの地域で四周を溝で囲った方形周溝墓という墓制が採用され、多数の方形周溝墓が群在する墓域が様々な地域で形成されます。弥生時代後期以降、一部の地域を除いて、次第に限定された少数の方形周溝墓からなる墓域が造られるようになり、特定の個人なり、集団のみが方形周溝墓に葬られるという傾向が嵩じてきます。前方後円墳に代表される卓越した規模の墳丘墓が造られる古墳時代前期になっても、この傾向は変わらず、一方で前方後円墳や前方後方墳が単独で、あるいは少数の方形周溝墓に列してつくられるようになるという変化が見られます。児玉郡市では、古墳時代前期の比較的古い段階に、美里町の塚本山古墳群、村後遺跡などで、初期的な前方後方墳が方形周溝墓に御して、あるいは単独で造られるようになり、以降美里町南志渡川遺跡の定型的な前方後方墳や鷺山古墳のように卓越した規模の前方後方墳が造られるようになります。

北堀新田前遺跡は、新幹線本庄早稲田駅の北東800mほど離れた低位段丘上に位置する遺跡です。本庄早稲田駅周辺の区画整理事業に伴う平成18年度の発掘調査では、古墳時代前期以降の多数の住居跡とともに、調査範囲の南東部分で、古墳時代前期中葉の方形周溝墓1基、前方後方墳2基の調査が



写真1 上空から見る1～3号墓（上が北西）

行われました。3基の墓は、北西から南東に同じような間隔をあけて列をなすように造られています。北西端の方形周溝墓（1号墓）は、墳丘長が10mほどで、西隅と南隅に墳丘と周溝外をつなぐ通路である陸橋部をもつ形態です。中央の前方後方墳（2号墓）は、前方部前端が調査範囲外ですが、現存部分での全長が26m余、墳丘長はおよそ29m前後と推定されています。



写真2 1号墓（方形周溝墓）

南東端の3号墓は、北西溝から前方部にかけての周溝の一部のみしか調査できませんでしたが、2号墓とほぼ同大の前方後方墳と推定され、西隅に陸橋部が造られています。2号墓の西隅にも陸橋部があった可能性が高く、2つの墓は、ほぼ同大の前方後方墳であるだけでなく、陸橋部の特徴も共有するらしく、極めて強い結びつきのもとに連続して造られた墳墓であると見てよいと思います。

2・3号墓の周溝、特に2号墓の南東周溝からは、墳丘に並べ置かれた土器の一部と思われる多数の土器が出土しています。それらの出土土器から見て、2号墓、3号墓の順に、前方後方墳が造られたこと、2号墓から出土した大型壺は、鷺山古墳から出土した壺の前段階の特徴をもっており、2号墓が鷺山古墳の直前の段階に造られ、続いて造られた3号墓は、鷺山古墳とほぼ同じ時期に造られたことが推定されています。2号墓、3号墓と北から順に造られたとすれば、さらに2号墓の北西にある1号墓がその前に造られ、方形周溝墓から前方後方墳へと形態を変えて、3つの墳墓が北西から南東へと順に並んで造られた可能性が高いと考えられます。推測をたくましくすれば、この周辺一帯を統率していた長の3代にわたる墓と見ることもできるかと思います。

北堀新田前遺跡の周辺には、丘陵上に仰ぎ見ることでできる前山1・2号墳をはじめとして、宥勝寺北裏遺跡の方形周溝墓群、浅見山I遺跡の方形周溝墓群、前方後方墳、くげづか公卿塚古墳を含む東富田古墳群と、遠からぬ距離に古墳時代前期～中期の複数の墓域が確認されています。北堀新田前遺跡は、そうした立地、墳形、規模の異なる様々な墳墓が織りなす古墳時代前期～中期の墓制の移り行き、ひいては地域の歴史の一端を解き明かす鍵となる遺跡と言ってよいでしょう。

#### 〈参考文献〉

- 松本 完他 2015 『北堀新田前遺跡II（A2・A3地点）・北堀新田遺跡IV（A2・B地点）・久下東遺跡VIII（G3地点）』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第44集 本庄市教育委員会



写真3 2号墳（前方後方墳）



写真4 2号墳南東周溝の土器出土状態

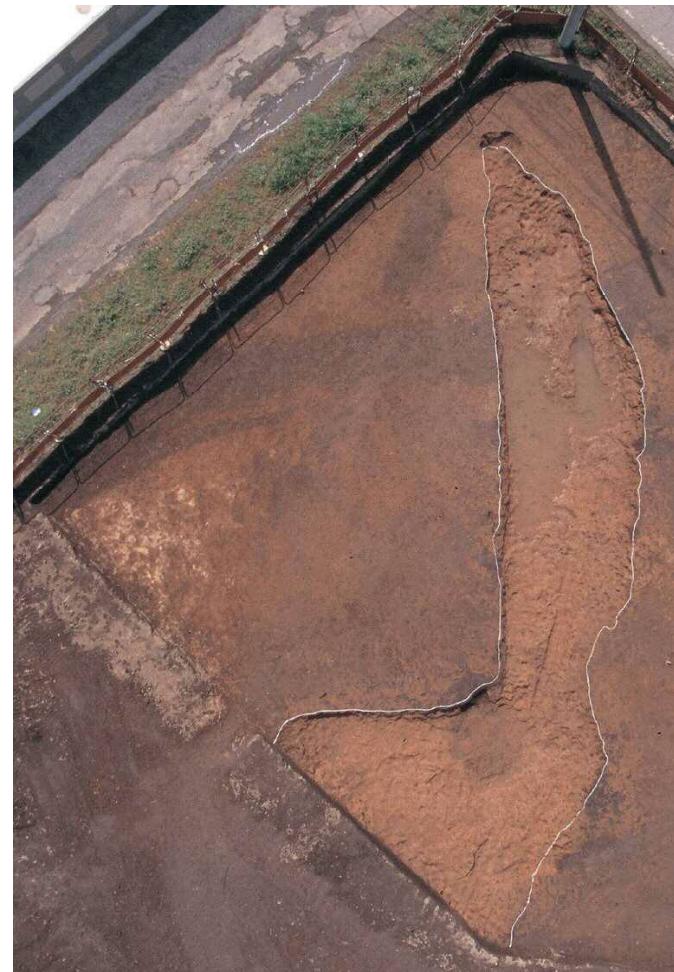


写真5 3号墳（前方後方墳）



## 2. 大型古墳の出現－鷺山古墳－

さぎやま なまのやま  
鷺山古墳は生野山丘陵と大久保山丘陵の中間に位置する小丘陵上に造られた前方後方墳です。この丘陵は南北約500m、東西約150mの「く」の字形に屈曲した高まりで、古墳の頂上には標高84.42mの三角点が置かれています。古墳はこの自然地形を巧みに利用して作られており、丘陵下の水田地帯から見上げると、近くで見るよりも大きく立派に見えます。

昭和40年代に、本庄高等学校考古学部が鷺山古墳の踏査を実施した際に、墳丘上で古墳時代前期に遡る土器の破片を採集したことから、以来、埼玉県内でも最も古い古墳のうちのひとつと考えられるようになりました。その当時は、直径40mほどの円墳と見られていました。その後、昭和60年に、埼玉県県史編さん室が、県内古式古墳調査の一環として、発掘調査を実施したところ、円墳と思われていた墳丘が方形をなすこと、南西側に前方部をもつことが明らかになり、全長約60m、後方部幅約37m、高さ5.4mの規模を有する前方後方墳であることが確認されました。また、通常の前方後方墳と比べると、前方部の設計がきわめて特異で、途中から大きく開いて、左右の隅が切り取られたような形状をしていることも判明しました。堀は前方部の前面を除いて、全体にめぐっているようですが、形状や規模については、まだ十分に明らかになっていません（図1）。

墳丘中心部分の調査は行われていなかったため、埋葬施設の形状や副葬品の組成などは不明です。近県の前方後方墳の調査例を参考にすると、埋葬施設は豊富な石槨や粘土槨などではなく、墳丘内に木棺を直接埋設する比較的簡易な型式を採用していたことが想定されます。なお、墳丘を保護するための葺石は施設されず、埴輪も配列されなかつたと考えられています。

堀からは、二重口縁壺形土器（写真2-1、図2-1）や椀形土器（写真2-2、図2-5）などの遺物が出土しています。これらの土器は、後方部



写真1 鷺山古墳の現況

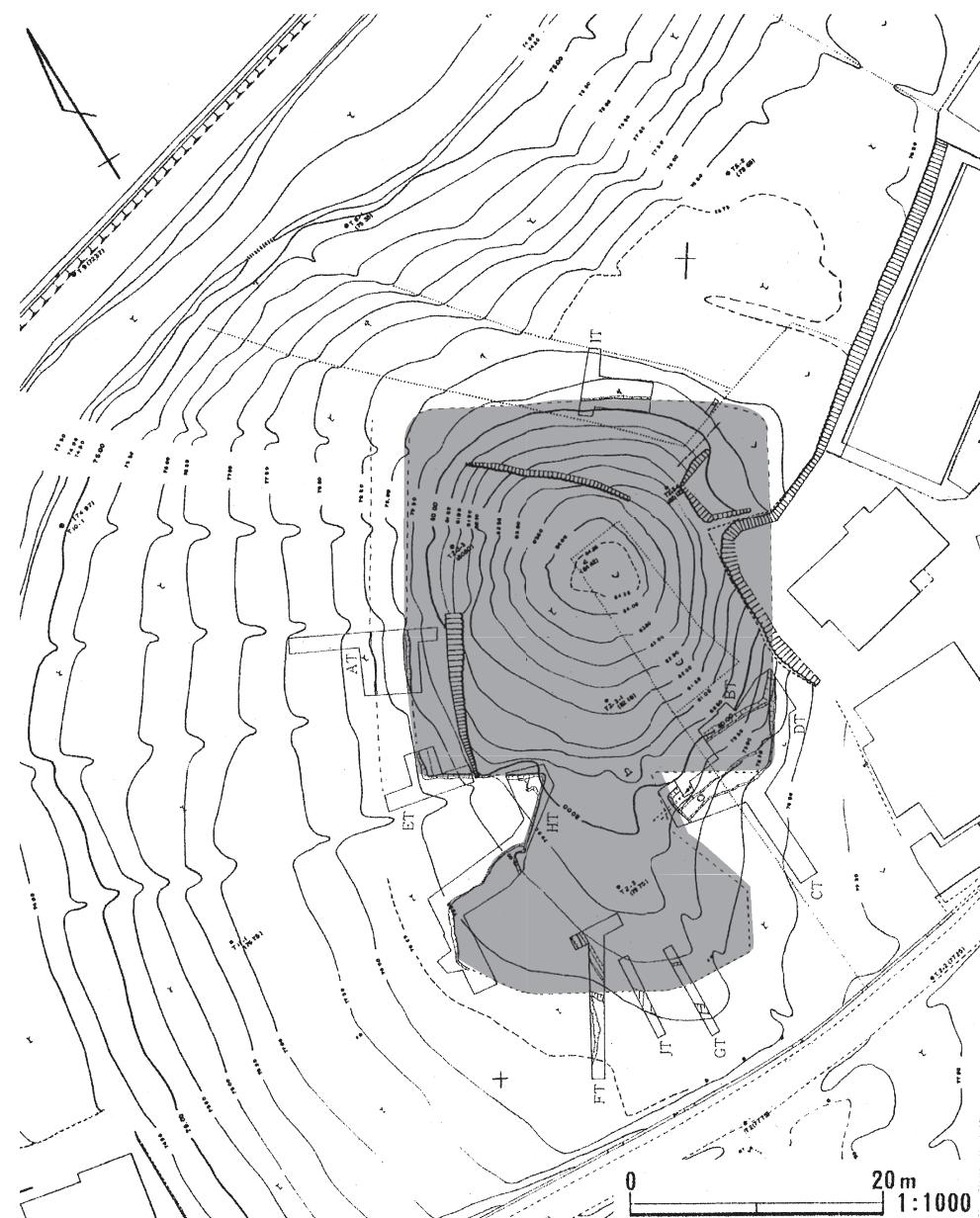




写真2 鷺山古墳出土遺物

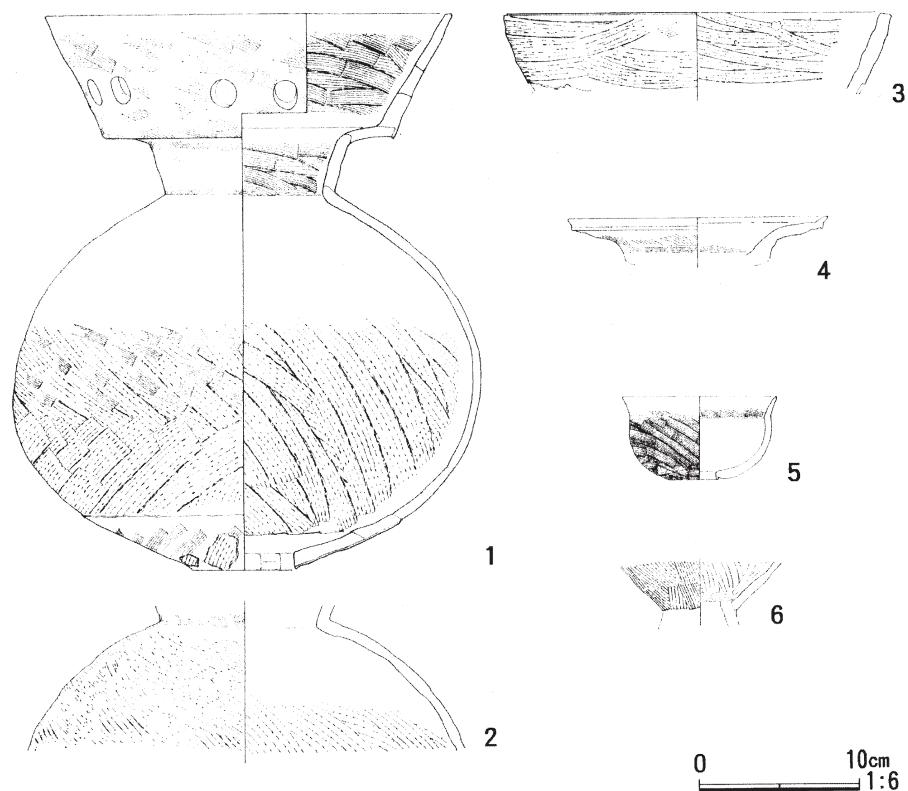


図2 鷺山古墳出土遺物

と前方部をつなぐ「括れ部」左右の堀から、とくにまとまって検出されていることから、当初は「括れ部」付近の墳丘裾部に、集中して置かれていたようです。二重口縁壺形土器は、全体が赤く彩色され、底部に円形の穿孔があり、口縁部にも2孔1対の小さな円形透孔が6単位、計12孔配位置されています。楕形土器の底部にも、同様に円形の穿孔が認められます。壺形土器も楕形土器も、焼成前の工程で底部が穿孔されていて、製作段階から容器としての機能が放棄されています。このことから、ともに実用の土器ではなく、古墳に供えるための専用の儀器として製作されたことがわかります。

口縁部に透孔をもつ壺形土器は珍しく、熊谷市塩古墳群の塩I支群 狸塚1号墳出土の壺形土器に、同じ2孔1対の例が見られるほかには（図3-1）、山梨県甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪の口縁部に4個の巴形透孔をもつ例が知られる程度です。甲斐銚子塚古墳は全長169mの規模をもつ前方後円墳で、鷺山古墳とは規模も墳形も異なりますが、狸塚1号墳は全長35.3mとやや小規模ながら、鷺山古墳と同じ前方後方墳でもあり、両者の関連が注目されます。

鷺山古墳の築造年代は、墳丘形態が古墳時代前期に特徴的な前方後方墳であること、出土した底部穿孔の二重口縁壺も、前期古墳に伴う資料であることなどから、4世紀半ば以前に遡ることが推定され、本格的な墳丘を有する大型古墳としては、本庄市で最も古い時期に位置付けられます。

#### 参考文献

- 菅谷浩之 1984 『北武藏における古式古墳の成立』児玉町史資料調査報告第1集 児玉町教育委員会・児玉町史編纂委員会
- 増田逸朗・坂本和俊他 1986 『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県民部県史編さん室
- 坂本和俊 1996 「武藏の前方後円墳」『東北・関東における前方後円墳の編年と画期』第1回東北・関東前方後円墳研究会発表要旨資料 東北・関東前方後円墳研究会

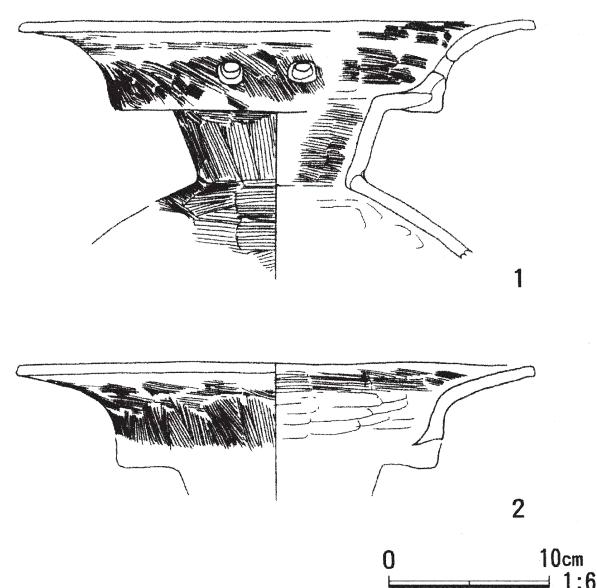


図3 熊谷市狸塚1号墳出土遺物

### 3. 多彩な石製模造品を出土した古墳 一万年寺つつじ山古墳

万年寺つつじ山古墳は、市内小島から下野堂、万年寺、上里町神保原にかけて分布する旭・小島古墳群の一角にある古墳です。一辺25mの方墳で、周囲には幅5.6~6.3mの堀がめぐっています。古墳の中心部分はすでに失われ、現在では住宅街の一角に、一辺12m程の小さな墳丘が残るだけの古墳ですが、平成12年度の調査で、多数の石製模造品を出土したことから、にわかに注目されるようになりました。

石製模造品は、古墳時代前期の終わり頃から中期にかけて製作された遺物で、軟質の石材でさまざまな器物の形状を模造した「雛形」で、祭祀に用いられるほか、古墳の副葬品としても多用されました。多くは斧や刀子（小刀）、鎌といった農工具類ですが、珍しいものでは、臼や杵、箕、下駄、機織具の箒などが出土することもあります。

万年寺つつじ山古墳では、道路の拡幅に伴う平成6年度の調査で、墳丘の斜面上で有肩斧形の石製模造品1点が出土したことから、古墳の埋葬施設が後代の掘削によって破壊されている可能性が懸念されるようになりました。そこで、平成12年度に、埋葬施設の保存状態を確認するための調査を行ったところ、古墳を被覆している表土の直下で、埋蔵施設などの遺構や他の遺物群を伴わずに、11点の石製模造品が出土しました。先に採集された斧形の石製模造品1点を含めると、内訳は刀子6、有肩斧3、板状斧2、鎌1で、この他に管玉と臼玉が1点ずつ発見されています。



写真1 万年寺つつじ山古墳調査状況



写真2 万年寺つつじ山古墳出土石製模造品

刀子には、大小の2種があり、長さ7cm台のものと（写真2・図1-1・2）と5cm台のもの（同3～6）があります。いずれも刀身を鞘に収めた状態を表現しています。

有肩斧は、長さ5.6～4.9cm、最大厚1.0～0.9cmの大きさで、表面には縦方向に研磨痕が観察できます。実物の有肩鉄斧の場合、刃と反対側の端部を薄く打ち延ばしてから袋状に折り返し、この部分に柄を差し込んで斧として使用しますが、つつじ山古墳の石製模造品にも、円錐状に削り込んだ袋部が表現されています（同7～9）。

板状斧2点は、一方の長さが8.1cmもう一方が6.4cmと、大きさに差があり、刃部の形状も異なっています（同10・11）。古墳から出土する実用の板状鉄斧にも大小があることから、用途に応じ使い分けられていたものが、石製模造品の大きさにも反映されているのでしょうか。

鎌は長さ4.7cmで、現代のものとは形状が異なり、全体が長方形をしています。「直刃鎌」とよばれる、日本列島では古墳時代中期以前に普及した古い種類の鎌を表現しています。背側が厚いのに対し、刃部は薄く研ぎ出され、実物の鎌のように作られています。また、実物は、元の部分が、柄を取り付けるために屈曲していますが、この資料も元の部分が裏側へ向かって曲がっていて、詳細な部位まで正確に模倣されています（同12）。

これから石製模造品の様相から、古墳の築造時期は、古墳時代の中期初頭、4世紀の第3四半期頃と推定されます。実際に、古墳に副葬される板状鉄斧も、古墳時代中期初頭を最後に消滅しているので、石製模造品も、実物資料の消長と連動していることがうかがえます。

石材は鈍い暗緑色の蛇紋岩で、埼玉県北部から群馬県南部にかけて産出する蛇紋岩と同質です。全体に実物の形状を正確に反映した精緻なつくりで、器種も多く、点数もまとまっていて、石製模造品としては、県内を代表する貴重な資料となっています。

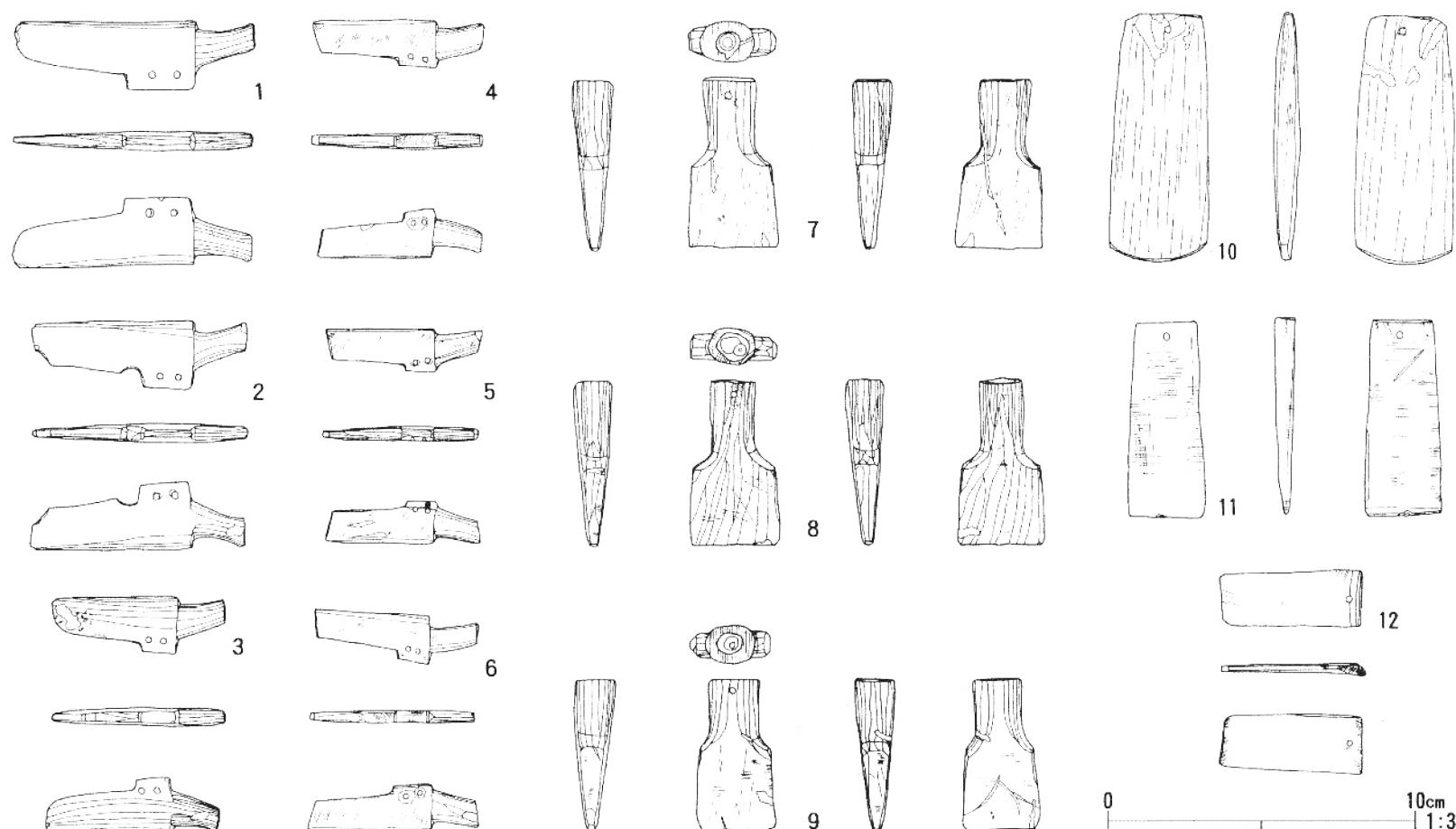


図1 万年寺つつじ山古墳出土石製模造品実測図

〈参考文献〉

松本 完・的野善行他 2006 『旭・小島古墳群－林地区I－』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第3集 本庄市教育委員会

## 4. 古墳時代中期の大型円墳 ー金鑽神社古墳・生野山將軍塚古墳・公卿塚古墳ー

4世紀の後半から5世紀半ばにかけての古墳時代中期は、日本列島の多くの地域で、古墳が最も大規模化する時期とされています。世界最大の墳墓といわれる大阪府の仁徳陵古墳(墳丘長486m)や日本で二番目の規模をもつ応神陵古墳(墳丘長425m)など、小山のように巨大な墳丘をもつ前方後円墳が造られたのがこの時期にあたります。本庄市で古墳の規模が最大化するのも、同じ古墳時代中期の段階で、児玉町入浅見の金鑽神社古墳、同児玉の生野山將軍塚古墳、北堀の公卿塚古墳など直径60mを超える大型の円墳が、次々と造られていました。

金鑽神社古墳は、生野山丘陵から北東に派生した支丘上に立地する古墳で、昭和59年に、埼玉県県史編さん室が実施した確認調査によって、墳丘の構造や埴輪の配列が明らかになりました。墳丘は下段が地山整形、上段が盛土による二段築成で、直径67.6m、高さ9.75mの規模があります。墳丘上段の斜面には、拳大の河原石を敷き詰めた葺石があり、墳丘の周囲には幅16mの堀を備えています(図1)。埴輪は、墳丘中段の平坦面で、原位置を保った状態で発見されたほか、墳丘頂上部の平坦面や堀の外側にも配列されていた可能性が考えられています(図2)。円筒埴輪は、古墳の規模にふさわしく、直径30cm以上の大型品が多く、寸胴で、二条の突帯で区画された中間段に、半円形もしくは逆三角形の透孔を対向して配置しています(写真2)。

生野山將軍塚古墳は生野山丘陵南側の尾根上にあり、昭和35年に発掘調査が実施されています。このときの報告によれば、直径約60m、高さ約7mの規模があり、墳丘には葺石を備えていたようです。埋葬施設は、墳頂部で河原石積みの竪穴式石槨が破壊された状態で発見されています。また、墳丘の裾部では緑泥石片岩の板石を組み合わせた未盗掘の箱形石棺が検出され、鉄剣2点、鉄斧1点、鉄鎌



写真1 金鑽神社古墳の現況

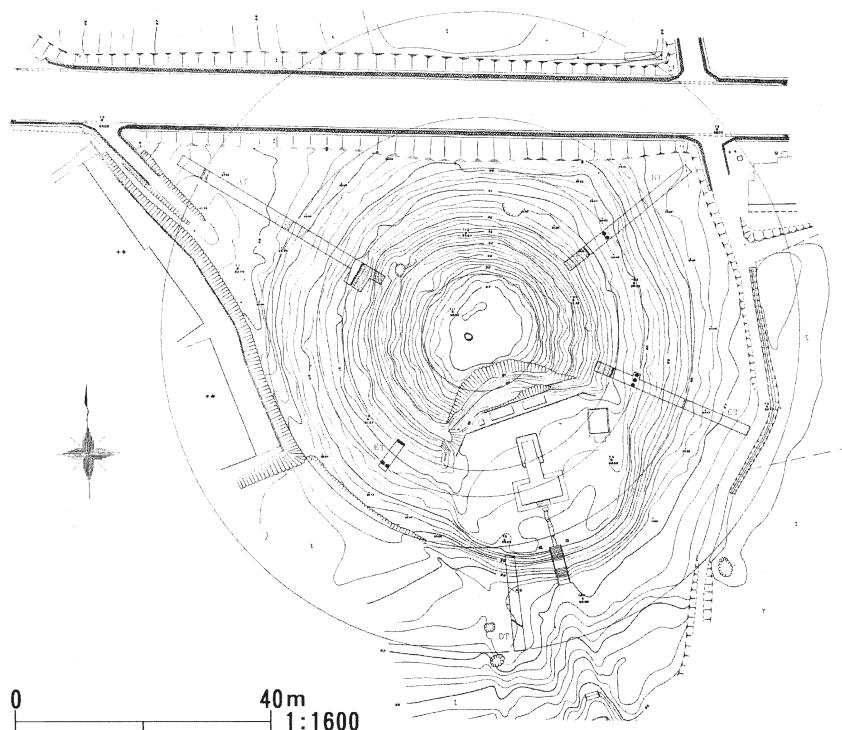


図1 金鑽神社古墳測量図



写真2 金鑽神社古墳出土円筒埴輪

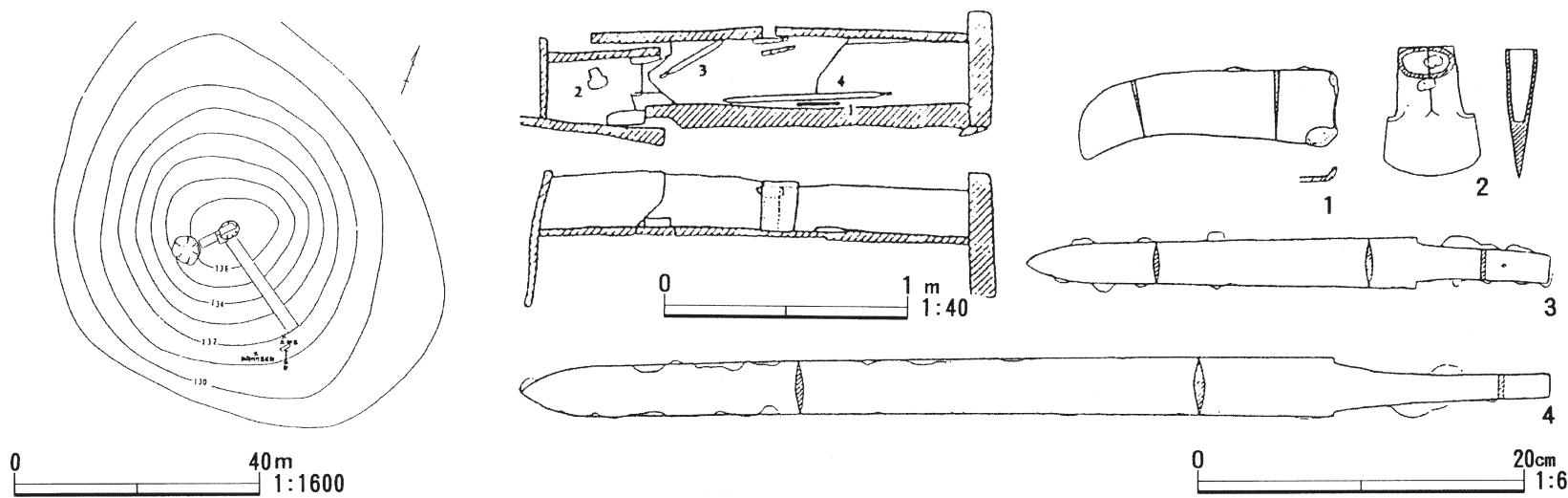


図2 生野山将軍古墳測量図と箱形石棺出土遺物

1点の副葬品が出土しました（図2）。

公卿塚古墳は、<sup>おんなぱり</sup>女堀川右岸の微高地に所在した円墳で、墳丘はすでに消滅していますが、周囲をめぐる堀が、地表下に埋没した状態で残されています。本庄市教育委員会などによるこれまでの調査によつて、墳丘は直径65m以上、堀幅は約8.5mの規模を有する大型円墳であったことが判明しています（図3）。

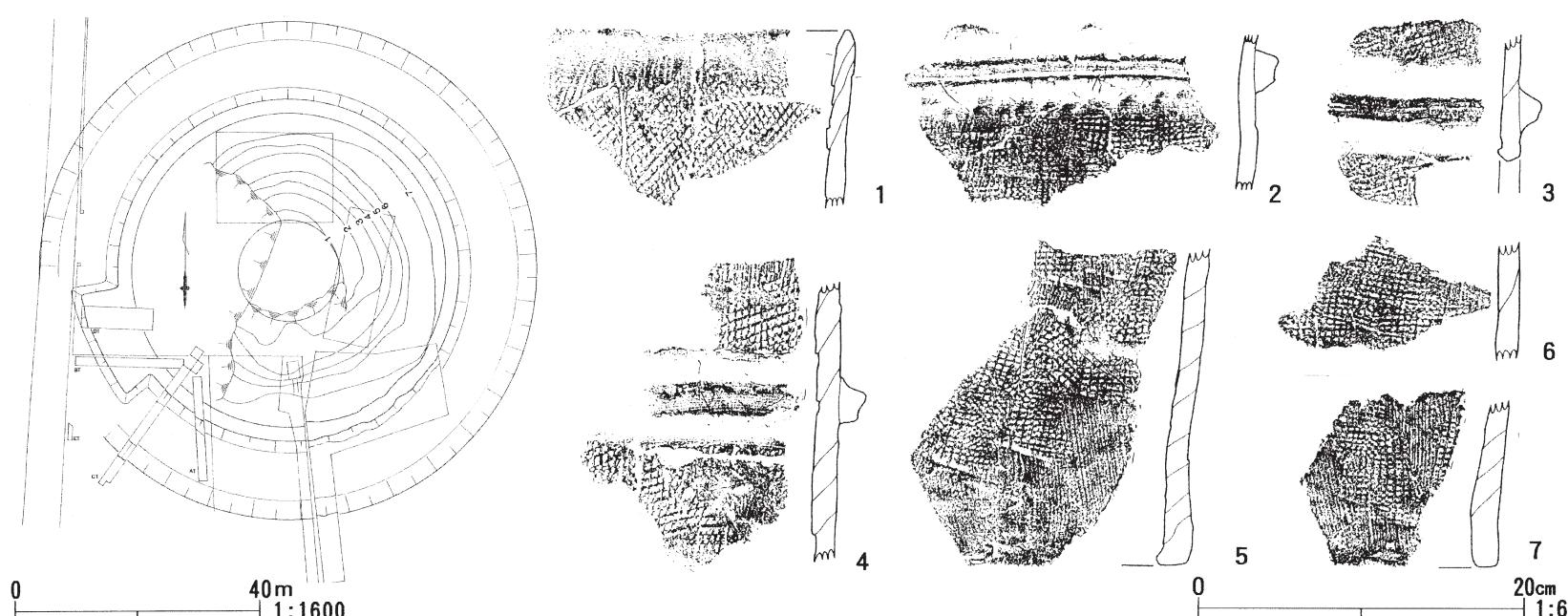


図3 公卿塚古墳測量図と出土円筒埴輪

なお、これら3基の大型円墳の特色として、「格子叩き技法」を用いて製作された特殊な円筒埴輪が出土していることが挙げられます。通常の円筒埴輪は、<sup>ねんどひも</sup>粘土紐を積み上げて形をつくり、そのあと器面に残った凹凸を正目板の小口を使って平滑にするので、器面には細かな木目の痕が残ります。ところが、3基の古墳から出土した埴輪には、方形や菱形の升目状の<sup>あつこん</sup>圧痕が観察される資料が含まれています（写真2・図3）。この升目状の圧痕は、埴輪の表面を整える際に、縦横に溝を刻んだ板状の工具で押さえることによって生じたもので、このような器面調整の方法を「格子叩き技法」と呼んでいます。この技法は、もともと朝鮮半島の土器製作技術に起源があり、古墳時代中期に日本列島へ渡ってきた朝鮮半島の技術者によってもたらされた新来の技法です。「格子叩き技法」を採用した埴輪は、古墳時代の本庄にも、朝鮮半島から渡來した土器製作技術者が居住し、彼らが埴輪の製作にも関与したことの物語る貴重な資料となっています。

〈参考文献〉柳田敏司 1964 「埼玉県児玉郡児玉町生野山将軍塚古墳発掘概報」『上代文化』第34輯 國學院大學考古学会  
増田逸朗・坂本和俊他 1986 『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県民部県史編さん室

## 5. 笑う埴輪たち ー小島前の山古墳ー

小島2丁目に所在した小島前の山古墳は、本庄市マスコット「はにぽん」のモデルとなった「笑う盾持人物埴輪」を出土した古墳として知られています。平成10年～11年に行われた発掘調査の結果、堀を含んだ直径約24m、高さ4m以上の規模をもつ円墳で、墳丘が二段に構築され、墳丘斜面には崩落を防ぐため、拳大の河原石を用いて葺石が施されていることが明らかになりました。埋葬施設は横穴式石室で、調査の時点では、すでにほとんどの石材が抜き取られた状態でしたが、石室の入り口部分と墳丘の一部は、かろうじて破壊を免れ、周辺からは多数の埴輪片と、古墳に供えられたと考えられる土器類が出土しました（写真1）。古墳の築造年代は、円筒埴輪の型式などから、6世紀後半と推定されます。

出土した埴輪には、盾持人物3点（写真2）のほか人物、家などの形象埴輪や円筒埴輪が含まれていました。とくに盾持人物埴輪のうち2点は、基部が原位置を保った状態で検出され、写真2-2が

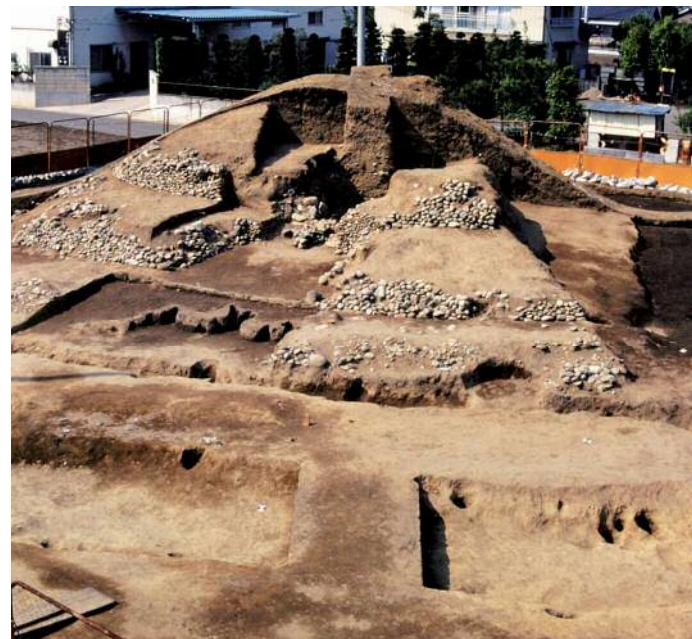


写真1 小島前の山古墳の調査状況



写真2 小島前の山古墳出土盾持人物埴輪

石室入り口に向かって右側に、写真2-3と同じく左側に、それぞれ古墳の外側を向いて立てられていたことが判明しました。このうち入り口の右側に置かれた1点（写真2-2）が、「はにぽん」のモデルとなつた埴輪です。高さ115cmと大型で、頭頂部に筒形の器物を着け、後頭部と額に紐を垂らし、大きな耳、高い鷲鼻、しゃくれた頸をもち、眼孔が三日月形に切り抜かれ、口は口角を上げて笑う表情を表現しています。盾持人物埴輪は、これまでに全国で200例以上が確認され、そのなかには異相の人物として表現されるものも含まれますが、この盾持人物埴輪ほど個性的で特異な容貌をもつ資料は他に例を見ません。

主軸長100mを超える大型前方後円墳の場合、盾持人物埴輪は、さまざまな姿の男女が集合した人物埴輪群の配列区画から離れて、堀の外側をめぐる堤の上などに、点々と置かれることが知られています。このことから、盾持人物埴輪は、他の人物埴輪とは異なり、盾を持って古墳外縁の要所を守る目的で配置されていたと考えられています。小島前の山古墳の盾持人物埴輪（写真2-2）の顔を仔細に観察すると、口の3箇所に上下に窪んだ部分があって、何かが嵌め込まれていた痕跡のように見えます。人物埴輪の中には、口に白い石を嵌め込んで、歯を見せる表情を造形する例がまれに見られますが、この盾持人物埴輪も、本来は歯を剥き出した状態で笑っていた可能性があります。歯を見せるという行為には、「威嚇」や「辟邪」の意味があったと考えられますが、小島前の山古墳の場合、盾を構えながら歯を見せて笑う異貌の人物が、石室入り口の左右に配置されていた事実から推測すると、これらの盾持人物埴輪は、古墳とそこに葬られた人物を守護する役割を負っていたことが想定されます。

笑う人物埴輪は、出土例が少なく、全国でわずか10点あまりが確認されているに過ぎません。しかも、古墳時代後期の関東地方だけに見られる資料です。その中では、盾持人物埴輪が比較的多く、小島前の山古墳のほかにも群馬県と茨城県で2例ずつが知られています。本庄市では、同じ小島前の山古墳から笑う女性（写真3）が、また近くの小島山の神古墳からは、笑う男性（写真4）が出土しています。笑う女性埴輪は、盾持人物とは異なり、口を大きく開けることなく、穏やかな笑みを湛えています。大きく髪を結った髪には櫛を差し、耳は玉と耳環で飾り、頸にも丸玉を連ねたネックレスをつけるなど、身体装飾が豊かなことから、高貴な身分の女性を表現していると考えられます。

#### 〈参考文献〉

- 太田博之 2001 『旭・小島古墳群－前の山古墳－』 本庄市埋蔵文化財調査報告第23集  
本庄市教育委員会  
埼玉県立さきたま史跡の博物館 2014 『ハニワの世界』



写真3 小島前の山古墳出土  
女子人物埴輪

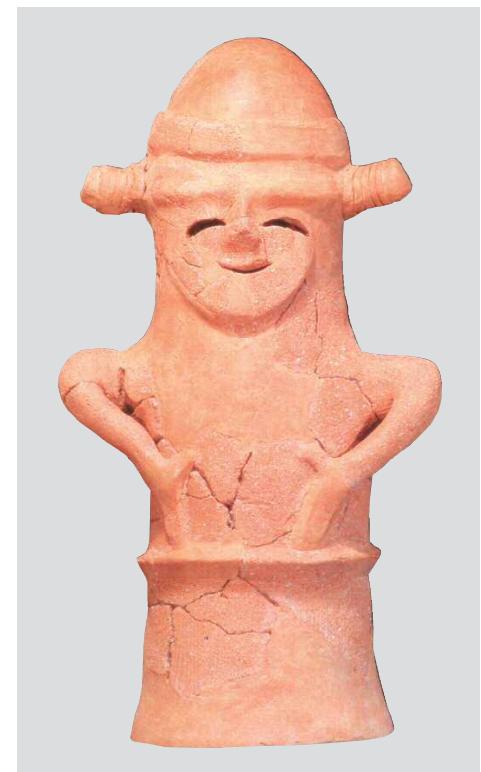


写真4 小島山の神古墳出土  
男子人物埴輪

## 6. 古代ペルシアのガラス玉 ー長沖203号墳ー

長沖古墳群は、児玉町高柳から児玉南にかけての小山川左岸一帯に分布する埼玉県内最大規模の古墳群です。4世紀後半から7世紀にかけての300年余りにわたって形成され、すでに消滅した古墳を含めると、現在までに、前方後円墳や帆立貝形古墳を含む207基の古墳が確認されています。長沖古墳群では、これまでの発掘調査でも、多くの貴重な遺物が出土していますが、平成25年の発掘調査で、長沖203号墳から出土した重層ガラス玉は、とくに注目すべき資料といえるでしょう。

長沖203号墳は、古墳群の最も北に位置する円墳で、長径22m、短径19mのやや不整形な墳丘に葺石と埴輪を備え、埋葬施設には横穴式石室を採用していました（写真1～3）。築造時期は、円筒埴輪の型式や形象埴輪の組成から、6世紀後半と推定されます。重層ガラス玉は、鉄製刀装具、鉄鎌、鉄製刀子、銅地塗銀の耳環、緑色凝灰岩製の管玉、水晶製切子玉、ガラス製トンボ玉、須恵器などの副葬品とともに石室床面から出土しています（写真4）。

重層ガラス玉とは、二重構造をもつガラス玉の総称で、透明なガラスに装飾的な効果をもたらせるため、内側と外側のガラスの間に、金箔や銀箔を挟み込むという高度な技術によって製作されています。「ゴールドサンドウィッチャグラス」、「金層ガラス玉」となどと呼ばれることもあります。長沖203号墳からは、この重層ガラス玉が3点出土しています。大きさは、高さ3.2～4.0mm、最大径4.2～5.0mmで、普通のガラス玉とは異なる金属質の光沢があります（写真5、図1）。発掘後の整理調査の過程で、マイクロフォーカスX線撮影による観察や、蛍光X線分析による材質特性の調査を行い、製作技法や内部の構造、さらにはガラスの化学組成の特徴な



写真1 調査前の長沖203号墳



写真2 葦石・埴輪検出状況



写真3 墳丘・石室検出状況



写真4 重層ガラス玉検出状況

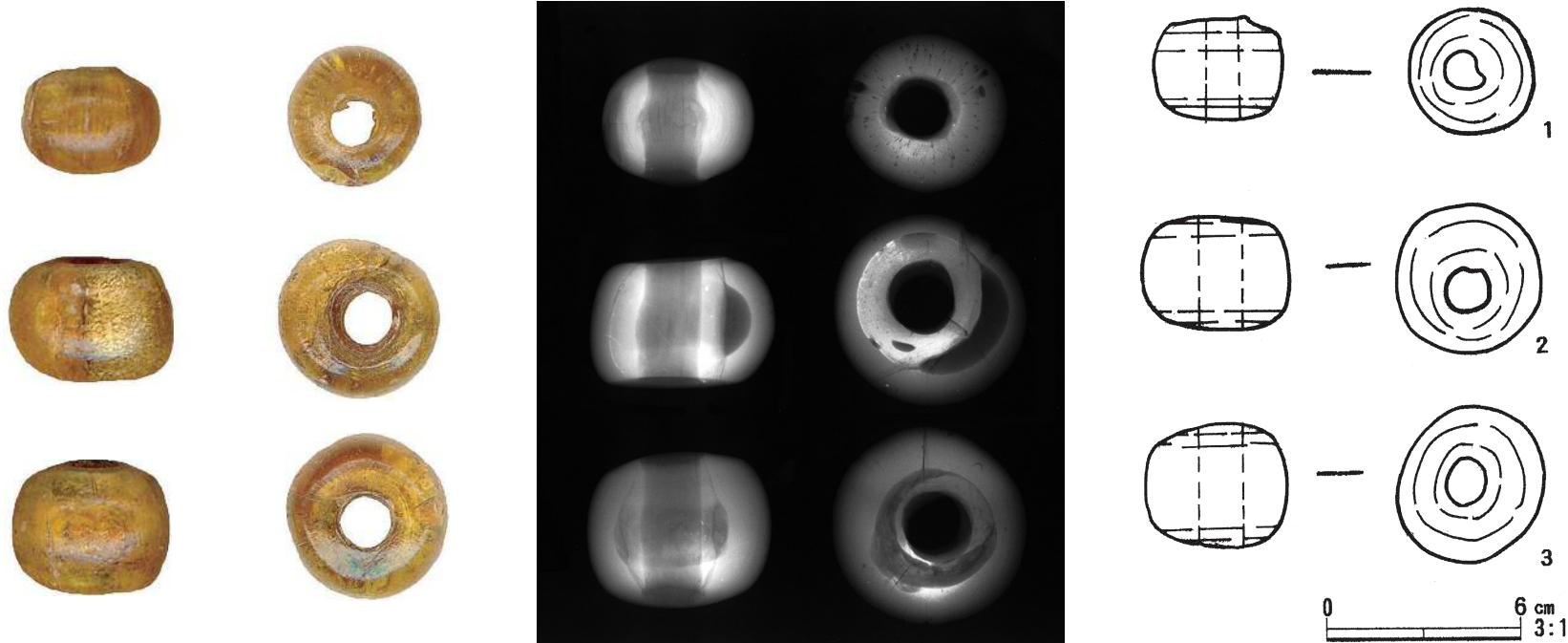


写真5 重層ガラス玉（左）とそのX線画像（右）

図1 重層ガラス玉実測図

どが明らかになりました。まず、長沖203号墳の重層ガラス玉の内部には、金箔ではなく、銀箔が挟み込まれている可能性が高いことが判りました。また、ガラスの色調が、「アンバーガラス」と呼ばれるうすい黄褐色をしており、この黄褐色のガラスと銀箔を組み合わせることによって、金箔を用いた「金層ガラス玉」と似た発色となるように工夫してつくられていたことが推測できます。

さらに、ガラス玉の製作地を推定する手がかりも得ることができました。世界の古代ガラスは、生産地によって種類が異なり、含まれる成分にも相違があることが判っています。古墳時代の日本列島に流通したガラス製品には、①鉛ガラス、②鉛バリウムガラス、③カリガラス、④高アルミナソーダ石灰ガラス、⑤ナトロンガラス、⑥植物灰ガラスの6種類の材料が確認されていますが、分析の結果、長沖203号墳の重層ガラス玉には、⑥植物灰ガラスが使用されていることが判明しました。これまでの研究で、この植物灰ガラスは、古代中央アジアのササン朝ペルシアの領域で生産されたガラスであることがわかっています。

一方、古墳時代に相当する段階の東アジアには、重層ガラス玉を製作する技術は存在しなかったと考えられています。つまり、東アジアで出土するこの時期の重層ガラス玉は、輸入されたガラス素材を用いて、中国大陸や朝鮮半島でつくられたものではなく、製品としてペルシアからもたらされたと考えられるということです。長沖203号墳の重層ガラス玉も、遠く日本列島まで船載されたのち、古墳の築造に關係した人物が、何らかの手段で入手し、最終的に古墳の副葬品として選択した結果、現代の発掘調査で発見されたと言います。古墳時代の日本列島には、東南アジアや中国大陸、朝鮮半島など多方面から、さまざまなガラス製品がもたらされていますが、中央アジア製の重層ガラス玉が、どのような経緯で本庄市の古墳に副葬されることになったのか、将来に残された大きな研究課題です。

#### 〈参考文献〉

- 谷一 尚 1993 『ガラスの比較文化史』 杉山書店
- 田村朋美 2013 「西方地域のガラス玉」『シルクロード～オリエントの世界～』 海の道むなかた館
- 恋河内昭彦 2015 『長沖古墳群XV - 長沖 203 号墳の調査 -』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第43集 本庄市教育委員会

## 7. 横穴式石室と二重堀が残る円墳－秋山庚申塚古墳－

秋山古墳群は、小山川右岸の丘陵地帯から自然堤防上にかけて、東西に長く分布する古墳群で、いまでも前方後円墳や帆立貝形古墳を含む40基以上の古墳が残されています。秋山庚申塚古墳は、古墳群の南東の端に位置し、現存する古墳の中では、前方後円墳である秋山諏訪山古墳に次ぐ規模をもっています。

昭和33年に、埋葬施設を中心とする調査が行われ、南南西に開口部をもつ横穴式石室（図2）の内部から、馬具（図3-1～6）、鐵鏃（同7～25）、瑪瑙製や碧玉製の勾玉（同26～31）、銀製や金銅製の耳環（同32～37）、刀装具（同38～40）などの豊富な副葬品が出土しました。また、昭和62年には、旧児玉町の町史編さん事業の一環として、墳形と規模を確認するための調査と、石室の実測作業が行われ、墳形が円墳であること、墳丘の周囲に二重の堀を備えていること、墳丘直径約34m、内堀幅3～5m、中堤幅3～6m、外堀幅約4～9mの規模を有することなどの新たな事実が判明しました。

横穴式石室は、埋葬空間である玄室の側壁が緩やかな曲面をなす「胴張型」と呼ばれる設計を採用し、さらに大きな塊石と細長い河原石を組み合わせて積み上げる「模様積」という技法を取り入れています。また、奥壁には結晶片岩の巨石が、入り口にあたる玄門部には、緑泥石片岩の板石が使用されるなど、多様な石材を巧みに併用して構築されていることも特筆すべき点です。石室各部の計測値は、全長7.72m、奥壁幅3.13m、玄室長5.05m、最大幅4.05m、奥壁高さ2.3m、羨道長2.66m、羨門幅1.73



写真1 秋山庚申塚古墳の現況

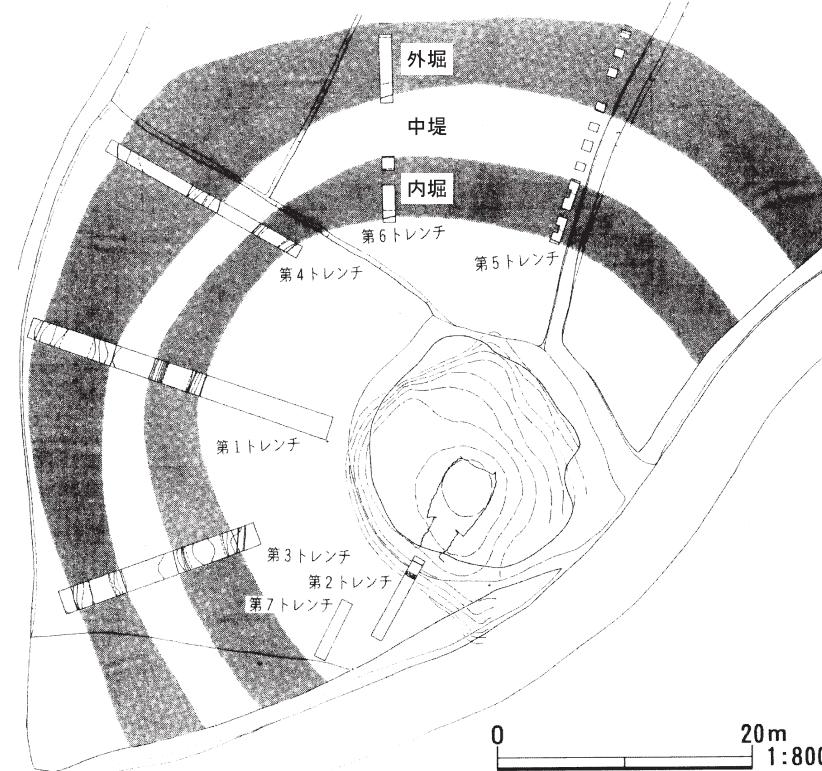


図1 秋山庚申塚古墳全体図

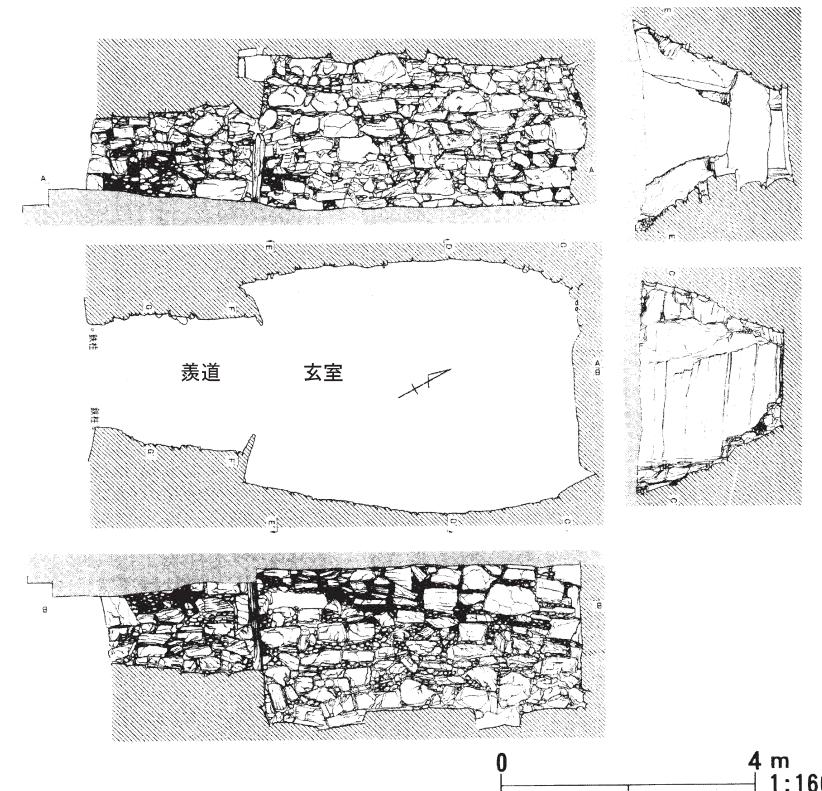


図2 秋山庚申塚古墳石室実測図

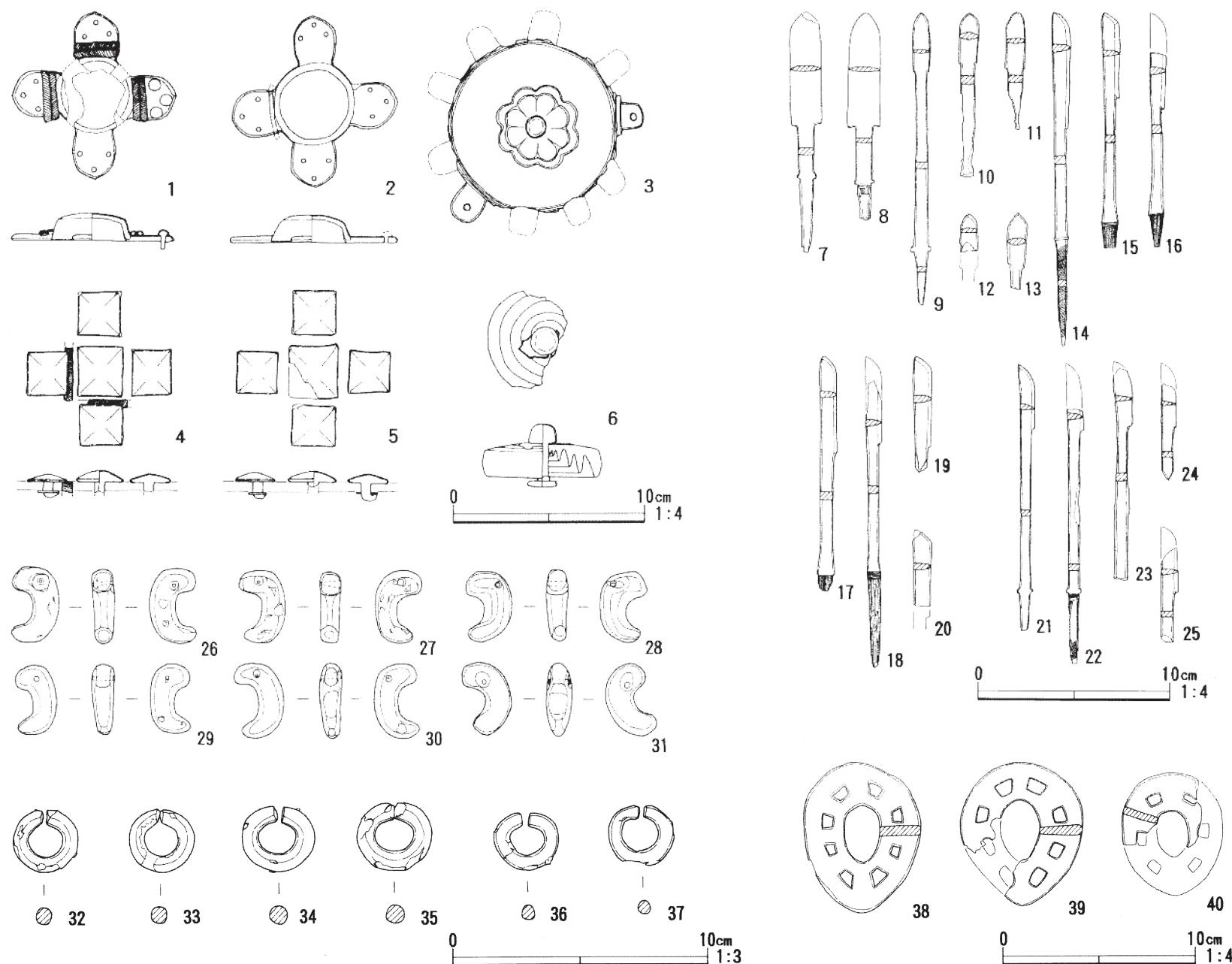


図3 秋山庚申塚古墳石室出土遺物実測図

mで、本庄市に残る横穴式石室の中では、最も大きな空間を有しています。

二重の堀が存在することも、円墳としては珍しい事例といえます。二重の堀は、行田市埼玉古墳群など、100m級の前方後円墳や、7世紀の大型方墳などに付属することが一般的ですが、直径40mに満たない規模の円墳では、ほとんど例がありません。堀幅も墳丘規模に比べると広く、外堀の外周では、推定で最大直径74mの規模があり、大型の横穴式石室とともに、この古墳を築造した人物の勢威の大きさが窺えます。堀の内部からは、円筒埴輪のほか、家、人物、馬など各種の形象埴輪片、須恵器の甕が検出されました。埴輪は内堀だけではなく外堀からも検出されていることから、墳丘ばかりではなく、中堤の上にも、形象を含む多数の埴輪が配置されていたことが推測されます。

古墳の築造時期は、円筒埴輪や馬具の型式から、6世紀後半と考えられます。しかし、製作時期の異なる馬具が複数検出されていること、鉄鏃の型式にも時期差が認められること、耳環が6点3対出土していることから、最初の人物が葬られた後も、7世紀の初頭にかけて、少なくとも2回の追葬が行われたことが推定されます。

#### 〈参考文献〉

- 大谷 徹・田中広明他 1990 『秋山古墳群－庚申塚古墳・諏訪山古墳の調査－』 児玉町史資料調査報告 古代 第2集  
児玉町教育委員会  
関 義則・宮代栄一 1988 「県内出土の古墳時代の馬具」『紀要』第14号 埼玉県立博物館

## 8. 古墳時代後期の埴輪製作遺跡－宥勝寺裏埴輪窯跡－

宥勝寺裏埴輪窯跡は、古墳に並べるための埴輪を製作した遺跡で、大久保山丘陵の北東に伸びる支丘先端部の東斜面に位置しています。窯跡の所在する丘陵斜面では、焼土とともに埴輪が出土することが知られ、早くから埴輪窯跡の存在が推測されていました。昭和51年に刊行された『本庄市史』資料編には、それまでに現地で採集された資料が紹介されています。また、昭和53年7月には、早稲田大学の宥勝寺北裏遺跡調査会が確認調査を実施し、3基の埴輪窯跡一部を検出しています。さらに、本庄市教育委員会が平成13年に、範囲確認を目的とした全面的な調査を実施したところ、5基の埴輪窯跡が、良好な状態で残されていることが明らかになりました（写真1・2、図1）。

埴輪の製作は、3世紀中頃から近畿・瀬戸内地方で始まり、その後の古墳分布の拡大とともに、製作技術も国内に広まって行きます。4世紀の終わり頃、半地下式の登り窯を使って土器を焼く技術が、朝鮮半島から伝わると、やがて埴輪も窯で焼かれるようになります。関東地方へも、5世紀の中頃にはこの技術が伝わり、以後、埴輪の製作が終了する6世紀末まで、関東各地で埴輪窯の操業が続ります。

宥勝寺裏埴輪窯跡で検出された登り窯は、長さ約7m前後、幅1.5mほどの大きさがあります。主軸は、丘陵斜面の等高線に対してほぼ直交し、丘陵の傾斜を有効に利用して構築されていることが判ります。他の埴輪製作遺跡の調査事例を参考にすると、窯の最も下の部分には燃料の薪を投入するための焚口があり、その手前には作業を行うための平らな空間が設けられていたようです。窯の内部は、薪を燃やす燃焼部や、埴輪を置く焼成部があり、最上部には煙を出すための排気口もつくられています。これまでの調査では検出されていませんが、窯の近くには、材料の粘土を採掘する場所や、埴輪を造形する工房、造形後の埴輪を陰干しするための施設なども存在



写真2 1号(右)・2号(左)埴輪窯跡検出状況



写真1 宥勝寺裏埴輪窯跡遺構検出状況

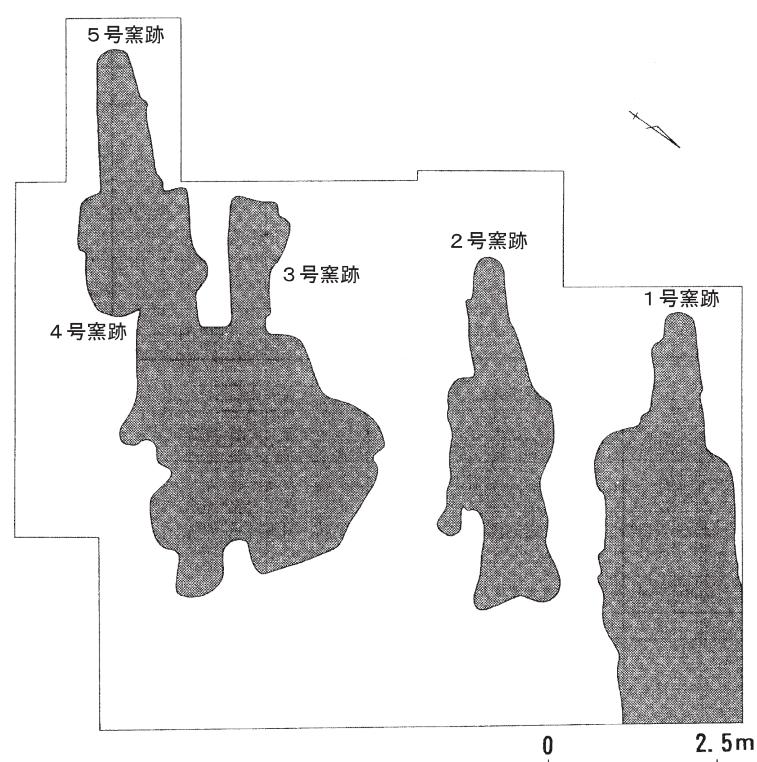


図1 墓輪窯跡全体図

したことでしょう。窯の周囲からは、多数の埴輪片が検出されています。とくに、1号窯跡の炊口付近からは、鞍形埴輪4点が、良好な状態でまとめて出土しました（写真3・4）。鞍は矢を入れて、背負って運搬するための道具で、盾、矛、大刀とともに武具形埴輪の主要な器種のひとつに数えられます。現在ではほとんど実用されることのなくなった武具ですが、今でも伊勢神宮に奉納される御神宝などに見ることができます。ふつう埴輪窯でつくられた製品は、周辺の古墳に供給されてしまうので、全体の形が判明する資料が残されていることは少ないのですが、1号窯跡で検出された4点の鞍は、焼成時になんらかの原因で破損してしまったために、まとめて遺棄されたものと推測されます。このほかに、円筒埴輪や人物、馬、家、团扇のような形をした翳など、各種の形象埴輪の破片も検出され、古墳から出土するほとんどすべての器種を製作していた様子が窺えます。

埴輪窯の操業時期は、円筒埴輪の型式などから、6世紀末葉と推定されます。3～5号窯は重複をしているので、窯を作り替えながら、一定の期間、操業が続けられていたようです。製作された埴輪が使われた古墳は、まだ特定されていませんが、大久保山丘陵やその周辺には、多くの古墳が分布しているので、今後これらの古墳の調査が進めば、宥勝寺裏埴輪窯製の製品の供給先も解明されることでしょう。



写真3 1号埴輪窯跡遺物検出状況



写真4 1号埴輪窯跡出土鞍形埴輪

#### 〈参考文献〉

- 菅谷浩之 1976 「宥勝寺北裏埴輪窯跡」『本庄市史』資料編 本庄市  
 佐々木幹雄・高橋龍三郎・守茂和他 1979 『宥勝寺北裏遺跡』 宥勝寺北裏遺跡調査会  
 太田博之・松本 完他 2003 『宥勝寺裏埴輪窯跡・宥勝寺北裏』 本庄市埋蔵文化財調査報告第26集 本庄市教育委員会



## IV 古代

### 1. 日本最多のガラス小玉鋳型が出土－薬師堂東遺跡－

#### はじめに

遺跡の発掘調査をしていると、特に古墳の埋葬施設などから、写真1の様なガラスのビーズ（ガラス小玉）が出土することがあります（この写真は、本庄市日の出三丁目の御堂坂古墳群第2号墳から出土したものです）。こういった古代のガラス小玉には、中

国・インド・東南アジアや遠くペルシャ・地中海周辺で作られて、製品として国内に持ち込まれたものが多くあります。

そんな中で、間違いなく国内でガラス小玉が作られたと判明する場合があります。それは、ガラス小玉の「鋳型」が遺跡から出土するケースです。ガラス小玉の作り方は何種類もあるのですが、その中で、鋳型によるガラス小玉製作は、その製作場所が分かる貴重な例となります。ガラス小玉は全国の遺跡からたくさん出土しています。しかし、ガラス小玉の国内生産を証明するガラス小玉鋳型は、日本中あわせても100点程度しか発見されていませんでした。しかも、そのほとんどの遺跡で破片1点から5点程度が出土しただけで、製作工房の様子や立地を推定するのも困難な状態がありました。

本庄東中学校の校舎建て替え工事に先立って平成24年度に実施された発掘調査で「ガラス小玉鋳型」が多量に出土し、新聞等にも大きく取り上げられました。割れていない一枚ものの完形品の出土も全国初となるものです。本庄東中学校の敷地は薬師堂東遺跡と呼ばれる遺跡の中にある、これまで2度の発掘調査が実施され、平成24年度の調査は3回目の調査なので、C地点と呼んでいます。C地点では、約300軒の竪穴住居跡など古墳時代～中世の遺構が見つかっており、現在、正式な発掘調査報告書を作成中です。ここでは、その概要と調査報告書の途中経過を報告します。

#### ガラス小玉の製作技法と鋳型

現代でも装飾品として親しまれているガラスビーズですが、古代のガラス小玉の材料・技法は本質的に現代のものと変わりません。ビーズの色はガラスに含まれる金属等の不純物によって発色しますので、



写真1 本庄市日の出三丁目の古墳から出土したガラス小玉



写真2 薬師堂東遺跡のガラス小玉鋳型  
(完形品)



大昔から色々な材料が試みられてきました。古代のビーズでも青・緑・黄色・赤褐色などの色があります。また、形や大きさはその製作技法によって変化し、リング状のものや、端面のはっきりした管状のものもあります。古代のガラス小玉の作り方で、主なものは、（1）ガラスをストローの様に管状に伸ばしてから輪切りにする管切り法（引き伸ばし法）。（2）粘土等を芯材として熱したガラスを巻き付けて、後から芯材を取り除く巻き芯法。（3）鋳型の中にガラス粉を入れて鋳型ごと加熱することで大量に作成する鋳型法、などがあります。

ここで挙げた（1）や（2）の方法では、適切な材料と熱源があればどこでも作れますので（もちろん非常に高温なので簡単に、とはいきませんが）、ビーズ玉をどこで作ったのかを特定するのは困難です。一方、（3）の鋳型法は他に転用できない鋳型がはっきりと残りますので、工房の様子や場所、作った人の集団系統などが推定できる貴重な資料になります。

これまでに全国の遺跡から出土したガラス小玉鋳型は、小破片を全て合わせても100点程度にしかすぎませんでした。最も多く出土した大阪府の船橋遺跡でもわずかに破片24点のみです。今回、薬師堂東遺跡で出土した鋳型の数は、破片数にして200点以上に達しており、したがって現在、国内出土鋳型の2／3以上は本庄市出土のものです。また、完形品は単に美観が優れているというだけでなく、ガラス小玉の製作技法や鋳型の使い方を解明するうえで欠かせない資料となります。例えば写真2を見ると、一部に型孔が開いていない部分があります。ここをハサミの様な工具で掴んで炉に出し入れしたものと考えられます。

発掘調査では製品としてのガラス小玉は発見されませんでしたが、写真4の様に、ガラス小玉が鋳型の中に残ったままのものもあり、ガラスの成分分析などを行う上で絶好の資料となります。

### ガラス小玉鋳型の出土の様子

薬師堂東遺跡C地点の発掘調査では、図1の様に竪穴住居跡などが高密度で検出されました。鋳型はそのうち7世紀頃の竪穴住居跡から、投げ込まれたような状態で発見されました。図1を見ると、C地点の南東側の遺構から集中して出土しており、それ以外の場所からはほとんど出土していないのが分かります。したがって、



写真3 薬師堂東遺跡出土のガラス小玉鋳型



写真4 鋳型に残ったガラス小玉



図1 ガラス鋳型出土遺構図

この集中範囲のごく近傍、おそらく20~30m以内の範囲に工房があった可能性が高いと考えられます。今回の発掘調査の範囲には、はっきりとした加熱痕跡のある炉などの遺構は見つかっていないので、調査範囲のすぐ東側に、今も工房の跡が残されているかもしれません。

写真5は、完形のガラス鋳型を出土した第257号住居跡の、発掘途中の写真です。この住居は、完形品を含め、29点の鋳型片が出土し、一つの遺構からの出土数としては2番目に多い遺構です。この住居は同時代の他の住居と違ってカマドがありませんでしたが、その理由は分かりません。ただ、ガラス鋳型は、住居の床面に直接置かれた状態ではなく、この住居に人が住まなくなつてから、竪穴住居が土で埋まっていく途中で投げ込まれたようです。つまり、たまたまこのすぐ近くで鋳型の作業をしていたのか、あるいはここがゴミ捨て場の様な場所になっていたのかもしれません。一緒に捨てられた土器を調べることで、その年代が分かりますので、ガラス鋳型が使われた年代も、同じ頃であろうと推定できます。

また完形の鋳型が放り込まれているということは、この場所で鋳型によるガラス小玉作りを行わなくなつたことを意味するかもしれません。ガラス鋳型やその技法は、官営工房に匹敵するような、厳重な管理がされていたと想像され、うっかり完形品の鋳型を捨ててしまった可能性は低いでしょう。何らかの事情で薬師堂東遺跡でのガラス小玉生産が、まさにこの時、終わったのかもしれません。

#### ガラス小玉製作工房の位置

同じくガラス小玉鋳型が出土している遺跡として、奈良県の飛鳥池<sup>あすかいけ</sup>遺跡があります。同遺跡は7世紀後半の官営工房の遺跡として有名ですが、丘陵先端付近の小規模な断崖の上に作られています。小さな谷部では水の入手も可能であったと思われます。

さて、薬師堂東遺跡の製作工房は具体的にどこだったのでしょうか。これだけ大量に鋳型があるので、加熱した際の炉や焼土があるでしょうし、原材料のガラス片や失敗品、鋳型の破片などが工房のゴミ捨て場にまとまっているかもしれません。

図1の鋳型の出土分布からすると、今回の発掘調査範囲よりもう少し東側でしょうか。図2の緑色は低地と谷地形を示していて、白い部分は本庄台地の平坦面です。C地点のすぐ東側に深い谷が入っており、ここで作業用の水が調達できた可能性があります。

また、工房には有力な管理者がいたことでしょう。写真1に載せたガラス小玉が出土した御堂坂古墳群（図2の赤丸が古墳群の位置を示します）は薬師堂東遺跡から300m程しか離れていません。この古墳がガラス工房の管理者のお墓かどうかは分かりませんが、写真1のガラス小玉にも鋳型で作ら



写真5 第257号住居跡出土状況(右側の丸いものが完形品の鋳型。手前のものは土器片)

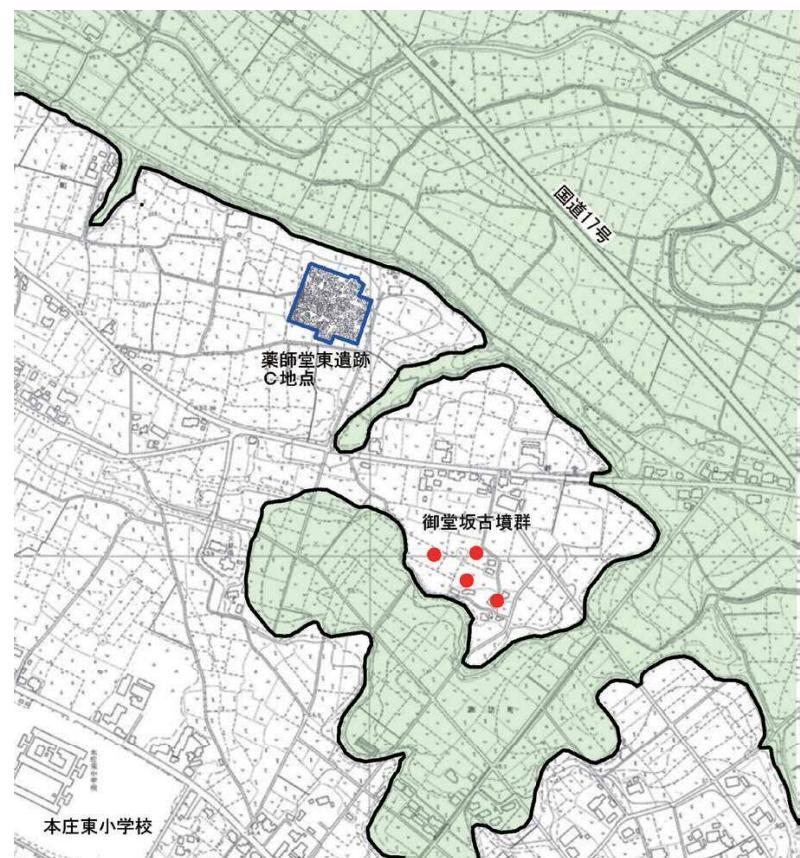


図2 薬師堂東遺跡と御堂坂古墳群周辺

れたものが含まれており、何らかの関係があるかもしれません。

### 鋳型によるガラス小玉製作技法

現代のアフリカのガーナ共和国で、今回出土した鋳型とそっくりなものが現在でも使われ、ビーズが作られています。現地で調査した臼井さんによると、①鋳型の材料として蟻塚の土を使い、②1つずつ手作業で2段の孔（型孔と軸孔）を開けて、土器を焼く様に鋳型を焼く。③ガラスを粉状に碎いたものを用意し、④芯孔にキャッサバの茎を挿して、その周りにガラス粉を充填する。⑤400～500度で30～40分加熱してキャッサバを焼く。⑥800度で10～15分再加熱してガラスを溶解させ、ビーズの形（ドーナツ状）にする。⑦冷やして取り出してから角を丸めて製品とする。という手順の様です。蟻塚の土やキャッサバの茎などは日本では中々手に入りませんが、国内でも多くの研究者が色々な材料や技法で製作実験を試みており、かなり良く再現できている様です。薬師堂東遺跡で作られていたガラス小玉が現代のガーナと同じ手順で作られていたかどうかは分かりませんが、そもそも両者の技術的起源は同一である可能性が高く、海外との比較という点でも薬師堂東遺跡出土鋳型は意義が大きいと考えられます。

### 材料はどこから来たのか

鋳型法によるガラス小玉の原料は、ガーナの例で見たように「別のガラス製品」そのものです。別のガラス製品が割れたり、価値がなくなったものを碎いて、ガラス粉を原料としたものと思われます。つまりガラス自体の生産地とガラス小玉の生産地は別にあるということです。ガラス小玉生産地は先に鋳型の出土状況から推定しましたが、「ガラス生産地」はどこだったのでしょうか。ガラスというのは、ケイ酸塩を主な材料とした物質ですが、それ以外の含有物から、世界中のどこで取れた原材料であるか推定することが出来ます。今回、鋳型の中に残っていたガラスを分析した結果、元々は朝鮮半島産のガラスであることが分かりました。したがって、朝鮮半島で作られた何らかのガラス素材を、日本で再利用して新たにガラス小玉を作ったということになります。

埼玉県内でもう一ヵ所ガラス小玉鋳型が出土した遺跡があります。古墳時代前期の大集落である東松山市そりまちの反町遺跡では、ガラスが付着したガラス小玉鋳型と、「ガラス小玉の原料」として持ち込まれた可能性がある別の製作技法によるガラス小玉が出土しています。両者の出土地点はやや離れていますが、分析の結果ほぼ同じ成分と判明しました。薬師堂東遺跡では、材料がどういった形で持ち込まれたのかは分かっていません。仮に一つのガラス小玉が 0.1 g として、完形品の鋳型には161個の型孔があいています。100個の鋳型に同じ数の型孔があるとすると、必要なガラスの重量は 1 kg を超えます。誰がどこから原料のガラスを持ち込んだのかなど興味が尽きません。

#### 〈参考文献〉

- 上野真由美・田村朋美 2012 「埼玉県反町遺跡出土のガラス小玉とガラス小玉鋳型について」『研究紀要』第26号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 臼井洋輔 2007 『謎を秘めた古代ビーズ再現』吉備人出版 (写真6)
- 三宮昌弘 2005 『船橋遺跡Ⅲ』大阪府文化財センター調査報告書第129集 大阪府文化財センター
- 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 2000 『飛鳥池遺跡』飛鳥資料館 図録第36冊
- 増田一裕 1990 『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅳ—御堂坂2号墳の調査—』本庄市埋蔵文化財調査報告第16集 本庄市教育委員会

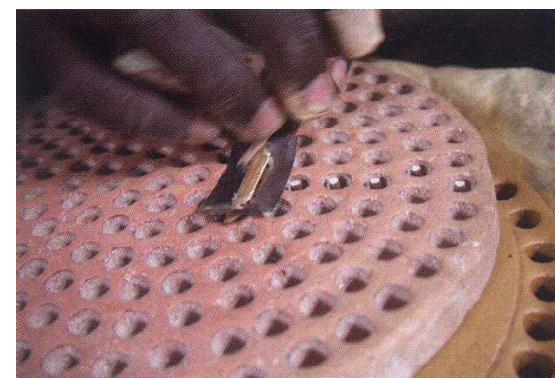


写真6 ガーナでのビーズ作り

## 2. 律令時代の帶金具を出土した古墳 一下野堂開拓1号墳

下野堂開拓1号墳は、旭・小島古墳群の南端部に位置した直径約22mの規模をもつ円墳でした。調査前は、わずかに高さ1mほどの低い墳丘が残るだけでしたが、調査の結果、周囲には幅12m前後の堀がめぐり、埋葬施設の状況も確認することができました（図1）。

埋葬施設は、横穴式石室で、損壊が進行していましたが、床面や側壁の一部が、かろうじて残っていました（図2）。石室の形態は、側壁が緩やかな曲面をなす「胴張型」の石室で、全長5.1m、玄室長3.4m、羨道長1.7mの規模を有することが判りました。壁材は6世紀中頃の榛名山二ツ岳の火山活動に伴って噴出した角閃石安山岩で、加工した人頭大の河原石を小口積みにして、壁全体を構築していました。また、石室の床面にも、壁材と同様の角閃石安山岩が敷かれています。天井石は検出できませんでしたが、他の古墳の石室と同様に、結晶片岩系の板石が使われていたと推測されます。

羨道の前面には、墓前祭祀の場である前庭部が設けられ、前庭部両側の墳丘にも、羨道の側壁から連続する石積みの擁壁が築かれています。前庭部の中央には浅く大きな土坑があり、ここから祭祀に使用された多量の須恵器と土師器が出土しました（図3-6～19）。古墳の築造年代は、横穴式石室の型式から7世紀後半と考えられます。ただし、前庭部出土の土器は8世紀前半から中葉にかけての遺物なので、この頃まで追葬が行われたことが推測されます。

前庭部の出土遺物のなかで注目される資料に、律令期の官人が用いた腰帶に付けられる銅製帶金具があります（写真

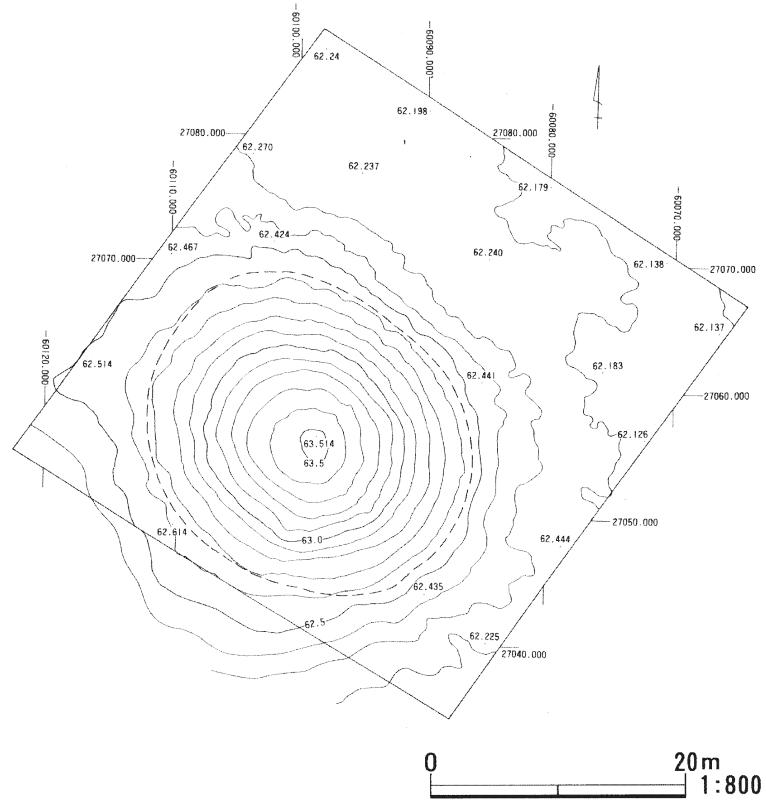


図1 下野堂開拓1号墳墳丘測量図

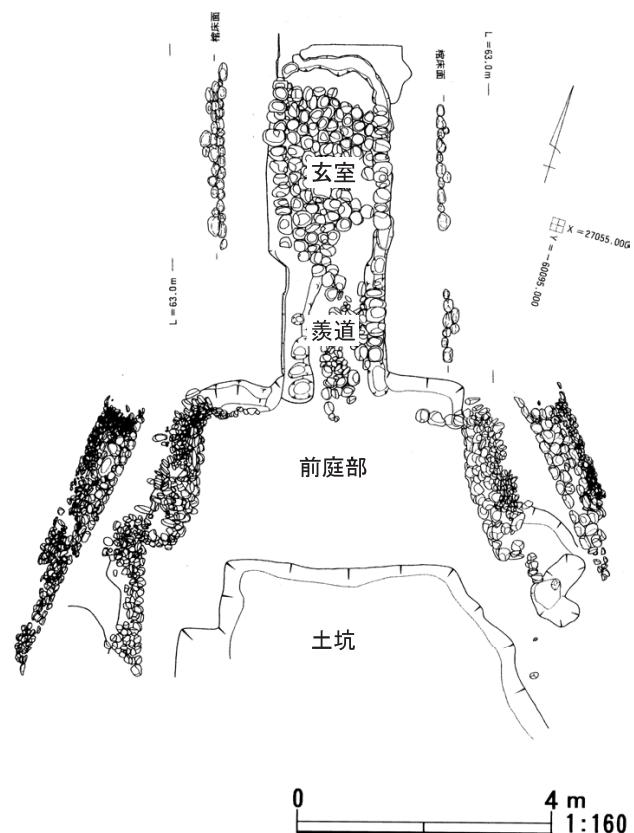


図2 下野堂開拓1号墳石室実測図

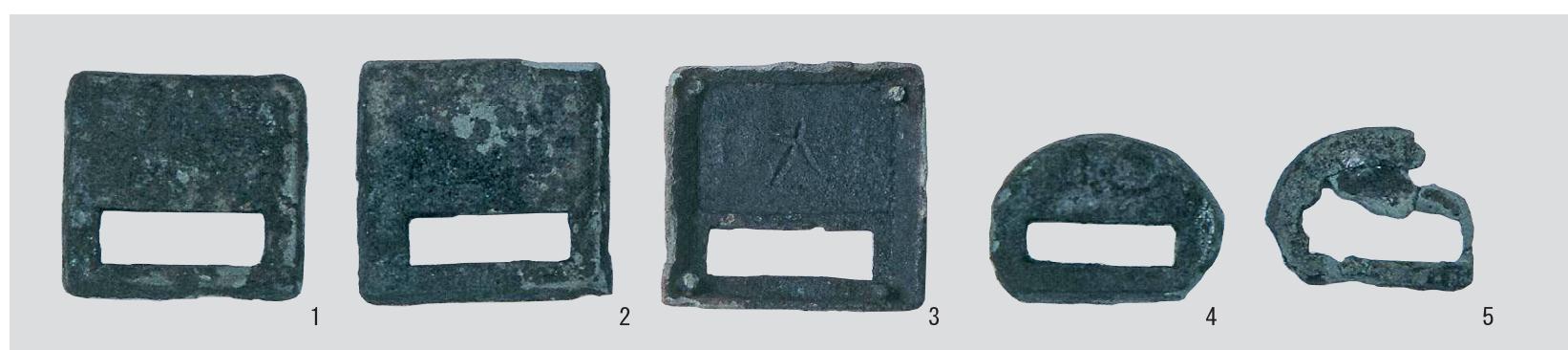


写真1 下野堂開拓1号墳出土の銅製帶金具（1～3巡方、4・5丸鞘）

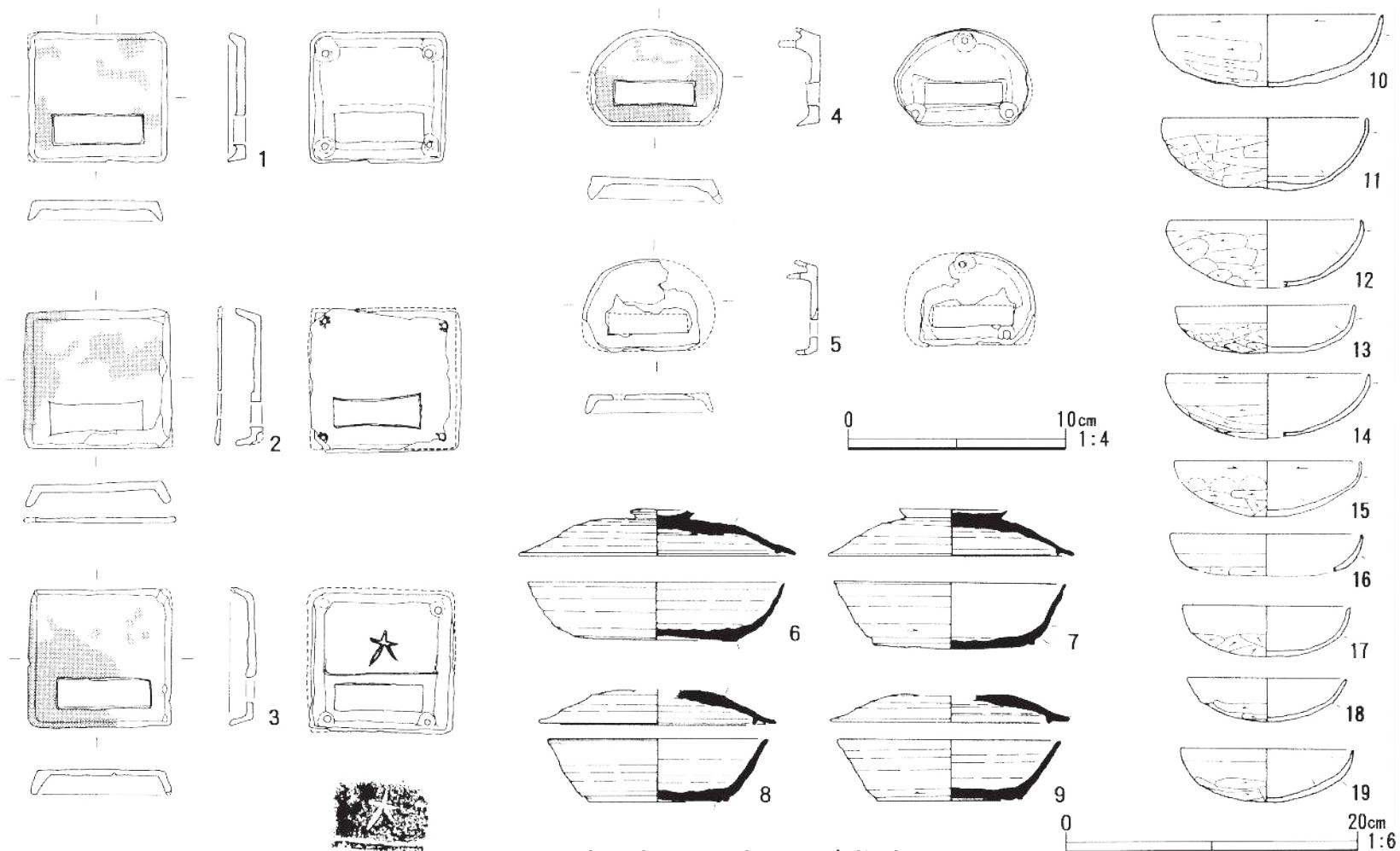


図3 下野堂開拓1号墳出土遺物実測図  
(1~3 巡方 4・5 丸鞆 6~9 須恵器 10~19 土師器)

1)。巡方3点、丸鞆2点の計5点の帶金具で、うち1点の巡方は、裏金具が残った状態で出土しています。出土した帶金具の点数が、帶1本分としては少なく、帶先金具の鉈尾や、バックルにあたるか鉸も伴わないことから、後世に石室内から持ち出されたものと推測されます。

この種の帶金具は「銙帶金具」とも呼ばれ、養老令に規定された腰帯に比定されています。また、『扶桑略記』慶雲4年の項に見える「天下始用革帶」の革帶に、この型式の帶金具が使用されていたことも確実視されています。このことは前庭部出土の土器型式から導かれる年代観とも矛盾しないので、下野堂開拓1号墳出土資料の帰属年代は、8世紀前半とすることが妥当と考えられます。腰帯は官位に就いた人物の身分標識として用いられたもので、通常は任官に伴って貸与されるのですが、下野堂開拓1号墳の資料は、古墳に追葬された人物の装着品、または副葬品であった可能性が高いことを考えると、個人に帰属する場合もあったということかも知れません。

さらに特筆すべき点として、1点の巡方の裏面に、「大」の文字が刻まれていることが挙げられます（写真1-3、図3-3）。文字は帶金具のほぼ中央に、垂孔部を避け、タガネ状の工具を用いて、約1mmの深さに陰刻されています。顕微鏡で観察すると、正確な筆順に沿って4回に分けて刻まれていることがわかります。帶金具に陰刻された文字としては、平城京右京八条一坊十一坪出土の鉈尾裏金具の表面に「大井」、東大寺正倉院御物の鉸裏金具の表面に「東大寺」、「上」などの例が知られています。これらの文字は、帶の所有や所属を示すと考えられますが、金具を帶に取り付けた場合でも、視認可能な部位に刻まれています。しかし、下野堂開拓1号墳の場合は、巡方の裏面に刻まれているため、帶に付けた段階では、すでに文字を目視することはできず、「大」の文字に込められた意味については謎が残ります。

#### 参考文献

佐藤好司 1997 『旭・小島古墳群－開拓1号墳発掘調査報告書』 本庄市遺跡調査会報告第2集 本庄市遺跡調査会

### 3. 奈良時代の人名が記された木簡が出土 一山崎上ノ南遺跡－

本木簡は、ゴルフ場造成工事事業に先立つ埋蔵文化財所在確認によって遺跡の存在が明らかになった本庄市児玉町飯倉に所在する山崎上ノ南遺跡B地点の埋没谷土中から発見されました。

この木簡が出土した遺跡は、秩父山地北東部にあたる上武山地北端の丘陵部を女堀川（旧赤根川）などの小河川によって開析された狭い谷戸及び谷戸に接する丘陵の南斜面地に立地しています。

本遺跡からは、奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居跡11軒、平安時代の須恵器窯1基、土坑8基のほか埋没谷より木杭列によって流路が人工的に変更された様子が窺える溝1条、土師器や須恵器に「長」や「凡」などの文字が書かれた墨書き土器、羽口や鉄滓などの小鍛冶関連の遺物、漆の付着する銅製巡方、ヒノキやサクラで作られた曲物や椀などの木製品が出土しました（図1）。さらに特筆できるものとして紀年銘や人名を記した「紀年銘木簡」が発見されました（写真1）。

この木簡は、奈良時代後期の紀年銘のある木簡の出土としては埼玉県内唯一で、長さ18.3cm、幅3.6cm、厚さ0.7cmで、上部がわずかに破損していましたがヒノキの板に墨で書かれたもので文字面を下にした状態で発見されました（写真2）。書かれていた内容は、「檜前マ名代女上寺稻肆拾束」（ひのくまべのなしろめ てらいね しじゅうそくを たてまつる）「寶龜二年十月二日 稅長 大伴国足」（ほうきにねんじゅうがつふつか せいちょう おおともにくにたり）の二十六文字でした。発見当時、文字は肉眼では読み取れなかったことから埼玉県埋蔵文化財センターに赤外線写真の撮影を依頼し、その赤外線写真を国立歴史民俗博物館の平川南教授（1997年当時）らが鑑定して解読しました。そこで解釈は、

『檜前マ名代女（ひのくまべのなしろめ）という名の女性が、上寺稻肆拾束（寺の稻四十束を返済）したことを古代の郡役所の税長であった大伴国足（おおともにくにたり）という役人が宝龜二年（七七年）十月二日に稻の収納を確認しました。』という内容のもので、春から秋にかけて種糲となる稻を束単位で貸し出し、利子をつけて返済させた収支に關係した内容が書かれていると推定されました。このようないいを「出舉」といい、



写真1 宝龜二年紀年銘木簡

出举とは利息付の貸借にかかるもので、借りた稻の返済をする行為のことをいいます。ここでいう一束は現在の米にして約二升に相当すると考えられることから四十束は米にして約二俵(120kg)に相当するとされています。この木簡が発見されたことにより古代の地方での稻運用の一端がうかがえ、地方役人の税長の役割などを知るてがかりの一つになり、8世紀の地方財政の仕組みや武藏国の古代史研究がより具体的に前進する資料として注目されています。このほか、この木簡に人名が記されていたことから古代児玉郡で明らかになった人名は、従来より知られていた薬師元屋舗遺跡出土の紡錘車に刻記がある『大田マ身麻呂(おおたべのみまろ)』とこのたび明らかになった『檜前マ名代女(ひのくまべのなしろめ)』『大伴国足(おとものくにたり)』の三人となり、児玉郡の古代において関わり合いがあった人名が明らかになったことで重要な発見となりました。

また、木簡が発見された本遺跡(写真3)の周辺の遺跡からは、古代において武藏国分寺が創建された時期の瓦を生産した飯倉窯跡や金草窯跡を含む児玉窯跡群や小規模な製鉄関連の遺構や遺物、炭窯などの工房群と考えられる遺跡が見つかっています。これらのことは、本事業によって発見されたこれら小規模な生産遺跡としての性格がある各遺跡を含め飯倉南部遺跡群と捉えるならば、この飯倉南部遺跡群がいまだに所在が確認されていない古代児玉郡の役所である児玉郡衙との関係があった遺跡群であった可能性も考えることができるでしょう。



写真2 木簡出土状態



写真3 山崎上ノ南遺跡B地点

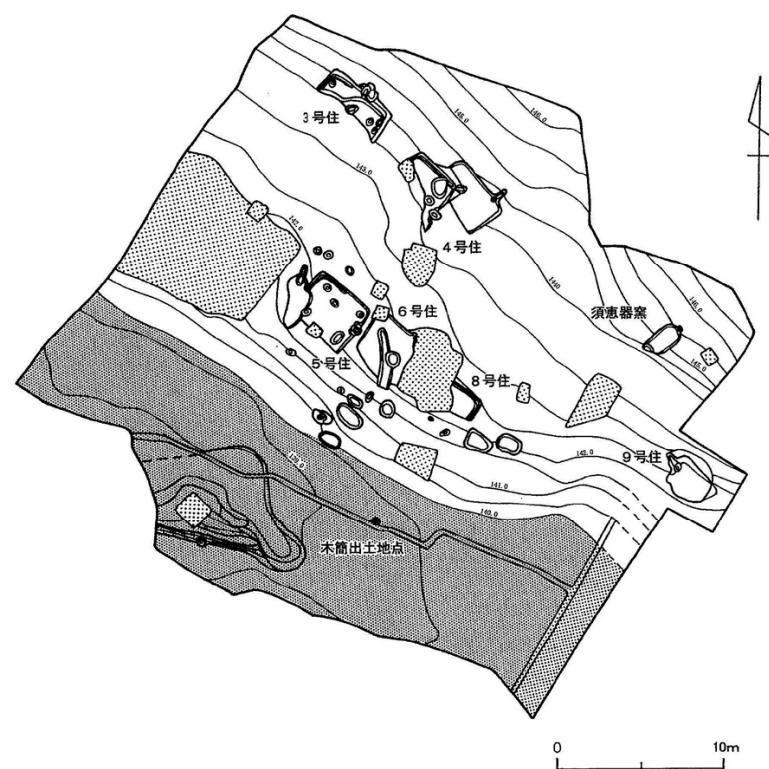


図1 山崎上ノ南遺跡B地点全測平面図

#### 〈参考文献〉

- 有山径世・高橋清文・鈴木徳雄 2015 『飯倉南部遺跡群－ゴルフ場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 本庄市遺跡調査会報告書第39集 本庄市遺跡調査会  
 大熊 季広 1998 「児玉町山崎上ノ南遺跡B地点」『第31回遺跡調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会他  
 鈴木 徳雄 2002 『古代の“児玉郡市”－山崎上ノ南遺跡出土の木簡をめぐって－』 児玉地区文化財保護協会

## 4. 古代の国家的大土木工事 ー児玉条里遺跡ー

児玉町蛭川周辺の地形（写真1）を見ると、水田地帯を走る道路がちょうど東西南北に向いていることに気がつくと思います。本庄市付近であれば、ほぼ真北に赤城山が見えますので、まっすぐの道路の先に山が見える光景を目に入したこともあるでしょう。実はこれは1000年以上前に大規模に水田を整備した時の痕跡なのです。本庄市では昭和の終わり頃から圃場整備事業が行われ、畦道や水路などは使い易く整備されました。全体の区画割や方位などは昔のものをほぼそのまま踏襲しました。写真2は、昭和49年頃の写真ですが、写真1と全体の区画はほとんど変わっていないことが分かると思います。このような区画割は奈良・平安時代頃に全国で作られたもので、「条里型地割」と呼ばれています。

条里型地割の基本は、1辺が約109m（昔の長さの360尺に相当します）の正方形の区画（一坪といいます）を多数組み合わせ、それに伴う畦道や水路などを整備したもので。縦に6坪並んだサイズを1条、横に6坪並んだサイズを1里と呼んだことから、この地割を「条里」と呼ぶようになりました。

田んぼは、四角くて当たり前だと思う人もいるかと思いますが、元々水田は自然の流水にしたがってその形状を変えて作るのが一般的でした。近年観光地にもなっている各地の棚田を見ればイメージし易いでしょう。また、大河川の氾濫原にあたる低地部分では、かつて河川だった古い流路に沿って水田を作っています。

歴史的には、日本列島で米作りが始まった弥生時代（約2000年前）には、山裾の谷地形に流れる小河川を利用したたにせいでん谷水田しか作れず、一区画の面積も収量も小さなものでした。その後、古墳時代になると、土木工事技術の革新によって河川の流れを変え、大規模な平坦面を作り出していくことが出来るようになり、水田全体の面積は急増しました。しかし水田1枚の大きさは3～4 m四方と小さなものでした（写真3の白線が、今井条里遺跡の古墳時代の水田跡）。奈良時代・平安時代になると米作りは広く普及し、國家が税制度として米を徴収するようになると、水田の面積を正確かつ迅速に捕捉する必要が出てきます。そのために利便性が高い「条里型地割」が全国的に施工されたと考えられています。



写真1 児玉町蛭川付近の航空写真



写真2 昭和49年頃の児玉町蛭川



写真3 今井条里遺跡の古墳時代の水田跡  
しかし水田1枚の大きさは3～4 m四方と小さなものでした（写真3の白線が、今井条里遺跡の古墳時代の水田跡）。奈良時代・平安時代になると米作りは広く普及し、國家が税制度として米を徴収するようになると、水田の面積を正確かつ迅速に捕捉する必要が出てきます。そのため利便性が高い「条里型地割」が全国的に施工されたと考えられています。

本庄市には、県内でも有数の規模の条里型地割が存在します。そして、圃場整備や道路工事・河川改修の際に発掘調査が行われ、古代の条里の研究が進んでいます。本庄市の条里遺跡は、主に現在の女堀川の流域に広がっており、地区ごとに名

称を付した金屋条里、児玉条里、今井条里、西富田・四方田条里などがあります。

これまでの発掘調査の成果として、条里水田が作られはじめた時に、廃村になった集落と、新たに作られた集落があることが分かりました。例えば児玉工業団地にある古井戸・将監塚遺跡は西暦700年前後に新たに作られた大集落で、条里水田と関連すると考えられる直線的な大溝も同じ頃に作されました。こういった大集落の再編成現象も、条里の施工が小地域内の単なる用地変更にとどまらず、国家的な土木事業であったことの証拠になるかもしれません。一方で、条里が設定された地区内で正方形の区画（表層条里型地割と言います）が見られたとしても、発掘調査をしてみると必ずしも古代からの条里であるとは限らないことが分かってきました。古い河川の跡や、元々畑だったと思われる所が水田になっていたり、その逆のケースもあり、地表面から条里の様子を単純に捉えることはできません。

本庄市の条里水田には、女堀川（本庄市史では「金鑽川・赤根川水系」と呼んでいます）と九郷用水が大きくかかわっています。女堀川は神川町の金鑽神社付近を源流の一つとし、中流域は国道462号に沿い、早稲田の杜地区を通過して小山川に流れ込みます（図1）。元々は女堀川（図1青線）の流水を使って水田（図1緑色範囲）を潤していたと考えられますが、条里が始まってからしばらくすると、耕作面積の増大に伴い水量が不足し、神流川から直接水を引くという大事業が実施されました。それが現在、児玉町保木野を通り、児玉町上真下付近で女堀川に流れ込んでいる九郷用水です。用水掘削の時期は諸説ありますが、平安時代頃までには既に作られていたと考えられています。もっとも現在の用水は地中パイプライン化されているため、私たちの目に触れるのは排水路としての河川です。

北堀にある東福寺には、九郷用水に関わる竜の伝説が残されています。干ばつで人々が苦しんでいた時に、神川町の金鑽神社に祈願に行ったところ、金色の竜が出現し、野原・田畠を進み東福寺付近で姿を消した。その道筋を掘削したのが九郷用水である、というものです。話はあくまでも伝説ですが、九郷用水が人工水路であることを語り継いだということと共に、用水が人々の生活に密着したものであったことを示すものと言えます。

**〈参考文献〉** 岩田明広 1998 『今井条里遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第192集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
鈴木徳雄 1989 『真下境東遺跡』児玉町文化財調査報告書第9集 児玉町教育委員会  
写真1,2は国土地理院撮影の空中写真を使用したものである。

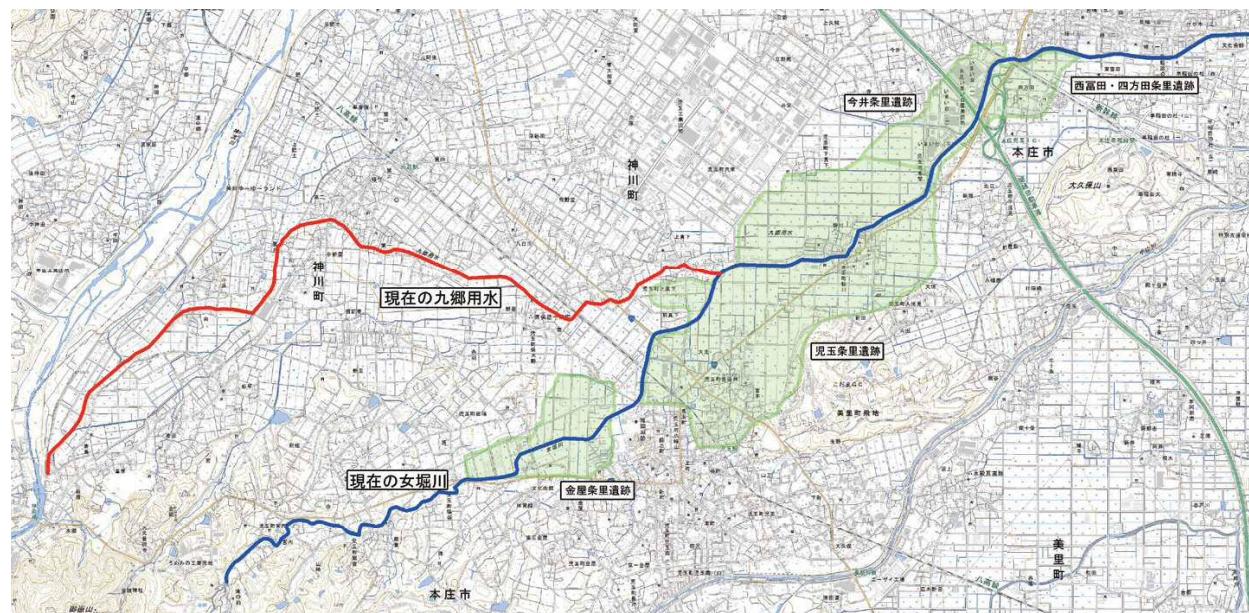


図1 本庄市の条里遺跡の分布と女堀川、九郷用水

## 5. 地方豪族の古代寺院跡－東小平中山廃寺－

東小平中山廃寺は、本庄市児玉町小平に所在し、児玉総合運動公園造成工事事業に先立つ埋蔵文化財所在確認調査によって奈良時代から平安時代にかけての集落跡や終末期の古墳とともに新たに発見され、地名から東小平中山廃寺と命名されました。

本寺院跡（以下本廃寺）は、東小平の集落を眼下に見下ろせる東に向いた斜面地に所在しています。その場所は、東小平の集落から約40m程の高所にあたります。

本廃寺の周辺は、縄文時代中期の土器や平安時代の集落跡が発見された東小平中郷遺跡や、江戸時代には御朱印寺であった成身院があり、同院鐘樓堂跡からは五輪塔などの一部が出土しています。

本廃寺が所在する東小平中山遺跡から発見された遺構・遺物は、奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居跡28軒、金堂跡1棟、塔跡1基で構成される古代寺院跡、終末期の古墳1基であり、調査区やや西側中央付近の土坑群は本廃寺の講堂もしくは僧房の柱穴に相当する建物跡と考えられます。これらからは、古代瓦や鉄釘、さらに土師器・須恵器などが出土しました。

金堂跡と推定される建物跡は、建物背後の斜面を削り平坦面を造りだし、さらに建物の周囲を掘り下げることによって基壇状に造りあげられていました。基壇からは、原位置を保っていた礎石が2個出土し、その並びからは礎石の基礎をなす栗石を複数含む円形の落ち込みを3基検出しました（写真1）。建物基礎部の東側半分は、風雨などの侵食により流失していましたが、推定される金堂の規模は、東西に約5.4m、南北約3.6mの桁行3間、梁行2間であり、金堂の型式としてやや古い特徴を持っていると考えられます。また、東柱の存在がみとめられることや表面が激しく焼けている硬化面をもつ床の一部が検出されていることから金堂の床は土間であったと推定できます。

金堂の周囲には焼土を含む層が広範囲に堆積していました。この焼土層の中からは、多くの鉄釘や高台付壊などが出土していて、土師器の年代などにより10世紀前半には金堂は焼け落ちていたと推定

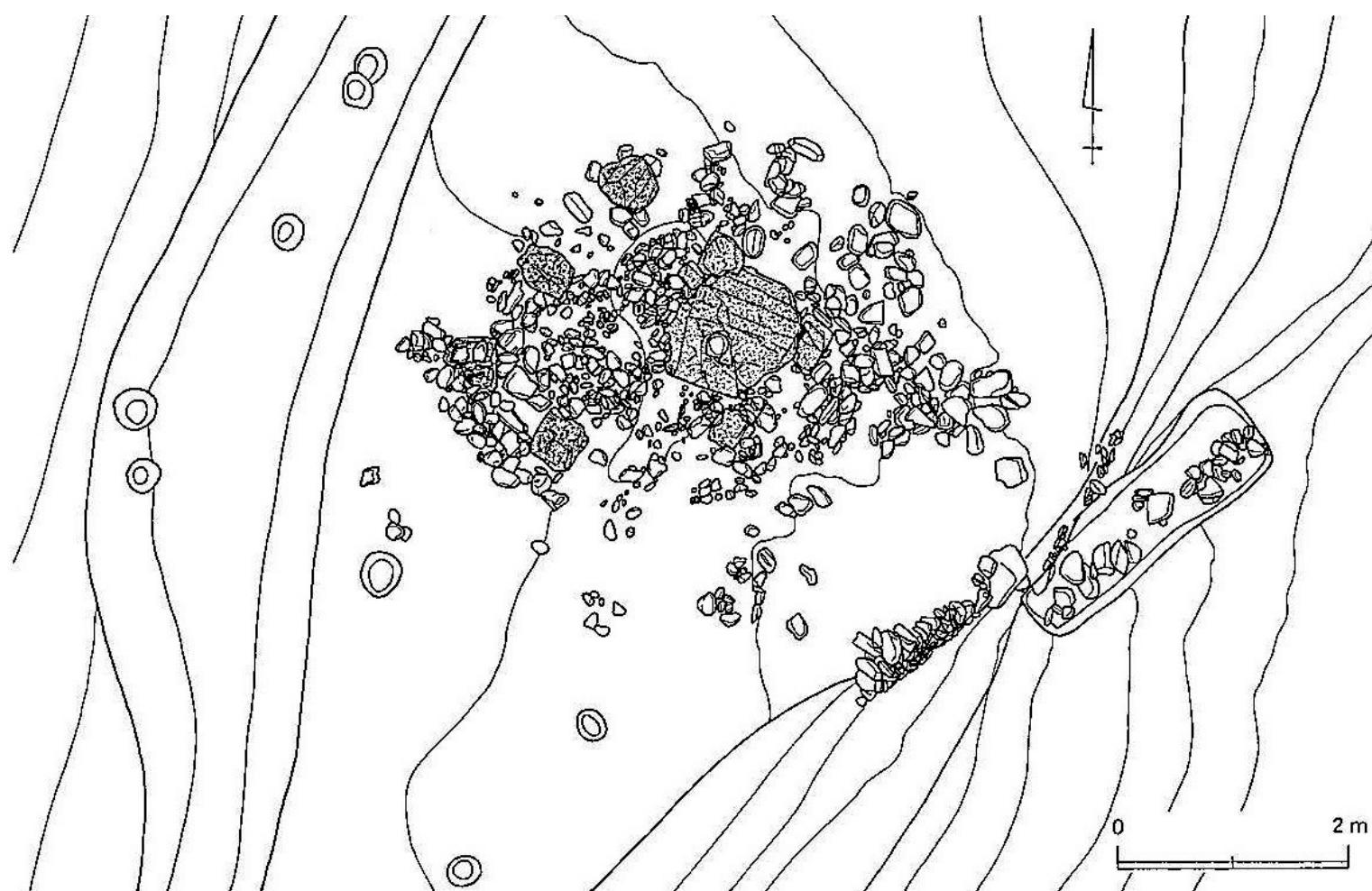


図1 東小平中山廃寺 塔跡平面図

されます。さらに本建物跡からは、螺髮が2個出土しており塑像といわれる仏像が安置された金堂であったことを裏付けています。螺髮とは、仏像の頭部にある卷貝のような髪の毛のことです。

塔跡は、塔下の地山を削って平らにし、部分的に版築して基壇を築いています。心礎穴が穿たれた心礎の他、四天柱礎3個、側柱礎4個が原位置を保ったまま出土しました（図1、写真2）。礎石の出土状態から多重塔と考られますが、初層の規模は一辺が $3 \times 3\text{ m}$ ありました。本塔跡からは、鉄釘や古瓦片が出土しています。とくに古瓦は、武藏国分寺創建期の8世紀後半期のものであると推定されています。本塔も金堂と同じ時期に焼失したと思われますが、本廃寺は火災のあと原位置に再興されることはありませんでした。さらに、寺院全体の規模は不明ですが金堂・仏塔を配した伽藍配置が施された立派な寺院であったと推定できます。

また、本廃寺の東側から新たに発見された古墳は、東小平中山古墳と命名されました（写真3）。墳丘自体の直径は約11mで幅約3mの周溝が廻っていました。胴張りで小型の石室の状態は、主軸長2.3m、最大幅1.5mで入口から石室に向う羨道部は既に失われていました。古墳が傾斜地に所在しているため地山を掘り下げて石室を構築しており、盛土は少なかったと推定しています。古墳の年代を断定する根拠は乏しいのですが、7世紀末の古墳であると考えるのが妥当であると思われます。

本地において寺院跡と古墳が同じ場所で発見されたことを考えるうえでは、寺院の創建された時期など詳細に解明しなければならない多くの課題があります。しかし、塔跡から発見された瓦が、武藏国分寺創建期の8世紀後半のものと考えることができるところから、古墳の造営された時期と比較的近く、もしかすると古墳被葬者の子孫がこの寺院を造立したこととも検討する必要があるでしょう。飢饉や自然災害、疫病の流行などが多かった奈良時代にこの地で地方豪族が小規模ながらも寺院を造営した実例として重要な発見であるということができます。

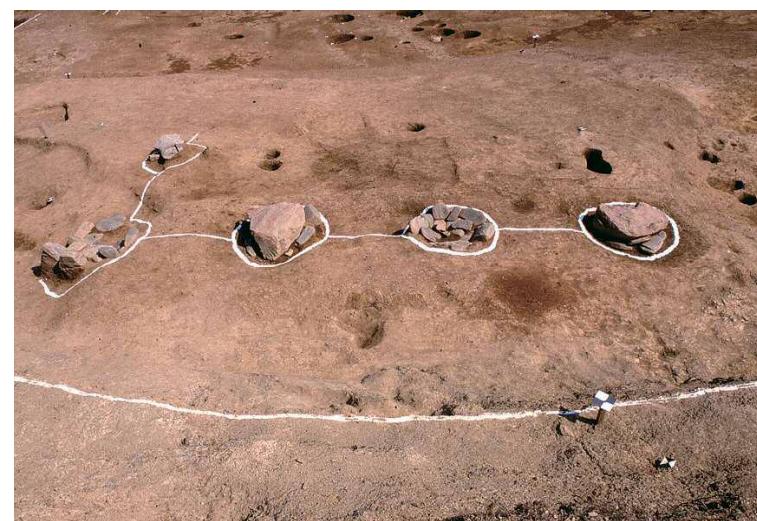


写真1 東小平中山廃寺 金堂跡

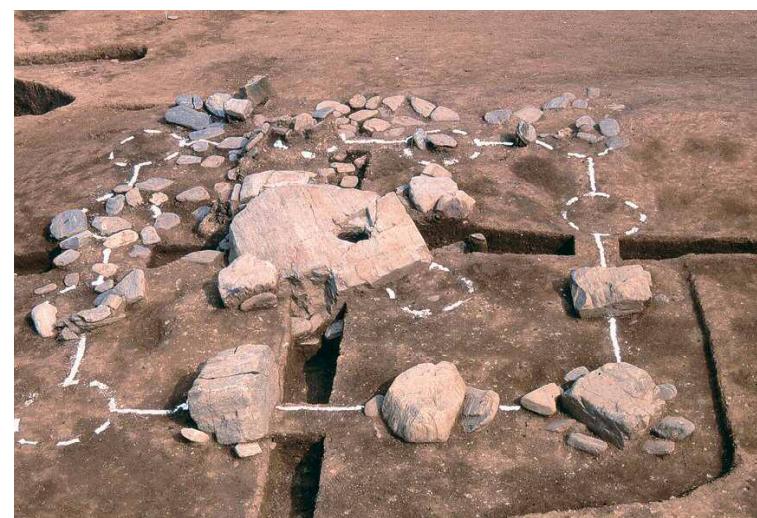


写真2 東小平中山廃寺 塔跡



写真3 東小平中山古墳

#### 〈参考文献〉

- 坂詰秀一 2003 第1回企画展『写真でみる 日本古代木造塔の心礎－岩井隆次氏寄贈写真による－』 立正大学博物館  
徳山寿樹 2005 『児玉町東小平中山遺跡の調査』 情報25 埼玉考古学会

## 6. 地名・人名を記す紡錘車－薬師元屋舗遺跡・東五十子田端屋敷遺跡－

紡錘車とは、植物纖維を績んだり、紡いだ纖維に撫りをかけて、糸をつくる際の「はずみ車」の役割をする部品です。中心にある穴に木の棒などを通して軸とし、軸の先に纖維を着けて、紡錘車の重さで惰力を発生させて、コマのように回転を持続させながら、撫りをかけたり、できた糸を巻き取ったりしていきます。

紡錘車を利用した糸づくりは古くから行われていて、縄文時代にはすでに使われていたようです。素材は多種多様で、縄文時代は土製ないし土器片を加工した円盤で、弥生時代以降は石や骨角、木、鉄製品などが加わります。古墳時代になると、幾何学的な模様や動物の姿などを刻線で表現した石製の紡錘車が現れます。古墳時代の紡錘車の中には、住居跡ばかりではなく、古墳の堀の中から、埴輪や土器などとともに発見されることも多いので、単なる実用の道具ではなく、呪術的な性格も備えていたようです。そして、奈良時代以降になり、各地で文字の普及が進むと、石製紡錘車に地名や人名などさまざまな文字を刻んだものが見られるようになります。これらの紡錘車は、宮都周辺に比べ、とくに文字資料の少ない地方にとって、貴重な情報をもたらす場合があります。

本庄市でも、いくつかの遺跡で、文字の刻まれた石製紡錘車が出土しています。写真1の紡錘車は、小山川クリーンセンターの建設工事に先立って行われた、東五十子田端屋敷遺跡の発掘調査で発見された蛇紋岩製の紡錘車です。左から1番目の紡錘車には、漢字の「大」の文字が連続して刻まれているのがわかります。左から2番目の紡錘車には、全面に刻線による多数の漢字があり、部分的に重複してはいますが、「工」、「大」、「郷」、「郡」、「有」、「直」、「身」などの文字が明瞭に読み取れます。

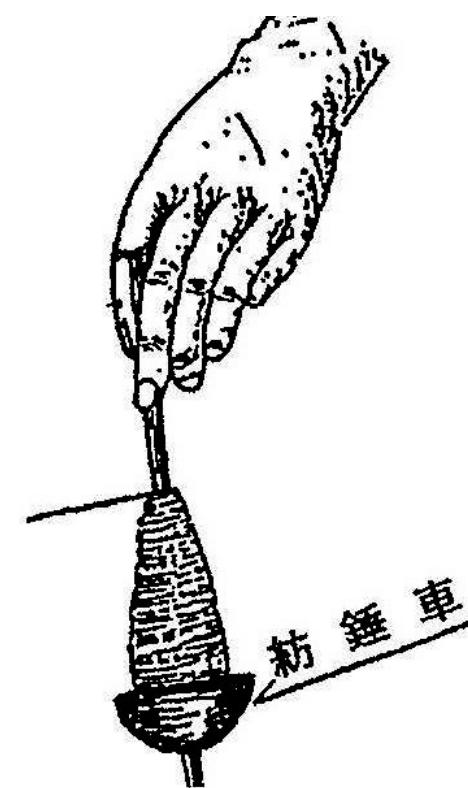


図1 紡錘車の使用法

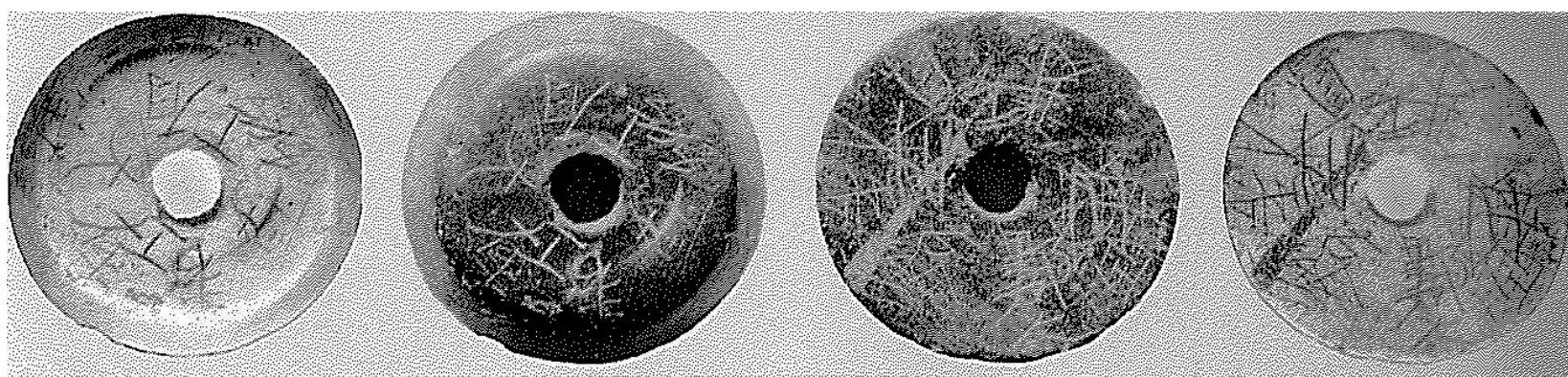


写真1 東五十子田端屋敷遺跡出土の紡錘車

栄3丁目の薬師元屋舗遺跡から出土した平安時代の蛇紋岩製紡錘車には、上面を一周する状態で刻線文字があり、「武藏国児玉郡草田郷戸主大田マ身万呂」と釈字されました（写真2、写真3）。

「武藏国児玉郡草田郷」までは、古代の国名と郡・郷名です。「戸主」は郷戸の長を表し、「大田マ」の「マ」は「部」の略字で、「大田マ身万呂」という人物の名前を記しています。「身万呂」は、おそらくこの紡錘車の所有者と考えられる人物ですが、一連の文字列として平安時代の東国に生きた

個人の居住地、地位、名前までが判明したことは、きわめて重要な発見といえます。

7世紀に律令制が導入されると、地方の行政制度も整備されて、国・郡・里の三つに区分されるようになります。奈良時代に入ると、里は郷と改められ、郷の下に3個前後の里を置くようになります。平安時代中期に編纂された「和名類聚抄」には各国の郡郷名が網羅的に記載されていますが、それによれば古代の本庄市周辺には賀美郡、那珂郡、児玉郡の3郡があったことがわかります。現在の本庄市は、小島と下野堂の一部が賀美郡、藤田地区や北泉地区の一部が東隣の榛澤郡に属していた以外は、児玉郡に編入されていたと考えられています。児玉郡は、「振太」、「黄田」、「太井」、「岡太」の4郷からなることが記されていますが、地名が大きく変化してしまった現在では、当時の郷の所在地は判然としません。「黄田」郷などは、音の類似から、現在の児玉町吉田林付近の古称ではないかと考えられたこともあります。しかし、この文字紡錘車の発見により「和名抄」の「黄田」は「草田」の誤記であり、児玉郡草田郷の所在地も、紡錘車の出土した薬師元屋舗遺跡の周辺に想定できるようになりました。

また、「大田部」が朝廷の新田開発や勅営田の経営を担う集団の呼称であることから、付近に中央と直結する農業経営の基盤が存在したことも想定できます。古代武藏国の中でも人口規模の大きかった本庄市の周辺は、地方経営の要地として、重視されていたことの表れといえるでしょう。なお、「身万呂」の「身」は、「巳」に通じることから、彼が巳年産まれであったのではないかと考える説もあります。

石製紡錘車に地名や人名のような文字を刻む理由については様々な意見がありますが、律令税制の影響が考えられます。「庸」や「調」といった人頭税は、各種の繊維製品で納めることが一般的で、そのための専用工房が各地にあったといわれています。工房で使用する紡錘車に、自身が帰属する「郷戸」の長の名を記することで、所有者の目印としたのかも知れません。

#### 〈参考文献〉

- 太田博之・増田一裕・松本 完他 2002 『東五十子・川原町』 東五十子遺跡調査会  
 増田一裕 1987 『南大通り線内遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第9集 本庄市教育委員会  
 本庄市教育委員会 1997 『本庄歴史缶』



写真2 薬師元屋舗遺跡出土紡錘車

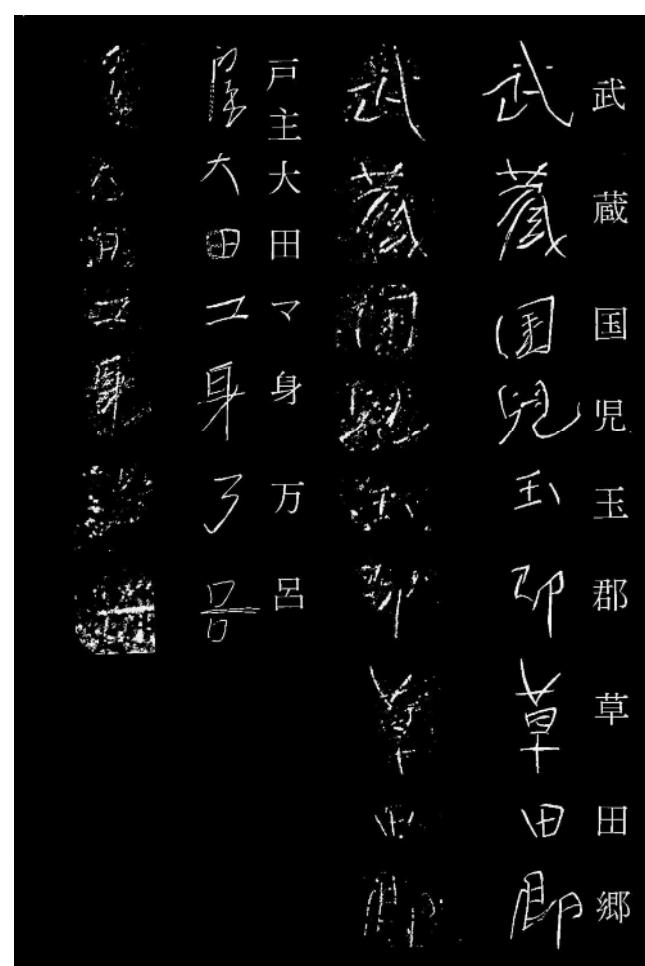


写真3 薬師元屋舗遺跡出土の紡錘車の文字と釈字



## 1. 「児玉党の聖地」浅見山丘陵－浅見山丘陵中世遺跡群－

上越新幹線本庄早稲田駅南側の浅見山丘陵には、  
大久保山遺跡、浅見山I(地区)遺跡、大久保山寺院  
跡、東谷中世墳墓址、宥勝寺北裏遺跡など、中世の  
注目される遺跡が多く所在しています。また、中世  
初期に活躍した武藏七党の児玉党に関する伝承も  
多く、児玉党の祖である有道惟行が児玉党の菩提寺  
として「西光寺」を建立した話や（丘陵西側の下浅  
見分に西光寺という小字名が残る）、児玉党嫡流  
の庄太郎家長の嫡男である小太郎頼家が、治承の  
内乱における一ノ谷の戦いで討死し、その妻が夫の  
菩提を弔うために「有莊寺」と言う寺院を建立した  
という伝承などがあり、現在の宥勝寺の墓地内には、  
この庄小太郎頼家の墓と伝えられる五輪塔があります。そのため、『本庄市史』では「浅見山丘陵は児  
玉党の聖地としておかれていた」と推測しています。

この浅見山丘陵は、旧石器時代から人々の生活の  
痕跡が認められ、縄文時代前期後半や中期後半と弥  
生時代後期末や古墳時代前期初頭頃にも小規模な集  
落が形成されますが、本格的な開発は古墳時代後期  
以降で、南側の東西方向に入る谷を利用した谷田經營  
を基盤とする集落が、その谷に面した丘陵の南側  
斜面に、平安時代まで継続して営まれています。

中世では、まず平安時代末の12世紀中葉～後葉と  
される約80mの規模を持つ不整形の館が、ⅢA地区  
に形成されます。これは、おそらく谷奥の湧水や溜  
井の掘削によって、丘陵内の谷田を再開発して所領  
化し、周辺村落の用益地であった丘陵を占有した  
開発領主の館と思われます。鎌倉時代(13世紀頃)に  
なると、この館は約100mに規模を拡大し、A2地  
区にも約50m四方の屋敷が建設されます。その後、13世紀中頃には北側の谷に面する浅見山I(地区)  
遺跡に、永福寺式軒平瓦や連珠文軒平瓦を出土した寺院が、13世紀後半には南側の谷口付近に剣頭文  
軒平瓦や唐草文軒平瓦を出土した大久保山寺院跡が建立されます。これらの寺院は、ある時期併存し  
ていた可能性もありますが、後者の大久保山寺院跡では、鎌倉幕府の執権である得宗家を頂点とする

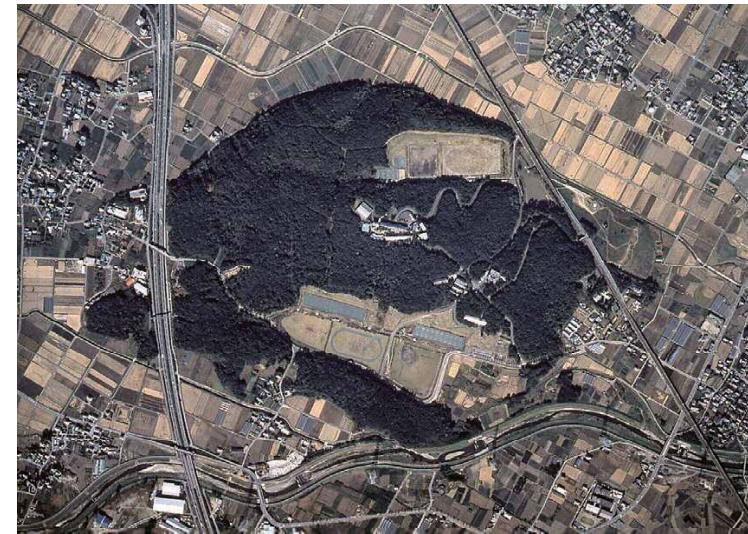


写真1 浅見山丘陵全景

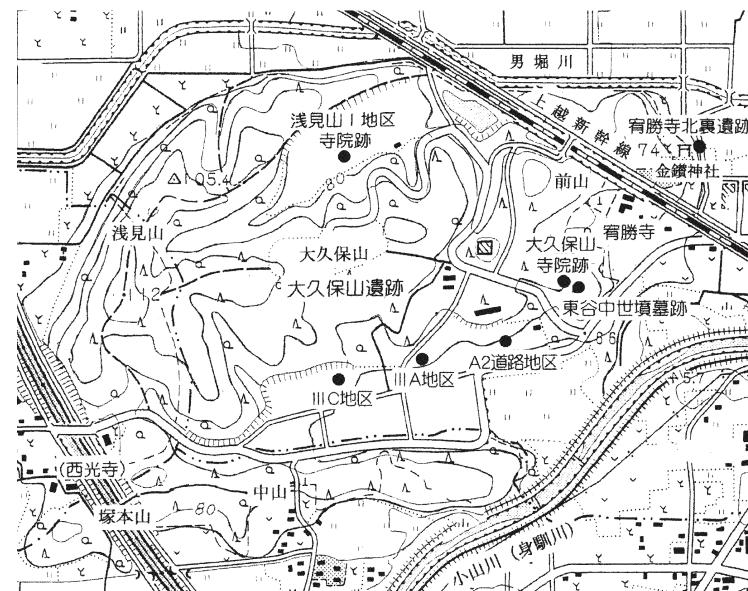


図1 浅見山丘陵全体図



写真2 大久保山遺跡ⅢC区西側屋敷跡

北条氏一族の三つ鱗の家紋が押された平瓦が出土しており、寺院と北条氏との関係性が注目されます。また、同時期の瓦は宥勝寺北裏遺跡でも出土しており、比較的広大な寺域を有していたことが推測されます。

13世紀後葉になると、館やそれに付随する屋敷は西側谷奥のIII C 地区に移動しますが、館はこれまでの規模の小さな溝状の区画から、幅3m・深さ1mの規模の大きな薬研堀状の堀によって区画されるようになります。これらの館や屋敷は、14世紀前葉には廃絶され、以後火葬墓を主体とした墓地が、15世紀には板碑を供養塔とした円形土坑を主体とした墓地が形成され、墓域として利用されるようになります。

また、III A 地区では16世紀前半頃の時期とされる埋納錢が出土しています。これは、44cm×33cmの長方形の土坑の中に、錢を紐に通して束ねたものをいくつも重ねて入れたもので、その数は8949枚(ほぼ九貫文)を数えます。この埋納錢の性格についてはいろいろ考えられますが、当時の錢貨の流通状況や、丘陵の新たな土地利用をうかがわせる資料として注目されます。

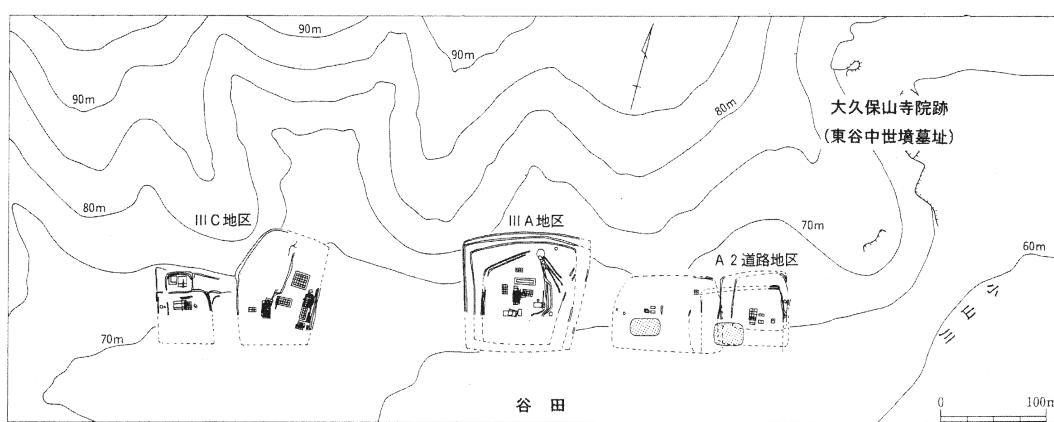


図2 大久保山遺跡館跡分布図（荒川1998を一部改変）

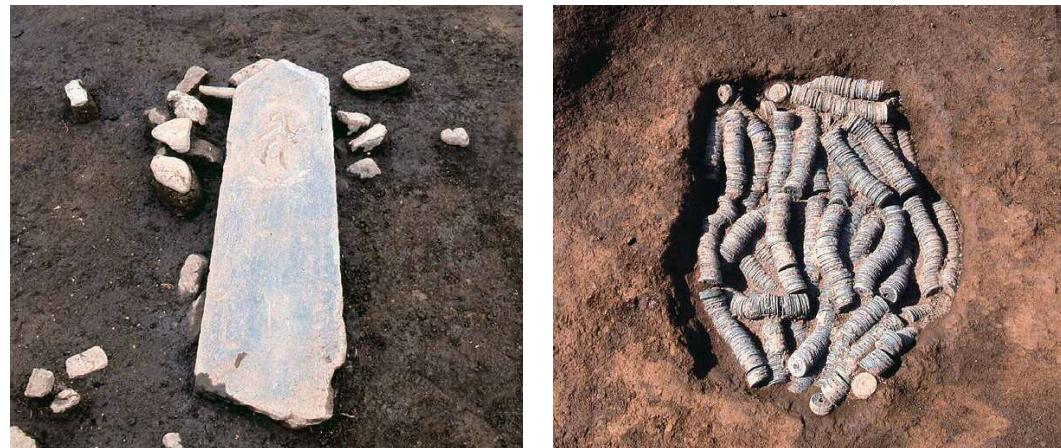


写真3 大久保山遺跡板碑と埋納錢の出土状態

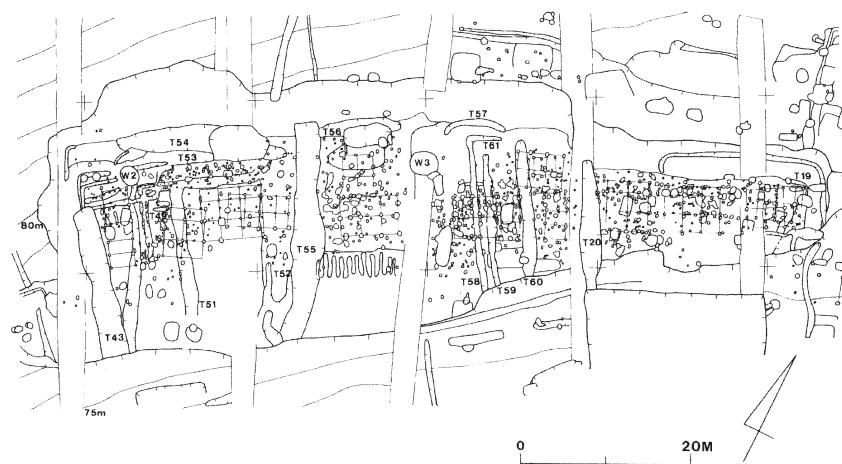


図3 浅見山I (地区) 遺跡中世寺院跡

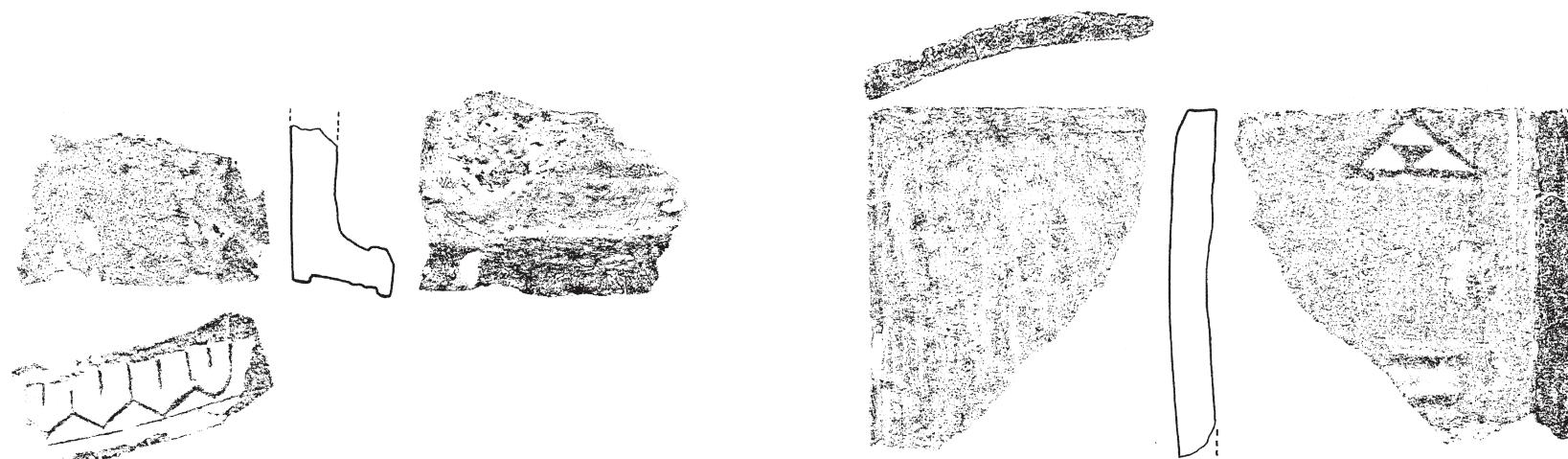


図4 大久保山寺院跡平成21年度試掘調査出土瓦

- 〈参考文献〉 荒川正夫 1998 『大久保山VI』 早稲田大学  
中門亮太 2012 『大久保山 一浅見丘陵の土地利用史一 展示図録』 早稲田大学會津八一記念博物館  
本庄市 1986 『本庄市史』 通史編 I

## 2. 中世在地領主の館跡－真鏡寺館跡－

真鏡寺館跡は、本庄市児玉町塩谷の天台宗寺院「西光院真鏡寺」が所在する場所にあり、その所在地や真鏡寺境内にある「瀧谷金王丸の墓」に関する伝承などから、平安時代末から鎌倉時代初期に活躍した児玉党塩谷氏と関係する居館ではないかと言われています。館跡は、東西方向が250m、南北方向が240mの規模をもち、平面形がやや不整の四角形をしたいわゆる「方形館」と呼ばれる形態をしています。館跡の北側半分は標高120m前後の丘陵上面からその南側斜面にあたり、南側半分は旧赤根川(現女堀川)によって形成された段丘上の現水田部の低地を、幅6m以上、現地表面からの深さが2.5m程度の断面「V」字形の堀によって四方を取り囲んでいたようで、北側の堀は現在もその一部が空堀として残り、南側の堀は幅13m・長さ約220mにわたる帯状の地割がその痕跡として現地表面に見られます。

館の内部構造については、G地点で外堀と同様

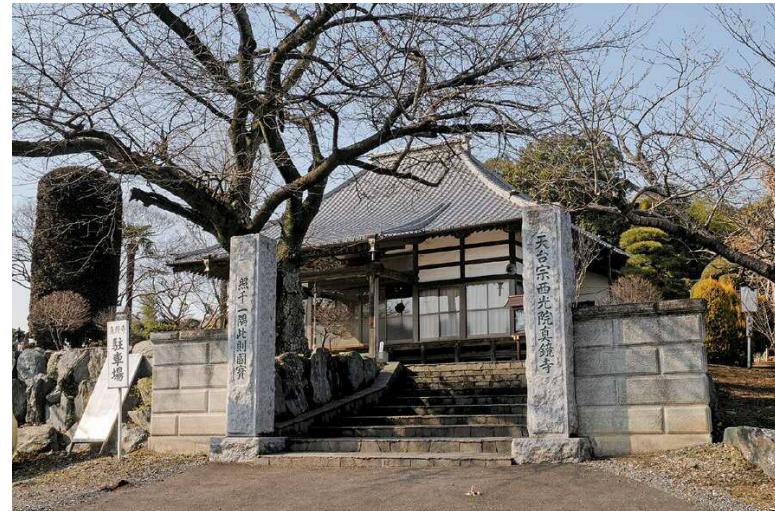


写真1 西光院真鏡寺



写真2 瀧谷金王丸の墓



写真3 真鏡寺館跡全景 (1988年頃)

の断面「V」字形で直線的な堀が見つかっており、規模の大きな堀によって区画された居住区域としての内郭の存在が推測されています。

築造時期については、現在のところ隣接する真鏡寺後遺跡のB地点から出土した瓦(永福寺式軒平瓦)の年代から13世紀前半以前とする説と、その寺院を破却して15世紀代に築造したとする説があります。本館跡の調査は、小規模な地点的な調査が主体で、館跡に關係する遺物も未だ貧弱な状況であるため明確なこと

はわかりませんが、堀跡等の調査では中世初期の繩目叩きの平瓦や丸瓦をはじめ、中国陶磁器の龍泉窯系鎧蓮弁文青磁碗、国産陶器の山茶碗系片口鉢や常滑窯系甕、在地産の片口鉢など、12世紀末～13世紀代の遺物も少量ながら出土しており、その時期にはこの地域の開発を主導した領主層による寺院か居館に關係する施設があったことは確かなようです。

#### 〈参考文献〉

- 荒川 正夫 1998 「中世前期の館跡と出土遺物」『大久保山VI』早稲田大学本庄校地文化財調査報告6 早稲田大学
- 恋河内昭彦 2009 『真鏡寺後遺跡IV - G地点(真鏡寺館跡)の調査-』本庄市遺跡調査会報告書 第24集 本庄市遺跡調査会
- 鈴木 徳雄 1991 「塩谷氏館跡と児玉党の形成」『真鏡寺後遺跡III - C・F・D地点の調査-』児玉町文化財報告書 第14集 児玉町教育委員会
- 1995 「古代児玉郡の土地利用と方形館の成立」『堀向・藤塚A・柿島・内手B・C・児玉条里遺跡』 児玉町文化財報告書 第18集 児玉町教育委員会
- 野口 泰宣 1991 「児玉党塩谷氏と塩谷郷」『真鏡寺後遺跡III - C・F・D地点の調査-』児玉町文化財報告書 第14集 児玉町教育委員会

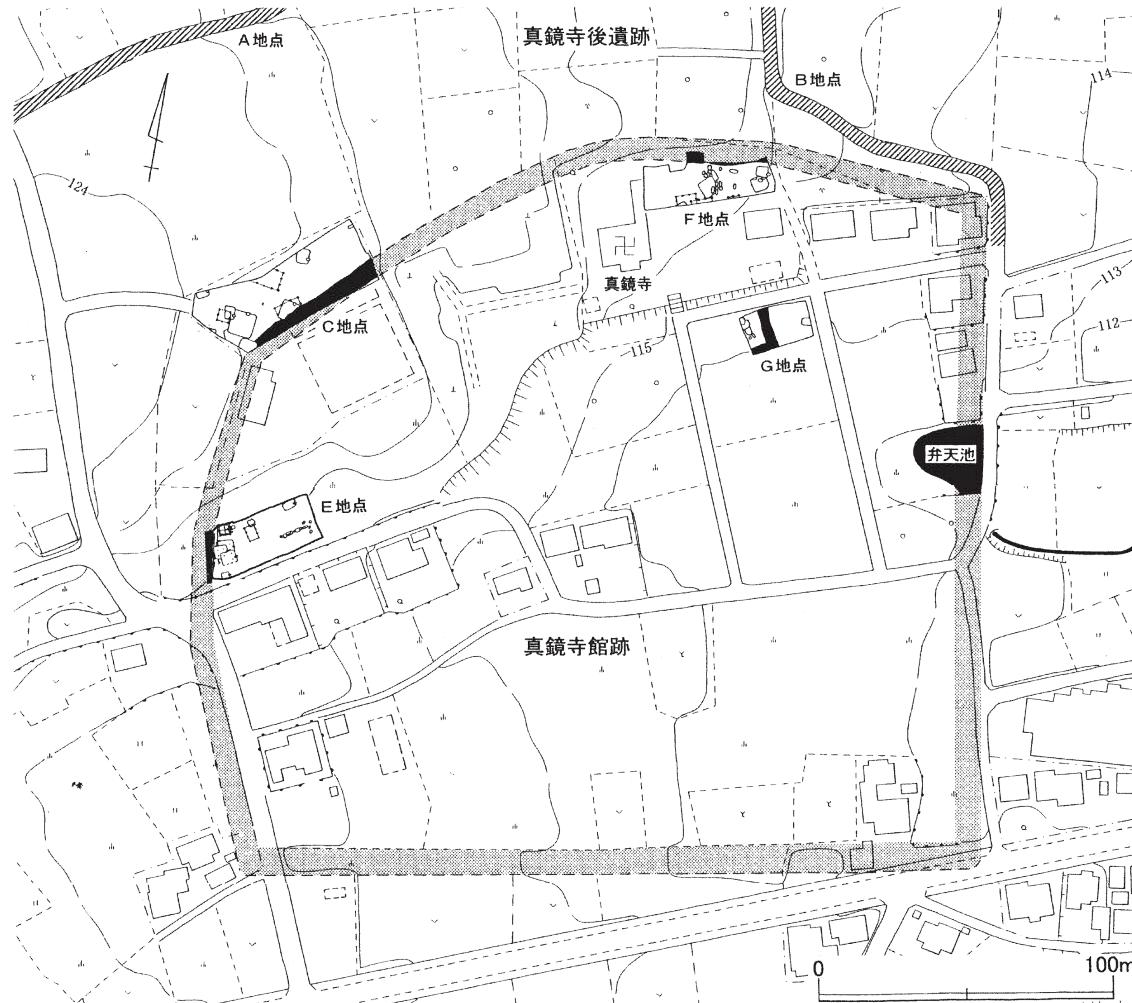
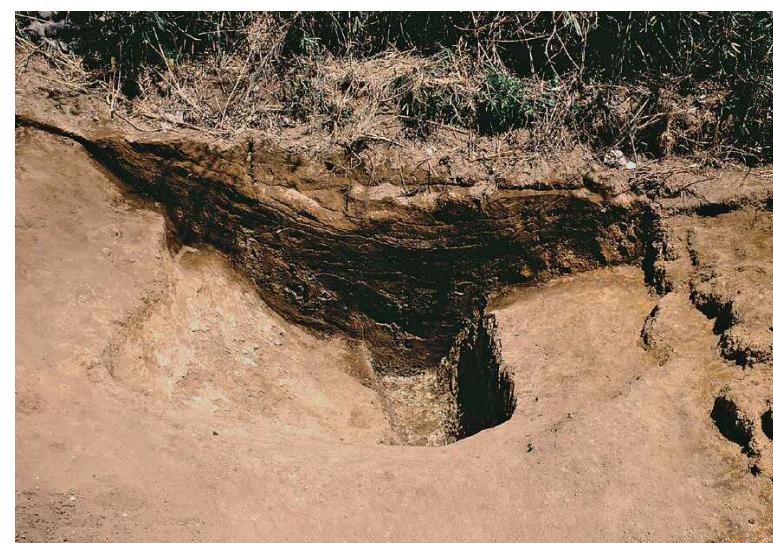


図1 真鏡寺館跡全体図(恋河内2009より)



C地点堀跡



G地点堀跡

### 3. 頼朝が作った鎌倉永福寺の屋根を飾った瓦－永福寺式軒瓦－

永福寺は、鎌倉時代初期に源頼朝が鎌倉に建立した鶴岡八幡宮や、父義朝を弔うために建てた源氏の菩提寺である勝長寿院と並ぶ三大寺社の一つで、当初は非常に高い格式が与えられ、鎌倉時代を通じて幕府の御願所として、他の多くの寺社とは別格扱いされていた寺院です。

頼朝は、対立した弟の源義経追討のため奥州藤原氏を滅ぼした後、義経や藤原泰衡をはじめとする戦乱によって死んだ数万の人々を供養することと、自らの権勢誇示を意図して、その壮麗さに感激した奥州平泉の中尊寺や毛越寺をまねて、文治5年(1189年)に永福寺の建立を思い立ちました。その工事には、頼朝自ら庭園の造営を指導し、また畠山重忠が一人で巨石を持ち上げて、その怪力ぶりを頼朝に感心させたというエピソードがあるなど、多くの御家人の協力があったものと思われます。

建物は、建久3年(1192年)に本堂の二階堂、同4年(1193年)に左側の阿弥陀堂、同5年(1194年)に右側の薬師堂が完成しており、この頃に寺の主要な伽藍が整ったようです。



図3 永福寺出土のI期（創建期）の軒瓦

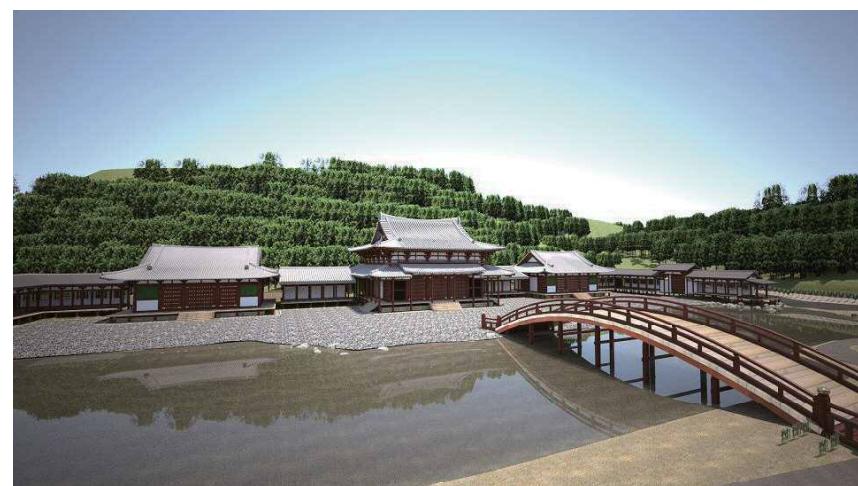


図1 永福寺（CGによる復元：湘南工科大学作成）

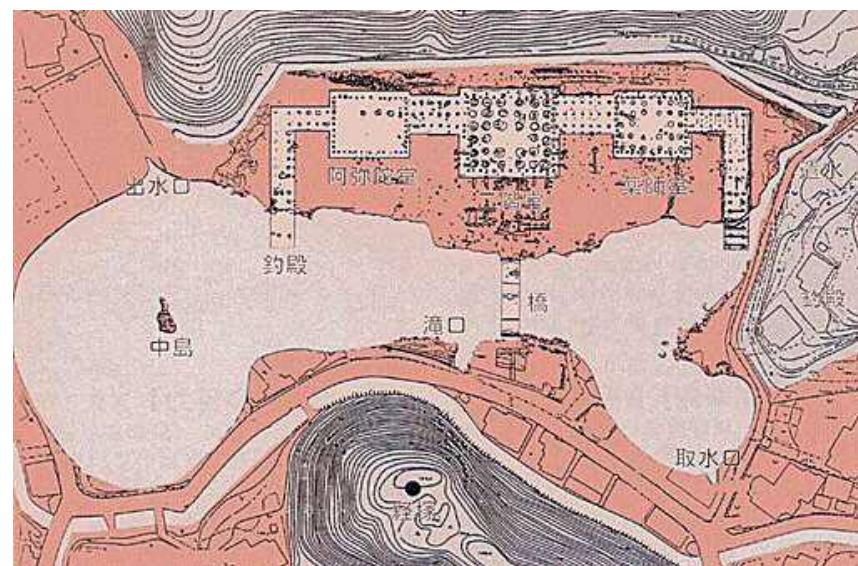


図2 発掘調査による永福寺の伽藍配置（鎌倉市HPより）

その後、永福寺は寛元・宝治年間(1244~1248年)の修理を経て、弘安3年(1280年)と延慶3年(1310年)の2度の火災による焼失と再建を繰り返し、室町時代の応永12年(1405年)の火災以後、記録に表れなくなり、江戸時代前期頃に廃寺になったのではないかと言われています。

永福寺跡の発掘調査は、昭和58年(1983年)から平成8年(1996年)にかけて継続的に行われ、寺院の全

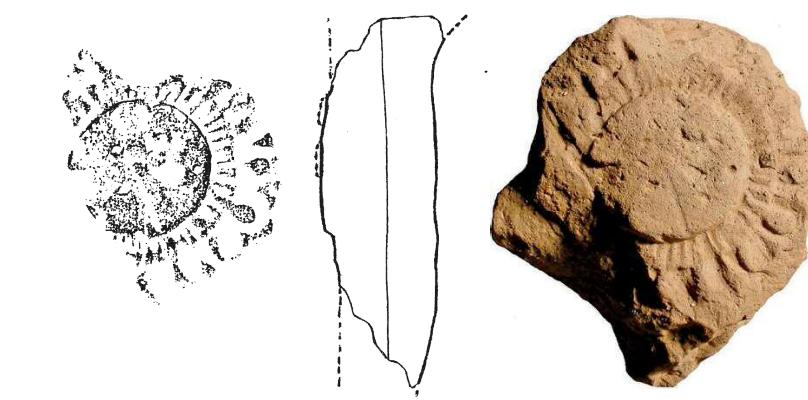
貌がほぼ明らかにされています。それとともに、寺院の創建から廃絶までの間に使用されていた大量の瓦が出土し、それらの瓦は永福寺の修繕と再建の歴史に合わせて、I期からIV期に分けられています。このうちI期の瓦は、複弁八葉蓮華文軒丸瓦と唐草文軒平瓦の組合せを主体としていますが、これと同じ文様の瓦が、鎌倉から遠く離れた埼玉県北部の児玉郡市でも複数の遺跡から出土しています。中でも本庄市はその出土例が最も多く、北堀の久下前遺跡F1地点、西富田の浅見山I(地区)遺跡、児玉町宮内のはねぐらみなみ羽根倉南遺跡、同塩谷の真鏡寺後遺跡B地点の4遺跡から出土しており、当地域が鎌倉永福寺の建立と密接な関係にあったことが窺えます。

この永福寺創建期の軒瓦(永福寺式軒瓦)は、これまでに東日本の福島・茨城・群馬・埼玉・東京・神奈川・静岡の各都県で少数出土していますが、それらの出土地は鎌倉時代初期に幕府や頼朝と関わりのあった有力御家人の本貫地や彼ら一族の菩提寺的な寺院のあった場所と言われています。当地域も平安時代末から鎌倉時代初期に活躍した児玉党の本拠地であり、頼朝や有力御家人の造寺活動にならって、武家の間に流行した小規模な寺院や堂(御堂・持仏堂)などの建立が盛んに行われたのかもしれません。

しかし、永福寺式軒瓦を出土した遺跡数の多さに比べて、その量が意外と少ないことや、永福寺II期の寛元・宝治年間の修理瓦の一部が、美里町沼上の水殿瓦窯跡で生産されていることからすると、創建期の瓦の一部も、すでに瓦の産地として知られていたと思われる当地で生産された可能性も考えられるのではないかと思われます。

#### 〈参考文献〉

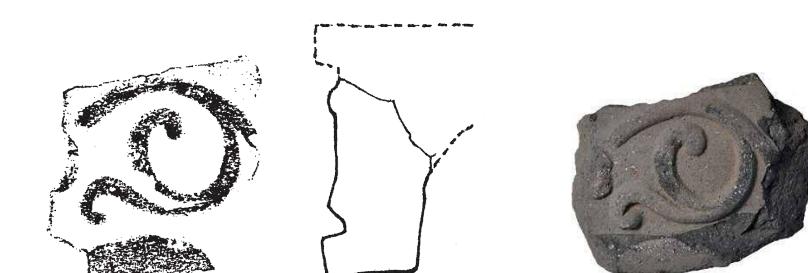
- 恋河内昭彦 2009 『真鏡寺後遺跡IV —G地点(真鏡寺館跡)の調査—』 本庄市遺跡調査会報告書第24集 本庄市教育委員会  
 小林康幸 2001 「埼玉県下に分布する永福寺式軒瓦について」『埼玉考古』第36号 埼玉考古学会  
 玉林美男 1997 「永福寺について」『浄土庭園と寺院—永福寺創建800年記念シンポジウム記録集—』 鎌倉市教育委員会



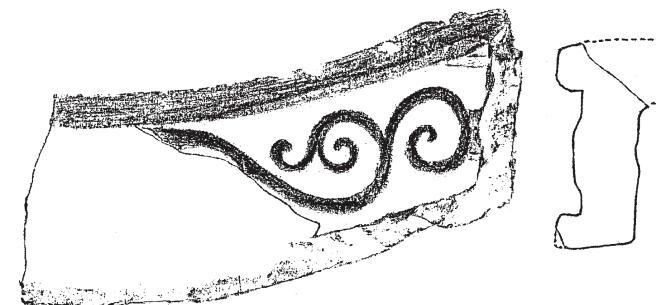
久下前遺跡F1地点出土軒丸瓦



浅見山I(地区)遺跡出土軒平瓦



羽根倉南遺跡出土軒平瓦



真鏡寺後遺跡B地点出土軒平瓦

図4 本庄市出土の永福寺式軒瓦

## 4. 大量の板碑が出土した中世墓地 ー田端中原遺跡ー

たばたなかはら  
田端中原遺跡は、本庄市児玉町田端の十二天神社の南西側に隣接した場所に所在しています。遺跡は、昭和3年(1928年)に当時山林だった同地を開墾中に、多数の板碑とともに五輪塔や宝篋印塔が出土したことから、中世墓地の存在が推測されていました。この昭和3年に出土した板碑群は、開墾地の一角に集めて供養されていましたが、後に「田中供養地」と名づけられ、板碑の集積地として紹介されています。

平成3年(1991年)に民間開発に伴って発掘調査が行われ、古墳時代前期の住居跡7軒と、縄文時代から近現代の土坑が231基検出されています。この中で主体となる中世の土坑は全部で147基あり、このうち墓坑と考えられるものは、土葬墓73基、火葬墓35基の計108基あります。板碑は、破損した基部が立って出土したものもありますが、大半はこれらの墓坑内に水平に置かれたり、蓋状に集石されたり、棺のように四角に埋置された状態で出土しています。その数は、全部で58枚を数えますが、田中供養地に集積されている48枚を加えると、総数100枚以上の板碑がこの狭



写真1 田中供養地（上：1991年当時、下：現在）

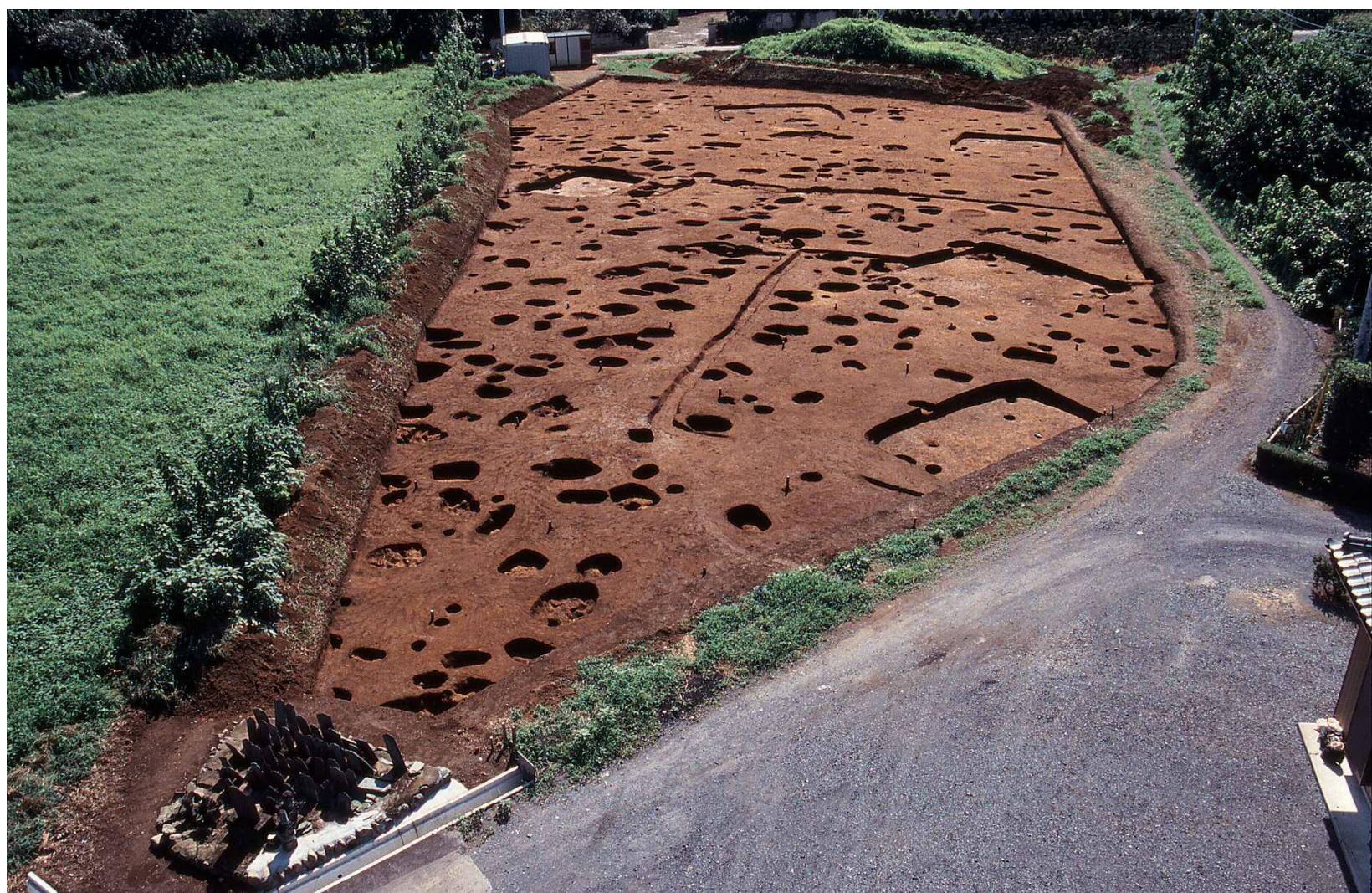


写真2 田端中原遺跡調査区全景



い範囲内から出土したことになり、埼玉県でも他に例のない板碑の大量出土地と言えます。

これらの板碑は、一般的に「武藏型板碑」と呼ばれる型式のもので、石材は緑泥片岩が主体ですが、絹雲母片岩や紅簾片岩なども見られます。また、石塔の宝篋印塔は安山岩、五輪塔は角閃石安山岩のものが多く見られます。

この中世墓坑群の造営期間は、板碑に彫られた紀年銘に「文(保)元年(1317年)?」「建武4年(1337年)」「貞治5年(1366年)」「永正3年(1506年)」などが確認できることから、概ね14世紀～16世紀にかけて形成されたことが推定されます。また、室町時代初期の紀年銘に「建武」や「貞治」などの北朝の元号が使われており、南北朝期には当時の供養者が北朝方の勢力に属していたことが窺えます。

副葬品は、板碑や石塔以外に被葬者の身分を表すようなものはありませんが、地鎮や六道錢にした「銅錢(渡来錢)」、葬送儀礼に伴う「かわらけ」、底のない「内耳鍋」などが出土しています。

田端中原遺跡の中世墓地は、板碑や石塔を伴う墓坑や火葬墓が多く見られることから、一般的な村落の墓地や単なる屋敷墓とは考えられず、高価な石塔や板碑を注文・購入して樹立できる経済力や、阿弥陀信仰を中心とした宗教的求心力をもつ在地領主層かそれに関連する者たちによって形成された墓地であると推測されています。具体的には、当地が鎌倉時代に児玉党系塩谷氏が占拠していた「塩谷」の縁辺部に相当していることから、この塩谷氏一族の墓所の可能性も考えられますが、墓地の造営期間からすると、その後に当地域に勢力を拡大させた安保氏に関する在地領主層によって形成された墓地と考えるのが妥当と言われています。

#### 〈参考文献〉

- 千々和 實 1974 「板碑」『日本考古学の現状と課題』  
吉川弘文館  
鈴木徳雄他 2010 『田端中原遺跡』本庄市遺跡調査会報告書第29集 本庄市遺跡調査会



写真3 第207号土坑板碑出土状態



写真4 第36号土坑板碑出土状態



写真5 第187号土坑板碑出土状態



写真6 第160号土坑五輪塔出土状態

## 5. 戦国時代始まりの地 ー五十子陣ー

### 五十子陣とは何か

戦国時代が始まるころに、本庄市の東五十子周辺に大勢の武士が集まった陣地があり、何度も激しい戦闘もありました。その陣地は五十子陣と呼ばれています。五十子陣の中心は、国道17号が女堀川を渡る「二の橋」の南東側一帯と考えられています。陣全体の範囲は、現在の本庄市東五十子・西五十子だけでなく、国道17号の北側や、東に隣接する深谷市にまで及んでいたと思われます。図2は江戸時代の五十子陣の中心部を描いた絵図です。陣が機能していた時代から三百年たって描かれたものですが、土塁や堀など陣の様子が細かく描かれています。これを現在の地図（図1）と比べてみると、川の名前が今と昔で変わっていますが、良く描かれているのが分かると思います。そして、五十子陣は当時国内でも最大規模の駐屯地であり、重要な政治の場でもありましたが、それだけではなく、陣には多くの商人や文化人らも訪れ、人や情報の集積地と言える一面もありました。



図1 五十子陣中心部

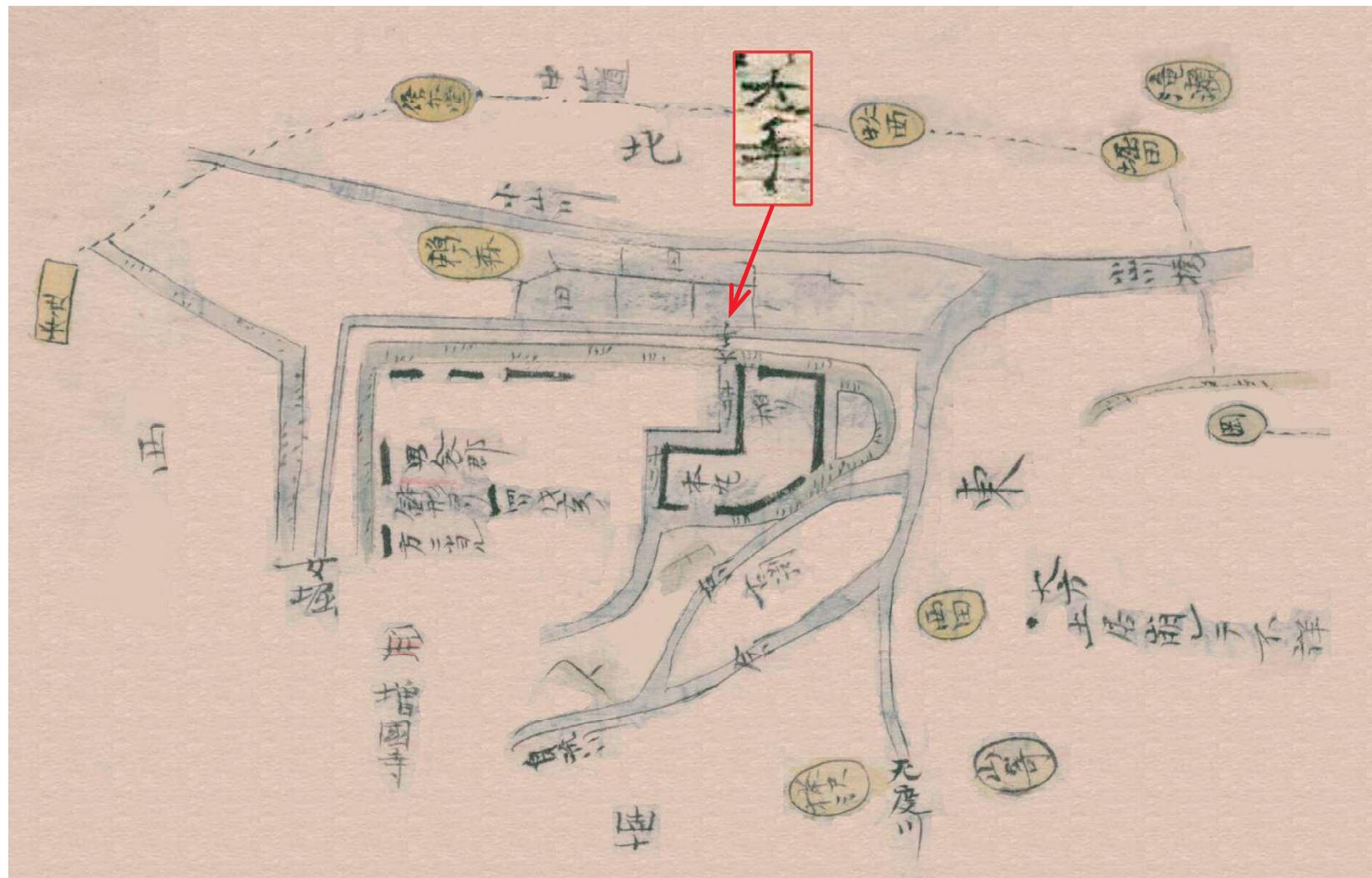


図2 『武藏鑑』「五十子古城図」より

## 五十子の戦いにいたる背景

五十子陣の様子を見ていく前に、陣があつたころの時代背景を考えてみます。表1にその頃の全国と関東の動きを示しました。室町幕府は、3代将軍義満の頃に政治的にも文化的にも栄華を誇りましたが、義満の死後、民衆の土一揆や守護大名の勢力拡大などにより徐々に力を失いました。また、6代将軍義教が暗殺される（嘉吉の乱）に至り、権力喪失が決定的になりました。その後、応仁の乱により京都が焼き尽くされ、日本列島は本格的な戦国時代へ突入します。一方関東でも、応仁の乱に先立つこと12年前、権力争いの内乱に始まる約30年にも及ぶ大規模な抗争（享徳の乱）が発生していました。その享徳の乱の中心となった戦いが五十子の戦いです。

### 享徳の乱の推移

室町幕府の関東統治機構である鎌倉府には長官としての鎌倉公方とその補佐役としての関東管領の役職がありました。前者は足利氏が、後者は上杉氏が世襲で着任していましたが、次第に両者は対立し、権力争いへと発展していきました。対立が決定的となったのは、第5代鎌倉公方の足利成氏が関東管領の上杉憲忠を暗殺したことに始まる享徳の乱でした。これは足利氏や上杉氏だけでなく、室町幕府や関東一円の武将を巻き込んだ抗争に発展していきました。鎌倉公方は享徳の乱をきっかけに古河（茨城県古河市）へ移り、古河公方と呼ばれるようになりました。享徳の乱では、初期の戦いにおいて、古河公方の支配地域は主に関東地方の北東側に広がり、一方の関東管領側は関東の南西側に勢力を保持しました（図3の▲が関東管領側の主な城）。ちょうど利根川を挟んで睨み合う展開となりました。この頃に、関東管領側の上杉氏は利根川に面した五十子に将兵を集め、陣を築きました。

上杉氏はその出自により、山内上杉家、扇谷上杉家などに分かれており、この頃の関東管領は山内上杉家が務めっていました。同じ上杉氏でも関東管領職を巡って対立した時期もありますが、五十子陣においては協力して古河公方に対抗しました。五十子陣を築いた総大将の上杉房顕やその跡を継いだ上杉顕定は山内上杉家です。

五十子陣は約20年間上杉氏側の本陣として機能し、五十子陣が廃陣となった際に戦局は大きく動き、享徳の乱は一応の終息をみました。もっとも時は既に戦国時代であり、その後も秀吉の天下統一まで乱世は続いたのでした。

全国の動き	時代区分	年号	関東の動き
嘉吉の乱	室町時代	1441 1455 1459頃 1467 1477 1483	享徳の乱 五十子の戦い <五十子陣の期間> 長尾景春の乱 都鄙合体
応仁の乱	戦国時代		
秀吉の全国統一	安土桃山時代	1573	

表1 室町時代頃の全国と関東の動き

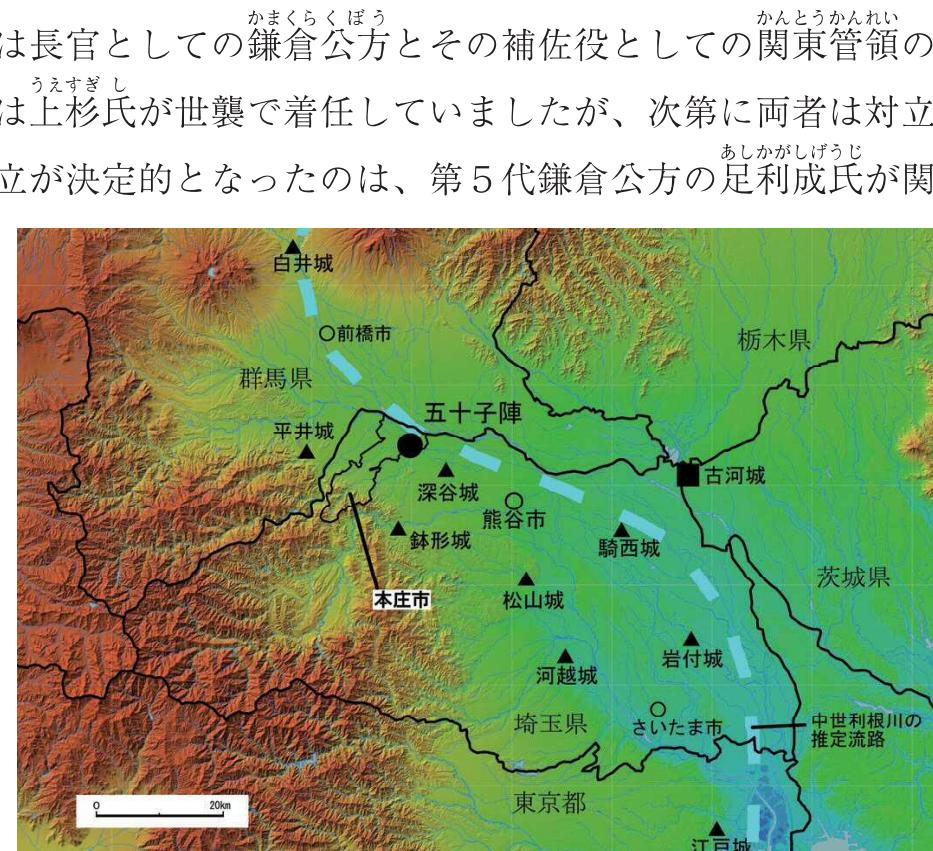


図3 五十子陣と周辺の城

## 関東地方の中での五十子

関東を統治するための行政機関であった鎌倉府が機能を失い、鎌倉（古河）公方と関東管領に分裂してしまいました。しかし、京都の幕府や天皇は関東管領の上杉氏側に付いており、五十子陣には「天子の御旗」<sup>ごはなぞの</sup>が掲げられていました。後花園天皇からは成氏追討の勅令も出され、京都からの援軍も陣に加わっています。したがって、一時的にとはいえ、五十子は関東統治の中心地でもあり、実際に所領や役職に関しての依頼・調停などの訴えや揉め事などが五十子に持ち込まれました。

森田真一さんの研究によると、例えば、上野国の善・山上両氏は、3年間五十子の軍役に就き、奪われた所領へ復帰できるように山内上杉氏に願い出ていました。越後国の中条・黒川両氏は所領について争っていましたが、やはり両者とも五十子に在陣して越後上杉氏に訴えました。また、武士ではありませんが、鎌倉の鶴岡八幡宮の要職に復帰できた弘尊は、謝意を伝えに五十子まで来陣しています。他にも、上杉氏の力を頼りに多くの人が五十子に来陣しました。

### 五十子陣の終焉 一長尾景春の乱一

五十子陣に在陣した武将の中で、山内上杉家と扇谷上杉家はその筆頭と言える武家でした。それぞれには家宰（執事）<sup>かさいしつじ</sup>と呼ばれる有力家臣があり、総大将であった山内上杉家は長尾氏<sup>ながおし</sup>が補佐しました。長尾氏は関東管領の家宰として大きな権力を持ち、関東統治を積極的に支えました。

1473年、山内上杉家の家宰の長尾景信が死去し、長尾忠景がその跡を継ぎました。このとき、景信の嫡子である長尾景春<sup>かげはる</sup>は自らが選ばれなかった処遇に不満を抱き、山内上杉家から離反していきました。景春は多くの武将に反乱に加わるよう呼びかけ、また、まさに抗争中の相手である古河公方成氏<sup>しげうじ</sup>とも手を結び、五十子陣攻略の策を練りました。

1477年、景春は寄居町の鉢形城から五十子陣を急襲しました。五十子陣は元々、北の利根川に向かい、成氏との戦いのために作られた陣地であったため、南からの攻撃には十分な備えがありませんでした。交通路を塞がれ、あっという間に五十子陣は落とされました。上杉氏らは利根川を渡り、上野国で態勢を立て直さざるを得ませんでした。五十子陣を襲った炎は、三日三晩煙を出していたそうです。

### 五十子陣にまつわる人々

五十子は、軍事・政治の中心地であり、多くの人々が在陣しました。騎馬隊だけで七千人の記述もあります。人々が生活するために、商人が出入りしていたこともわかっており、五十子は城下町のような機能・景観であったろうと考えられています。軍人や商人以外にも多くの人が出入りしていました。また、火災に遭った五十子陣が3日間燃え続けていることからも、相当な数の建物が建っていたことでしょう。その五十子陣に来陣・在陣したうちの4名をここで紹介します。

▶太田道灌<sup>おおたどうかん</sup>は扇谷上杉家の家宰です。山内上杉家の家宰である長尾景春とは時に協力し五十子陣を支えました。景春の乱にあっては、景春からの協力要請を断り上杉氏側に留まり、その後景春打倒に大活躍することになります。道灌は、江戸城を築城したことや山吹の里伝説など逸話も多く、武道にも文芸にも秀でていたといわれています。しかしその最期は、仕えた扇谷上杉氏に謀殺されると言う無念の死を遂げました。

▶飯尾宗祇<sup>いいおそうぎ</sup>は、連歌の最盛期を築いた連歌師です。京都で戦乱の動きが強くなった頃、連歌を広めるために旅に出たのですが、太田道灌らを頼って五十子陣に着いた頃の関東は既に戦乱の真っただ中でした。五十子陣では、長尾孫六に連歌の指南書である長六文<sup>ちょうろくぶみ</sup>を残し、大規模な句会も開きました。



►松陰は群馬県太田市の金山城を治めていた岩松氏の従軍僧です。岩松氏は、五十子と古河の中間にあり両者に翻弄されたといえる武将です。松陰は岩松氏の武勲を伝えるため記録を書き記し、その書は『松陰私語』として知られています。五十子陣に関する多くの出来事がここに書かれています。また、図2にもある西五十子の増国寺には松陰の墓誌があり、その点でも五十子にゆかりのある人物です。

►福島東雄は江戸時代の人で、もちろん戦国時代の五十子陣とは関係ありませんが、武藏国の地誌『武藏志』（武藏鑑）を著し、その中で江戸時代の五十子の絵図（図2）を描いています。絵図に記録された、「土居」や「大手」といった情報等により、五十子陣の規模や施設について多くの研究者が検討を加えています。

### 遺跡としての五十子陣

国道17号が本陣の中央を通過しており、残念ながら現在では当時の地形や土壘などはほとんど確認できません。しかし、少しずつではありますが周辺で発掘調査が行われており、五十子陣の研究が進んできています。

図2の「大手」と書かれた付近で平成15年度に発掘調査が行われ、溝や柱穴等と共に、素焼きの小皿（かわらけ）が出土しています。この場所が、陣から低地に下りる出入り口の様な場所だったかもしれません。いずれにしても、陣の中心に関わる重要な発見と言えます。

また、平成7年～10年に東五十子の小山川クリーンセンター建設に先立って発掘調査が行われ、溝や井戸・建物跡がたくさん見つかりました。図4に発掘範囲と発見された溝跡（オレンジ色）を示しました。今の住宅よりも何倍も大きな区画が作られていたことが分かります。この調査では、下級武士では持つことのできない貴重な香炉や風炉、火鉢（写真1）等が出土しました。有力武将が在陣していた証拠と考えられます。

深谷市の東京電力新岡部変電所でも昭和53年度に発掘調査が行われ、五十子陣の時代の大規模な区画溝などが検出されました。

このように五十子周辺にはまだ多くの五十子陣に関する貴重な遺構・遺物が眠っていると考えられ、今後の発掘調査等によって、当時の様子が明らかになっていくと思われます。

### 〈参考文献〉

- 梅沢太久男・石岡憲雄 1981 『六反田』埼玉県立歴史資料館
- 太田博之・増田一裕・松本 完他 2002 『東五十子・川原町』東五十子遺跡調査会
- 森田真一 2014 『上杉頃定 古河公方との対立と関東の大乱』戎光祥出版
- 図2は国立国会図書館WebPageより福島東雄『武藏鑑』第2巻第95コマ目を元に作成
- 図3は国土地理院WebPageより『地理院地図』を元に作成

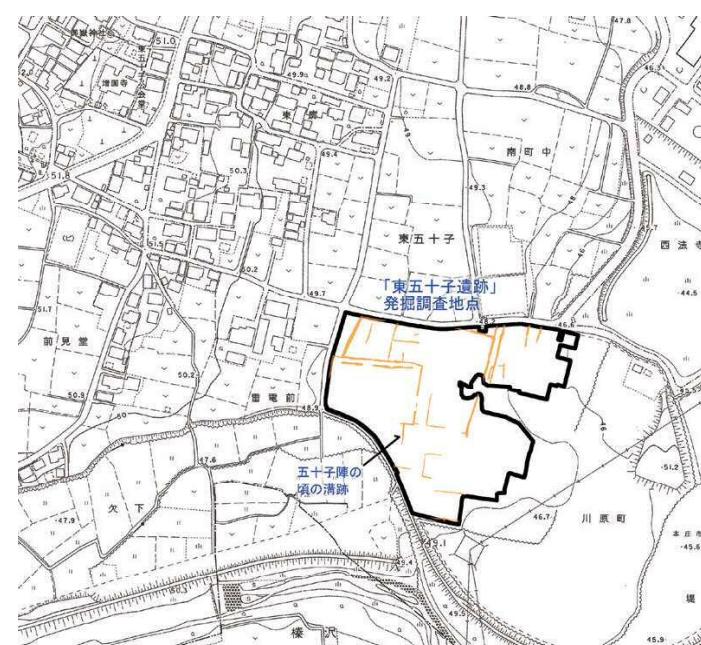


図4 東五十子遺跡と周辺



写真1 スタンプ紋や優雅な脚を持った角火鉢

## 遺跡所在地一覧

### II 旧石器・縄文・弥生時代

II-1	2・4	浅見山I遺跡	本庄市西富田字大久保山
II-3		将監塚遺跡	本庄市児玉町共栄字南共和
II-3		古井戸遺跡	本庄市児玉町共栄字南共和
II-3		新宮遺跡	本庄市児玉町共栄字南共和

### III 古墳時代

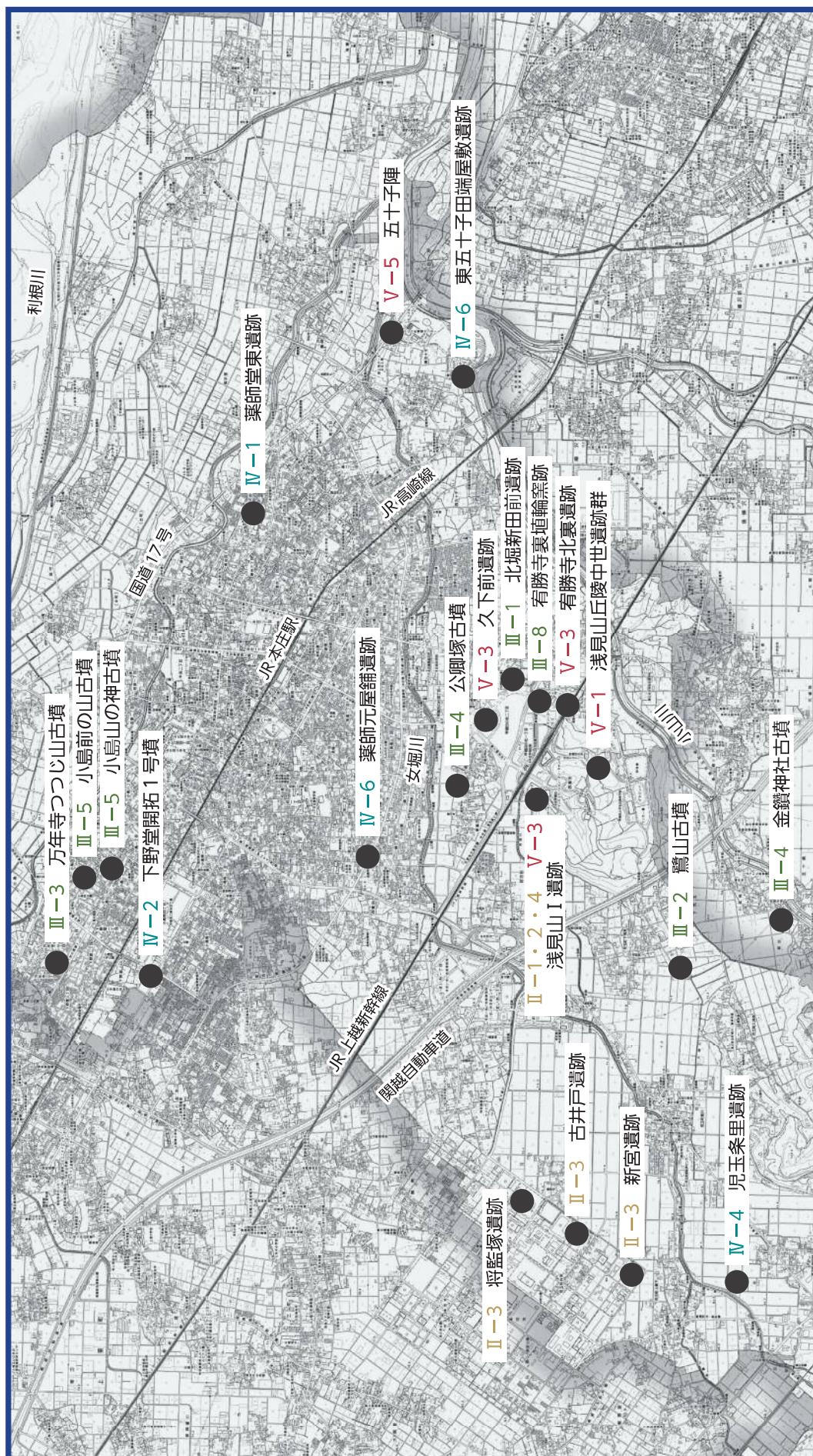
III-1		北堀新田前遺跡	本庄市北堀字新田前
III-2		鷺山古墳	本庄市児玉町下浅見字鷺山
III-3		万年寺つつじ山古墳	本庄市万年寺3丁目
III-4		金鑽神社古墳	本庄市児玉町入浅見字西浦
III-4		生野山将軍塚古墳	本庄市児玉町児玉字生野山
III-4		公卿塚古墳	本庄市北堀字久下塚
III-5		小島前の山古墳	本庄市小島3丁目
III-5		小島山の神古墳	本庄市小島2丁目
III-6		長沖203号墳	本庄市児玉町児玉南2丁目
III-7		秋山庚申塚古墳	本庄市児玉町秋山字宿田保
III-8		宥勝寺裏埴輪窯跡	本庄市北堀字前山

### IV 古代

IV-1		薬師堂東遺跡	本庄市日の出4丁目
IV-2		下野堂開拓1号墳	本庄市下野堂字開拓
IV-3		山崎上ノ南遺跡	本庄市児玉町飯倉字山崎上ノ南
IV-4		児玉条里遺跡	本庄市児玉町蛭川(ほか)
IV-5		東小平中山寺	本庄市児玉町小平字中山
IV-6		薬師元屋舗遺跡	本庄市榮3丁目
IV-6		東五十子田端屋敷遺跡	本庄市東五十子字田端屋敷

### V 中世

V-1		浅見山丘陵中世遺跡群	本庄市西富田字大久保山、栗崎字東谷(ほか)
V-2		真鏡寺館跡	本庄市児玉町塩谷字真鏡寺
V-3		久下前遺跡	本庄市北堀字久下前
V-3		浅見山I遺跡	本庄市西富田字大久保山
V-3		羽根倉南遺跡	本庄市児玉町宮内字上ノ原(ほか)
V-3		真鏡寺後遺跡	本庄市児玉町塩谷字真鏡寺後
V-4		田端中原遺跡	本庄市児玉町端字中原
V-5		五十子陣	本庄市東五十子字城跡(ほか)



## <参考文献>

- 有山径世・高橋清文・鈴木徳雄 2011 『飯倉南部遺跡群』本庄市遺跡調査会報告書第39集 本庄市遺跡調査会
- 荒川正夫 1998 「中世前期の館跡と出土遺物」『大久保山VI』早稲田大学本庄校地文化財調査報告6 早稲田大学
- 石川日出志 2003 「神保富士塚式土器の提唱と弥生中期土器研究上の意義」『土曜考古』第26号 土曜考古学研究会
- 石塚和則 1986 『将監塚－縄文時代－』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 岩田明広 1998 『今井条里遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第192集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 上野真由美・田村朋美 2012 「埼玉県反町遺跡出土のガラス小玉とガラス小玉鋳型について」『研究紀要』第26号  
埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 臼井洋輔 2007 『謎を秘めた古代ビーズ再現』 吉備人出版
- 梅沢太久男・石岡憲雄他 1981 『六反田』 埼玉県立歴史資料館
- 大熊季広 1998 「児玉町山崎上ノ南遺跡」『第31回埼玉県遺跡発掘報告会発表要旨』 埼玉考古学会他
- 太田博之・佐藤好司他 1991 『本庄遺跡群発掘調査報告書V－公卿塚古墳－』本庄市埋蔵文化財調査報告第19集 本庄市教育委員会
- 太田博之・増田一裕・松本 完他 2002 『東五十子・川原町』 東五十子遺跡調査会
- 太田博之 2001 『旭・小島古墳群－前の山古墳－』本庄市埋蔵文化財調査報告第23集 本庄市教育委員会
- 太田博之・松本 完他 2003 『宥勝寺裏埴輪窯跡・宥勝寺北裏』本庄市埋蔵文化財調査報告第26集 本庄市教育委員会
- 大谷 徹・田中広明他 1990 『秋山古墳群－庚申塚古墳・諏訪山古墳の調査－』児玉町史資料調査報告書 古代 第2集 児玉教育委員会
- 小野和之他 1994 『神保富士塚遺跡』群馬県埋蔵文化財調査団
- 神川町教育委員会編 1989 『神川町誌』 神川町
- 恋河内昭彦 1995 『南共和・新宮遺跡』児玉町遺跡調査会報告書第6・7集 児玉町遺跡調査会
- 恋河内昭彦 2009 『真鏡寺後遺跡IV－G地点（真鏡寺館跡）の調査－』本庄市遺跡調査会報告第24集 本庄市遺跡調査会
- 恋河内昭彦 2015 『長沖古墳群 XV－長沖203号墳の調査－』本庄市埋蔵文化財調査報告書第43集 本庄市教育委員会
- 小久保徹・柿沼幹夫他 1978 『東谷・前山・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集 埼玉県教育委員会
- 小林康幸 2001 「埼玉県下に分布する永福寺式軒瓦について」『埼玉考古』第36号 埼玉考古学会
- 埼玉考古学会 1986 『埼玉考古 30周年記念シンポジウム資料』埼玉考古学会
- 埼玉県立さきたま史跡の博物館 2014 『ハニワの世界』
- 坂詰秀一 2003 第1回企画展『写真で見る日本古代木造塔の心礎－岩井隆次氏寄贈写真による－』立正大学博物館
- 坂本和俊・柿沼幹夫・書上正博・利根川章彦他 1986 『埼玉県児玉郡神川村前組羽根遺跡発掘調査報告』前組遺跡発掘調査団
- 坂本和俊 1996 「武藏の前方後円墳」『東北・関東における前方後円墳の編年と画期』第1回東北・関東前方後円墳研究会発表要旨資料 東北・関東前方後円墳研究会
- 佐々木幹夫・高橋龍三郎・守茂和他 1980 『宥勝寺北裏遺跡』宥勝寺北裏遺跡調査会
- 佐藤好司 1997 『旭・小島古墳群－開拓1号墳発掘調査報告書－』本庄市遺跡調査会報告第2集 本庄市遺跡調査会
- 三宮昌弘 2005 『船橋遺跡III』大阪府文化財センター調査報告書題129集 大阪府文化財センター
- 菅谷浩之 1984 『北武藏における古式古墳の成立』児玉町史資料調査報告第1集 児玉町教育委員会・児玉町史編纂委員会
- 菅谷浩之 1976 『宥勝寺北裏埴輪窯跡』『本庄市史』資料編 本庄市
- 鈴木徳雄 1991 「塩谷氏館跡と児玉党の形成」『真鏡寺後遺跡III－C・F・D地点の調査－』児玉町文化財調査報告書第14集 児玉町教育委員会
- 鈴木徳雄・丸山修 1992 「児玉郡地域の縄紋時代遺跡概観」『児玉郡市における埋蔵文化財の成果と概要』埼玉県教育局指導部文化財保護課・児玉郡市文化財担当者会



- 鈴木徳雄 1995 「古代児玉郡の土地利用と方形館の成立」『堀向・藤塚A・柿島・内手B・C・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第18集 児玉町教育委員会
- 鈴木徳雄 1989 『真下境東遺跡』児玉町文化財調査報告書第9集 児玉町教育委員会
- 鈴木徳雄 2002 『古代の児玉郡市－山崎上ノ南遺跡出土の木簡をめぐって－』 児玉地区文化財保護協会
- 鈴木徳雄他 2010 『田端中原遺跡』本庄市遺跡調査会報告第29集 本庄市遺跡調査会
- 関 義則・宮代栄一 1988 「県内出土の古墳時代の馬具」『紀要』第14号 埼玉県立博物館
- 谷一 尚 1993 『ガラスの比較文化史』 杉山書店
- 玉林美男 1997 「永福寺について」『浄土庭園と寺院－永福寺創建800年記念シンポジウム記録集－』 鎌倉市教育委員会
- 田村朋美 2013 「西方地域のガラス玉」『シルクロード～オリエントの世界～』 海の道むなかた館
- 千々石實 1974 「板碑」『日本考古学の現状と課題』 吉川弘文館
- 徳山寿樹 2005 「児玉町東小平中山遺跡の調査」『情報』25 埼玉考古学会
- 中門亮太 2012 『大久保山－浅見丘陵の土地利用史－ 展示図録』 早稲田大学會津八一記念博物館
- 長滝歳康・中沢良一 2005 『南志渡川遺跡 志渡川古墳・志渡川遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第16集 美里町教育委員会
- 野口泰宣 1991 「児玉党塙谷氏と塙谷郷」『真鏡寺後遺跡III-C・F・D地点の調査－』児玉町文化財調査報告書第14集 児玉町教育委員会
- 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 2000 『飛鳥池遺跡』飛鳥資料館図録第36冊
- 細田 勝・富田和夫・利根川章彦 1984 『向田・権現塚・村後』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 本庄史市編集室編 1986 『本庄市史 通史編Ⅰ』 本庄市
- 本庄史市編集室編 1989 『本庄市史 通史編Ⅱ』 本庄市
- 増田逸郎・小久保徹他 1977 『塙本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集 埼玉県教育委員会
- 増田逸朗・坂本和俊他 1986 『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県県民部県史編さん室
- 増田一裕 1987 『南大通線内遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第9集 本庄市教育委員会
- 増田一裕 1990 『本庄遺跡群発掘調査報告書IV－御堂坂2号墳の調査－』本庄市埋蔵文化財調査報告第16集 本庄市教育委員会
- 増田一裕 1992 「児玉地域の旧石器時代」『児玉郡市における埋蔵文化財の成果と概要』 埼玉県教育局指導部文化財保護課・児玉郡市文化財担当者会
- 増田一裕 1997 『本庄歴史缶』 本庄市教育委員会
- 松本 完・町田奈緒子 2002 『大久保山遺跡浅見山I地区(第2次)・北堀前山古墳群(第2・3次)発掘調査報告書』 本庄市遺跡調査会報告第6集 本庄市遺跡調査会
- 松本 完・的野善行他 2006 『旭・小島古墳群-林地区I-』本庄市埋蔵文化財調査報告書第3集 本庄市教育委員会
- 松本 完・大熊季広・藤波啓容・亀田直美他 2009 『浅見山I遺跡(Ⅲ次)・久下東遺跡(Ⅲ次)A1・B点地点・北堀久下塙北遺跡』本庄市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集 本庄市教育委員会
- 松本 完 2015 『北堀新田前遺跡II(A2・A3地点)・北堀新田遺跡IV(A2・B地点)・久下東遺跡VIII(G3地点)』 本庄市埋蔵文化財発掘調査報告書第44集 本庄市教育委員会
- 村松 篤 1997 「4. 埼玉県北部地域の様相」『埼玉考古 別冊第5号-特集号 埼玉の旧石器時代-』埼玉考古学会
- 宮井英一 1989 『古井戸-縄文時代-』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宮田忠洋 2011 『新宮遺跡II』本庄市遺跡調査会報告第42集 埼玉県本庄市遺跡調査会
- 森田真一 2014 『上杉顕定 古河公方との対立と関東の大乱』 戻光祥出版
- 矢内勲・日沖剛史・高橋清文他 2007 『平遺跡発掘調査報告書-A~E地点の調査-』 神泉村遺跡調査会
- 柳田敏司 1964 「埼玉県児玉郡児玉町生野山将軍塙古墳発掘概報」『上代文化』第34輯 國學院大學考古学会



## **本庄市の遺跡と出土文化財**

平成28年3月31日

発 行 本庄市教育委員会文化財保護課  
埼玉県本庄市本庄3-5-3  
印 刷 山進社印刷株式会社